かかつて捕へられた或る狐の頸に、その朝出雲の大名が書いた手紙が結んであつたといふ話が松江にある。

註。狐の使者は人目に見られずに旅行する。しかし若し罠で捕られるか、又は怪我をすると、彼の魔力が失せて、人に姿を見られる。

數千の石の狐がある、松江の御城内の稲荷様は、松平家が稲荷へ對してでなく、狐へ對して信奉の念篤い顯著なる證據だと、田舍の人々は考へてゐる。

しかし現今では、各〻の種があらゆる他の種に發達してゆくやうな、此幽靈の如き動物學に於て、明確なる類別をなすことは、最早不可能である。百姓の信心家の茫漠たる觀念のために、狐の靈氣と『尊い食物の魂』は、途方もなく混淆してしまつたので、兩者を區別することも出來ない。實際古の神道の神話は、『尊い食物の魂』に就いては、全然明白であるが、狐の問題に就いては何も云つてゐない。が、出雲の百姓は、歐洲舊教國の百姓の如く、自から神話を作るのだ。稲荷へ對して祈願するのは、惡神としてか、或は善神としてかと尋ねる時には、彼等は稲荷は善神で、稲荷狐は善い狐だと答へるだらう。彼等は白狐と、黑狐――崇拜すべき狐と殺すべき狐――こん〳〵と叫ぶ善い狐とくわい〳〵と啼く惡るい狐のことを諸君に語るだらう。しかし狐に憑かれた百姓は、『私は稲荷様だ――山伏の稲荷様だ』とか、または他の稲荷の名を擧げて叫ぶ。

五

妖狐には三つの惡癖があるものとして、出雲では特に恐れてゐる。第一は復讐のため、又は單なる惡戯のため、魅惑によつて、人を欺くことである。第二には家來として、ある家の内に住み込むので、近隣からその一家は怖いものと思はれる。第三の最も惡るいのは、惡靈となつて、人の身體に入つて、狂亂苦惱に陷らしめることだ。この惱みを狐憑きといふ。

人を欺くために妖狐が最も好んで粧ふのは、美しい女の姿だ。その次には青年の形を假りて、異性を迷はすことである。狐の女の奸計について書かれたり、話された物語は數へ切れない。して、かの狡猾な手管にのせて、男を擒にし、一切財産を奪ひとる種類の危險な女は、言語道斷の侮辱なる『狐』といふ語によつて一般から呼ばれてゐる。

狐は決して眞に人間の形を帶びるのではなく、一種の磁石力によつて、或は魔法的毒氣

を擴げて、實際人間の形のやうに人をして信ぜしめるのだといふ人も澤山ある。

狐は必ずしもいつも惡るい目的のために、女に化けるといふのではない。次のやうな話が幾つもあるし、また一つの極めて立派な劇もある。ある狐が美女の形になつて、男と結婚し、子供を生んだ――それは全く以前に受けた恩惠に對する感謝からであつた――家庭の幸福は、たゞその夫婦の間に出來た子供の、奇異なる肉食的性癖のために擾されただけであつた。單に惡魔的目的を果すためには、女の形が必ずしもいつも最上の假粧ではない。全然女の魅力に無感覺な男もあるのだ。しかし狐の方でも決して、假粧の方法には窮しない。彼はプローテウス[譯者註]よりも更に多くの形に化ける。加之、彼は人をして彼の思ひ通りに、見たり、聞いたり、想像したりさせ得る。彼は人をして時間と空間を離れて物を見させる。彼は過去を思ひ起こさせ、未來を悟らせる。彼の力は西洋思想の輸入によつて破壞されてゐない。その證據には、僅かに數年前のこと、彼は幽靈列車を東海道線の上に走らせ、それがために非常に機關手を迷はし、怖れしめたてはないか？しかしすべての妖怪と同樣に、彼は好んで淋しい處へ出沒する。夜間彼は提燈の灯のやうな、奇怪なる狐火を危險な場所の邊に飛び廻らせるのが好きだ。この惡戯を防禦するには、交叉した指間にダイヤモンド形の空隙を存するやう兩手を合はせ、狐火の方に向つて、單に空隙を通じて息を吹き、或

る佛敎の文句を唱へると、如何なる遠方からでも怪火を消すことが出來る。

しかし狐が惡戯の力を發揮するのは、夜ばかりではない。白晝でも彼は人を誘惑して、屹度殺されさうな場所へ行くやう導いたり、或はある幻影を浮ばせ、又は地震が起こつたと思はせ、人を怖がらせてそこへ行くやうにすることもある。隨つて古風な百姓は、何か非常に奇怪なことを見ても、自身の眼の證據を容易に信じない。一八八八年に起こつた磐梯山の素晴らしい爆裂――大火山を吹き飛ばして斷片とならしめ、二十七方哩の面積を荒廢に歸せしめ、森林を倒し、河流の方向を轉ぜしめ、數個の村落を其住民とともに埋めた、災害の最も興味と價値ある目擊者は、一人の農夫であつた。彼は恰も芝居を眺めてゐる如く平氣に、附近の山巓から全慘劇を見守つてゐた。彼は灰煙と蒸氣の眞黑な柱が二萬尺の高さへ立騰つて、その絶頂で傘のやうに擴がり、太陽を遮蔽したのを見た。それから湯よりも熱い不思議な雨が、彼の身體の上にふりそゝぐのを感じた。やがて一切暗黑になつた。脚下の山が根元まで搖れるのを感じた。世界が破裂する音かと思はれる雷鳴を聞いた。それでも彼は一切萬事の終熄するまでじつとしてゐた。彼は初めから怖がらないことに決心したのであつた――彼の目に見え、耳に聞えるものは、悉く狐の魔法によつて、行はれたる瞞着だと考へたので。

譯者註。希臘神話の豫言の神。豫言を聽くために行く者があると、樣々に形相を變へて逃げる。

六

妖狐に憑かれた人々の狂氣は奇妙なものだ。彼等は裸體で絶叫し乍ら、町中をかけ廻ることもある。時としては横に倒れたまゝ口から泡を吹き、狐のやうな啼き聲をする。して、憑かれた人の身體の或る部分の皮膚の下に、動搖不定の塊まりが現れる。それは、特別な獨立の生命を有つてゐるらしい。針でそれを刺すと、忽ち他の場所へ滑つて移動する。いかにしつかり強い手で握つても、それは指の下から逸し去る。憑かれた人は、また以前に全然知らなかつた言葉を話したり、書いたりすると云はれてゐる。食べものは、たゞ狐が食べると信ぜらるゝもの——豆腐、油揚、小豆飯など——を食べるだけだ。しかも頗る多量に食べる——自身ではなく、憑いてゐる狐が空腹を感じてゐるのだと主張して。

狐憑きの犧牲となつたものが、家族親戚によつて、虐待を受けることは珍らしくない。——火で燒いたり、鞭つたりして、かやうにして狐を追拂ひ得ると思つてゐる。それから法印又は山伏——惡魔を拂う人——が迎へられる。惡魔拂ひをする人が、狐と議論を闘はせる。狐は憑かれた人の口を通して喋べる。狐が人に憑くことの邪惡に關する宗教的議論によつて降參させられると、彼は普通豆腐又は他の食物の澤山供給を受けるといふ條件で、立退くことに同意する。して、約束の食物は直ちに、狐が自からその家來と名乘つてゐる稻荷神社へ捧げられねばならぬ。人に憑く狐は、誰から送られるにせよ、或る稻荷の家來だと自稱するのが常である。尤も時には自からを神と呼ぶこともある。

憑かれた人が惡狐から解放されるや否や、彼はがつくり無感覺に陷つて、長い間倒れたまゝである。また、一たび狐に憑かれた人は、それから後、豆腐、油揚、小豆飯又は狐の好きなものを食べることが出來なくなると云はれてゐる。

註。法印或は山伏は惡魔拂ひをする佛教の僧である。嚴密に云へば、法印は山伏の高級なものであつた。山伏は常に魔除けと共に易占を行つたが、現政府によつてかゝる營業を禁ぜられたので、山伏等が所有してゐた小寺は大概廢絶した。しかし百姓の間では、佛教の陰陽師がまだ狐憑きの病氣を癒すために迎へられ、依然山伏と稱せられてゐる。

七

人狐は姿を見せないと信ぜられてゐる。しかし彼が静止せる水に近寄ると、その影が水中に見られる。だから『狐持ち』は、川や池のほとりを避けると信ぜられてゐる。

既に陳べた通り、見えない狐は人間に附屬してゐる。日本の奴婢と同様に、彼はその一家内のものだ。しかしその家の娘が嫁に行くと、狐は花嫁に隨つて、その新しい家へ行くのみでなく、またすべて結婚によつて、或は夫の家との血族のために、縁戚となつた家に狐の同族を繁殖させる。さて、あらゆる狐は七十五匹——七十五匹より多くもなく、少くもない——の家族を有つものと思はれてゐる。して、それには悉く食物を給せねばならぬ。かやうな狐は幽霊のやうに、一人づゝて食べるのは極く少量であるが、狐を持つてゐるのは、なか〳〵費用の要ることだ。『狐持ち』は一定の時刻に、狐に食物を供給せねばならぬ。して、狐が——全部七十五匹のものが——先づ始めに食べる。大きな釜で米を炊いてから、狐持ちは釜の側面を強く叩く。それから、蓋を取る。すると、狐が床を通して上つてくる。固より彼等が食べるのは、人間の耳には音も聞えないし、目にも見えないが、飯

は段々減つて行く。だから貧乏人が狐を持つのは、恐ろしい譯である。

が、狐を養ふ費用は、狐持ちに取つて最も輕少なる損害である。狐は一定せる倫理の法則を持たない。して、信用し難い召使たることを示してゐる。彼等はある家の繁榮を創め、また永くそれを維持することがある。しかし、七十五匹の目に見えぬ家來共の努力にも拘はらず、其家の上に重い災難がふりかかつてくると、彼等は突然あらゆる財寶を携へて逃亡する。それで、狐がその主人に齎らす一切の立派な贈與品は、他人から盗んできたものである。だから狐を持つてゐるのは、非常に不道德なことなのだ。また一般の平安にも危險だ。狐は妖怪であつて、人間的感受性を缺いてゐるから、或る用心をしないからである。彼は夜間隣家の財布を盗み出して、主人の戸口に置くことがある。それがために若し隣人が先きに起きて、それを見付けると、必ず喧嘩が起こる。

狐の今一つの惡弊は、内密に話されたことを公にして、望ましからぬ誹謗事件を起こすことである。例へば、小林さんの家の狐が、主人の心祕かに嫉んでゐる隣りの中山さんについて不平を洩らすのを聞くことがある。すると、この熱心な家來は中山さんの家へ行つて、その人の身體へ入り込み、激しく彼を惱まし、『私は貴下がかく〳〵の害を加へた、小林さんの家來です。小林さんが私に立去るやう命ずるまで、私は貴下を惱ますのです』

といふ。

それから、最後に擧げるのであるが、しかも最惡の危險は、彼等が家族の誰かに對して怒を發することだ。成程狐は親友となつて、彼が住む家を富ますこともあるが、人間ではなく、隨つてその動機と感情は人間のと異つて、妖怪のそれであるから、彼の不機嫌を招くことを避けるのは六づかしい。如何なる明白な原因もないのに、最も不意な瞬間に、彼が怒り出すことがある。して、また其結果がどんなことになるかもわからない。といふのは、狐は本能的無限の幻覺——凡てのものを聞く耳なる天耳通、他人の最も祕密の考を知る他思通、過去の知識なる宿命通、すべての現在を知る知識なる全觀通——と、また變形變質の能力を有してゐるからである。だから、假令人を迷はす特有の力を別にしても、彼は本來殆ど惡に對して萬能なのだ。

註。天狗、即ち無限の幻覺といふ問題に關する、頗る珍らしい論文——佐田介石といふ佛僧の說敎を反譯したもの——が、ゼー・エム・ゼームス氏の筆によつて、日本亞細亞協會紀要第七卷に現れた。その中には狐の超自然力に關する面白い考察が入つてゐる。

八

是等並に幾多他の理由によつて、狐持ちと信ぜらるゝ人々は忌避される。世人は狐持ちの家族との婚嫁を勿論行はない。て、出雲に於て幾多の美しく、且つ技藝の嗜みある娘も、一般から彼女の家庭が狐を宿してゐると信ぜられるために、夫を得ることが出來ない。概して出雲の娘は、自國以外へ嫁に行くことを好まぬ。しかし狐持ちの娘は、他の狐持ちの家へ嫁に行くか、又は遠い國に夫を見出さねばならぬ。資產のある狐持ちは、このいづれかの方法によつて、娘を片付けるのに甚だしい困難を感じないが、貧乏な狐持ちの立派な娘は、迷信のために止むを得ず未婚でゐなくてはならぬこととなる。それは彼女を愛し、彼女と結婚を欲するものが、皆無だといふのではない——學校を出でてゐるから、狐などを信じない青年もある。が、それは富豪でない以上、田舍ではまだ一般的迷信を無視しても、大丈夫安全といふ譯に行かないからである。かゝる反抗の結果は、啻に夫ばかりでなく、一家一族によつて負擔されねばならぬこととなる。それはなか〳〵考へねばならぬ結果なのだ。

狐持ちと信ぜられる人の中には、その迷信を利用することを知つてゐる人もある。概して田舍の人は狐持ちの感情を害することを恐れてゐる。狐持ちがその人目に見えぬ家來を遣はして、彼に憑かせる惧れがあるのだ。それて或る狐持ちは、その地方に對して非常な勢力を有つ。例へば米子の町に繁昌してゐる一人の町人がある。彼の意志は法律であり、彼の意見は決して逆はれない。彼は實際土地の支配者であり、して、またまさに富豪とならんとしてゐる。これは全く彼が狐持ちと思はれてゐるからだ。

力士の階級は、狐に憑かれないと誇つてゐて、狐持ちも、狐をも恐れない。非常に力の強い人々は、すべてかゝる妖怪の力に對して安全だと信ぜられ、狐が彼等を恐れると云はれてゐる。人に憑いた狐が『私は貴下の兄に入らうと思つたが、あまり力が強くて叶はなかつたから、誰でも貴下の一族の中の人に復讐をしようと思つて、貴下に入つたのです』と云ふ例が、幾つもある。

九

さて、狐の信仰は、人に影響するばかりでなく、財産にも影響する。それは出雲に於ける土地の價値に數十萬圓の影響を及ぼしてゐる。

狐持ちと思はれる家の土地は、適當の價に賣ることが出來ない。世人がそれを買ふのを恐れる。狐が新しい所有主に損害を及ぼすかも知れぬと信ぜられてゐるからである。買主を求める困難は、山奥の方で、田が壇をなしてゐる場合に最も大きい。かやうな場合の農作で緊要なのは灌漑である。いつも困難を排して、さま〳〵の巧妙なる工夫を施して水を引く。非常な渇水の季節には、百姓が水喧嘩をするに至ることもある。狐持ちの地面では、狐が甲の田から乙の田へ水を轉じたり、或は惡意のため、堤防に孔隙を作つて、作物を滅ぼしたりする危險がある。

この奇異なる信仰を利用する、拔目のない人も往々ある。松江の一紳士で、新式の立派な農業家は十五年前に、狐の恐怖といふ點に見込をつけて、出雲の東部で誰人も手を出さない廣大なる田地を買つた。その土地は彼の耕作法によつて、潤澤なる收穫を見た外に、

地價は六倍に及んだ。今日それを賣却すれば、彼は巨富を握り得るだらう。彼の成功と、彼が政府の官吏であつたといふ事實が、迷夢を醒ました。しかし、耕作の成功のみでは、迷信の呪から土地を救ふことは出來なかつたであらう。彼が狐を追拂ひ得た力は、彼の官吏といふ資格に基いたものであつた。百姓に取つては、政府といふ語は、呪符である。

實際、出雲で最も富み、最も成功せる農業家で、數十萬の財産を有する神門郡××村の○○さんは、殆ど一般の百姓から狐持ちと信ぜられてゐる。彼については珍らしい話が傳つてゐる。まだ貧乏であつた折、或る日森の中で白狐の子を發見したので、それを愛撫して、狐の好きな三種の食物――豆腐、油揚、小豆飯――を澤山與へたのだといふ人がある。また彼の家には、狐のために特別の座敷があつて、毎月一回、數百の人狐のために盛宴を行ふのだといふ人もある。しかし彼はすべて、かやうな噂を一笑に附し得て餘裕綽々だ。彼は上品な人物で、迷信の入り込まない教養ある社會では、餘程尊敬を受けてゐる。

一〇

人狐が夜間に訪ねてきて、戸を叩くときは、その叩き方に一種の掩ひをかぶせたやうな

音があるので、經驗ある耳には、狐だといふことがわかる。狐はその尾で戸を叩くからだ。戸を開けると、一人の男か、或は恐らくは美しい娘か居るだらう。して、その人物はたゞ途切れ途切れの言葉で挨拶をする。決して、完全に理解されるやうな言葉使ひをしない。狐は或る言葉の全部を發音する事が出來ない。たゞ一部分に止まる。例へば『西田さん』を『にし……さ……』、『でござります』を『てござず……』、『内ですか?』を『うち……で……?』といふ。それから、もし讀者が狐の友人であるときは、訪問者は何かの小さな進物を讀者に與へて、直ちに暗黑の中へ消え去る。その進物は何であらうとも、朝に及んでそれを見るよりも、夜間の方が遙かに大きく見えるだらう。狐の土産品は、たゞ一部分だけ眞實である。

或る松江の士族が、一夜歸宅の途中母衣町を通りかかると、一匹の狐が數匹の犬に追はれて、一生懸命に走つてゐた。彼が傘で犬を擊退したので、狐は脫する機會を得た。翌夜彼は誰かが戸を叩く音がして、開けて見ると、非常に綺麗な娘がそこに立つてゐた。彼女は『昨夕は若し御親切を受けませんでしたら、屹度死にましたのでせう。どう御禮を申上げてよろしいか存じません。これは誠に御粗末なものですが』と云つて、彼の足許へ小さな包を置いて去つた。彼が包を解いて見ると、二羽の美しい鴨と銀貨二枚――長い重い葉

狀の貨幣で、一枚が十弗乃至二十弗の價を有し、今では古物蒐集家が熱心に探してゐるもの――が現れた。暫くすると、一枚の銀貨は彼の眼前で一片の草に變つた。他の一枚はいつまでも眞正のものであつた。

松江の醫者、杉貞庵は或る夜臨産の場合に迎へられて、市外の白鹿山にある家へ行つた。下男が家紋の附いた提燈を携へて、彼を案内した。彼は堂々たる邸宅へ着し、鄭重なる接待を受けた。産婦は無事に天晴れ立派な男兒を生んだ。一家のものは醫者に對して、饗應至らざる處なく、澤山の金品を贈つて彼を歸した。翌日彼は日本の作法に從つて、謝禮を陳べるために行つたが、その邸宅は見付からなかつた。實際、白鹿山には森の外、何もなかつた。家へ歸つてから、彼は再び黄金を調べてみた。いづれも眞正の貨幣であつたが、唯一枚は草と變つてゐた。

一一

稲荷に關する迷信を利用した珍らしい話がある。

數年前、松江で非常に繁昌した豆腐屋があつた。豆腐は大豆から製して、外見は立派な

カスタードに似てゐる。すべての食品中、狐は豆腐と蕎麥を一番好いてゐる。嘗て一匹の狐が美裝せる人間に化けて、湖畔の有名な蕎麥屋なる、乃木村の栗原屋へ行つて、多量の蕎麥を食べたといふ傳說がある。しかし、その客が去つてから、彼の拂つた金錢は鋸屑に變つた。

豆腐屋の主人の經驗は、これと異つた。或る見すぼらしい服裝の男が、毎晩一丁の豆腐を買ひにきて、長く飢ゑてゐたやうに急いで卽座に食べた。彼は數週の間、毎夜來て、しかも一言も言葉を交じへなかつた。しかし主人はある晩、この男の襤褸の下から、突出してゐる髦々たる白い尾の尖端を見た。この光景はこの主人に不思議な驚異と、凄い希望を與へた。その夜から彼は、その神祕な客を追從的慇懃を以て待遇し始めた。が、一ヶ月も立つてから漸つと、客は言葉を發した。それは次の如くであつた――

『私は人間のやうに見えるてせうが、人間ではありませぬ。たゞ貴下を訪ねるために、人間の形を冒したのです。私は貴下が毎度參詣される、高松の稲荷から來ました。貴下の信心と親切に酬ひようと思つて、今日は貴下を非常な危險から救ふために來ました。その譯は、私の有つてゐる靈力で、明日この町に大火事のあるのがわかつたのです。町内の家は皆燒けても、この家は燒けないやうにします。この家を救ふために、私は魔除けをしよ

うと思ひます。が、それをするには、貴下の倉庫を開けて私を入らせ、誰も覗いて見てはいけません。人に見られると、魔除が駄目になりますから」

主人は篤く感謝の言葉を陳べて、倉庫を開いて、恭しく稲荷様を入れ申し、家族や僕婢に、誰も見ないやうにと嚴命した。この命令は非常によく遵奉されたので、倉庫内の一切の物品と貴重品全部は、夜間易々と運び去られて了つた。翌日、倉庫は空虛になつてゐるのがわかつた。

今一人松江の富裕な商人が、容易に或る贋稲荷の餌となつたといふ、證據確實な話がある。この稲荷は彼に夜間或る宮へ、幾何かの金額を捧げて置けば、彼の平生の信心が酬ひられて、朝になると、二倍になつてゐるだらうと告げた。商人は數回小額の金を宮へ捧げて、それが一夜の内に二倍になることを發見した。それから、彼はもつと巨額を置いても、同じく増加したので、數百弗の冒險を試みて、それも二倍になつた。最後に彼は銀行から彼の所有金全部を引出して、或る夜それを宮へ置いた——すると、彼はもはや再びその金を見なかつた。

一二

靈狐を題材とせる文學は頗る夥しい。古いのは十一世紀からのもある。古い物語や、近代の安價な小説や、歴史的傳説や、通俗のお伽噺の中で、狐は驚くべき役割を演じてゐる。狐については非常に美はしい、非常に哀れな、非常に怖ろしい話も隨分ある。大學者によつて論究された狐の傳説もある。また日本のあらゆる子供の知つてゐる傳説——玉藻ノ前の歴史のやうな——もある。玉藻ノ前は鳥羽天皇の美しい寵姫で、その名は諺となつたほどであるが、實は結局九尾金毛の妖狐とわかつたのであつた。しかし、狐の文學の最も興味ある部分は、日本の戯曲に存してゐる。戯曲の中では、通俗の信仰が屢々最も滑稽的に反映されてゐる。十返舍一九の膝栗毛の喜劇から次に拔いたもののやうに——

〔喜多八と彌次が、江戸から大阪へ向つて旅行してゐる。赤坂の少し手前で、喜多八はよい宿を取つておくために一ト足先きへ急ぐ。彌次はゆつくりと歩いて行つて、路傍に老婆が出してゐる茶店に一寸休んだ〕

老婆。御茶を召上がりませ。

彌次。難有う。これから次の驛へは――赤坂へは、どれ位あるだらう？

老婆。まあ一里位で御座います。しかし御伴侶樣がなくては、今晩こゝて御泊まりになつた方がよろしう御座いますよ。途中に惡るい狐がゐまして、道中のお方を誑ましますからら。

彌次。それは怖い話だ。しかし僕は行かなくちやならん。伴侶が先きへ行つて待つてゐるんだ。

〔茶代を拂つてから、彌次は出掛けたが、夜は眞暗で、老婆から聞かされた話のために、大いにびく〳〵してゐる。可なり歩いてから、不意にこん〳〵と狐の啼く聲がした。いよいよ怖くなつて、彼は聲の有らん限り絶叫した〕

彌次。僕の側へ來て見ろ、狐め、すぐ殺してやるから！

〔喜多八も老婆から話をきいて、喫驚したので、彌次を待たうと決心して、暗黑の中で、『僕が待つて居ないと、我輩兩人とも、屹度誑されてしまうだらう』と、獨り言をいつてゐる。突然彌次の聲が聞えたので、大聲で彼を呼ぶ〕

喜多八。おい、彌次さん！

彌次。君、そこで何してるんだ？

喜多八。僕は先きへ行かうと思つたんだが、怖くなつたから、立止まつて、君を待つことにしたんだよ。

彌次。（狐が喜多八に化けて、誑まさうとするのだと思つて）僕を誑まさうとしてるだらう？

喜多八。變なことをいふねえ！僕はうまい餅を君に食べさせうと思つて、買つてきてるんだよ。

彌次。馬糞は食べられないよ！

註。狐は人に馬糞を食べさせて、餅を食べてゐると思はせたり、湯に浴る積りで下水溜に入らせたりして、面白がつてゐるものと、一般に信ぜられてゐる。

喜多八。疑つてはいかんよ！――僕は實際喜多八だよ。

彌次。（猛烈に喜多八に跳びかかつて）さうだ、貴樣は僕を欺くために喜多八に化けたのだ。

喜多八。君は何うしたんだ？僕を何うするといふんだ？

彌次。殺してやるんだ！（喜多八を倒す）

喜多八。やあ！ひどい目にやられた。どうかゆるしてくれ。

彌次。實際怪我をしたといふなら、貴樣本當の姿を見せてくれ。（兩人相もがく）

喜多八。何をするんだ？そこへ手をやつて。

彌次。貴樣の尻尾を觸はつて見るんだ。すぐ尻尾を出さなけりや殺すぞ！（手拭を取出し、喜多八の兩手を背後で縛りつけて、追ひ立てて行く）

喜多八。どうか解いてくれ！まづ解いてくれ！

（兩人はやがて殆ど赤坂へ達した。すると、彌次は犬を見付けたので、それを呼んで、喜多八を近く犬に引きずりよせた。狐が如何に化けの皮を被つてゐても、犬は看破するものと信ぜられてゐるから。しかし犬は喜多八に一向頓着しない。彌次はそこで喜多八を解いて詫びを述べる。兩人とも先刻、恐れたことを笑ひ合ふ）

一三

しかしまた二三の頗る愉快な形式の狐の神もある。

例へば松江の非常に邊鄙な町――旅人は道に迷ふた場合の外は、行きさうにもない町――

――に、地行場（ちぎやうば）の稲荷又は子供稲荷と呼ばれるのがある。それは極めて小さいけれども、また極めて有名である。最近一對の新しい石の狐が献納された。餘程大きくて、齒には金が塗られ、一種可笑しげな容貌を帶びてゐる。これが門の兩側に坐つて、雄は顎を開いて齒を露出し、雌は愼ましやかに、口を閉ぢてゐる。

註。この形式は唐獅子とか、柱や壁板に刻める登り龍、降り龍の如き、社寺の象徴的護衛の態度に對して、昔からの藝術的法則と見える。熊野神社では、隨身さへも、一方は口を開き、他方は口を閉ぢて、表現されてゐる。

かやうな二つの表象の區別の起原について、私が質問をした時、若い佛教學者が告げた。この形の雄像は阿といふ音を發音し、口を閉ぢたる雌像は、吽といふ鼻音を發音してゐるものと思はれてゐる。阿と吽は希臘の字母のアルファとオメガに相對して、即ち始と終を象徴してゐる。法華經に於て、佛陀もまたかやうに、宇宙の最始であり、最終であるものとして、且つ世界の父として、自身を啓示してゐる――婆伽梵神歌に於ける訖哩史那（クリシユナ）の如く。

境内には幾多の鼻や頭や尾の損はれた、古い狐の像がある。二個の大きな唐獅子がある。その前へ奉納の草鞋を掛けてある。足の痛い人が唐獅子樣に平癒を祈願したのだ。それから荒神の祠もあつて、子供等の人形の遺骸を、澤山そこに置いてある。

註。通例死んだ子供の人形や、人形の破損したのを荒神に與へるのであるが、一つ例外がある。男兒の節句に進物として男兒にいつも與へる青道及び學問の神の像は、破損した時には、荒神に與へないで、天神樣自神へ與へる。少くとも、それが松江の習慣である。

地行場の稲荷社の格子戸には、八重垣神社と同じく、無數の小紙片が結ばれて、白くなつてゐる。紙片は祈願を意味する。しかしその祈願が特別で且つ珍らしいものだ。戸の左右と上方に、奇異な小さな奉納の繪が壁に貼つてある。それは大抵、子供が風呂槽に入つてゐる光景、又は子供が頭を剃つて貰ふ光景を描いてある。また一二枚は子供の遊戯せる畫もあつた。さて是等の象徴と驚異を解釋すると、次の通りである——

たしかに讀者が知る如く、日本の大人と同じやうに、日本の子供も毎日湯に浴せねばならぬ。また極小さな兒女の頭を剃ることも、習慣となつてゐる。しかし遺傳的忍耐と古い習慣を守らうとする強い固有の傾向にも關らず、幼兒の柔かな皮膚に取つては、剃刀も湯もなか〳〵堪へ難い。何となれば日本の湯は非常に熱いからである。（概して華氏百十度を下らない）して、西洋の大人でも、それを辛抱して、その衞生的價値を味得するには、徐々と馴れて行かねばならぬ。また日本の剃刀は、西洋のほど機械が完全でなく、また石鹸泡をも用ひないので、最も熟練な人が使用しないと、少々傷け易い。それから、日本の

兩親達は子供に對して暴虐でない。彼等は愛撫したり、賺かしたりする。減多に強制したり、威嚇したりせぬ。だから、嬰兒が入浴に抵抗したり、剃刀に對して反抗する場合、兩親は全然窮境に陷るのだ。

頭を剃るのと湯に浴ることを拒む子供を持つた兩親達は、地行場の稲荷樣に頼む事にする。稲荷樣がその使者を一匹遣はし、子供を面白がらせ、頭を剃つたり、湯に入つたりする新生活に調和させ、從順で且つ幸福であるやうにして下さるやう祈願する。また子供が惡戯好きであるとか、或は病氣になつた場合にも、この稲荷樣にたよる。もし祈願成就の折は、聊かの献品をする——時としては、戸に貼附けてあるやうな、祈願の效果を描いた畫を捧げる。かやうな畫の數多いことと、また神社の繁昌から判斷すると、子供稲荷樣はたしかに、その評判に値ひするらしい。私がその境内で過ごした數分間にさへ、嬰兒を背負つた若い母が三人も、參詣してきて、祈願をかけ、献げ物をするのを私は見た。私は其内の一人の子供——非常に綺麗な子供——は、まだ一度も頭を剃られたことの無いのに氣がついた。これは明らかに頗る頑固な難物と見えた。

地行場の稲荷からの歸途、私をそこへ案内して呉れた、下男が次の話をきかせた。彼の

直ぐ隣りの人の息子、七歳になるのが、或る朝のこと、遊びに出てた限り、二日間見えなかつた。折々親類の内へ行つて、一兩日位泊まつてくることもあるので、最初は兩親もあまり不安に思はなかつた。しかし翌日の夕方、親類の内に來てゐないことがわかつたので、早速捜索にかかつた。が、捜索も、聞合せも無效に了はつた。すると、夜更けて、戸を叩く音が、その子供の家で聞えて、母は急いで出てて見ると、遊びに出てたいたづら兒は、地上にすや〳〵眠つてゐた。誰が戸を叩いたのか、それはわからなかつた。子供を呼び醒ますと、笑つて、語つていつた——彼が見えなくなつた朝、彼は殆ど同じ年配て、非常に美しい眼を有する子供に逢つた。その友達が彼を森の中へ誘つて、終日終夜とまた翌日も、珍らしい遊戯をして面白く遊んだ。しかし彼はたうとう眠たくなつたので、友達は彼を家へ送つてくれた。彼は空腹を感じなかつた。友達は明日また來るといふ約束をした。が、その不思議な友達は、決して來なかつた。またそのやうな様子の子供も、近所にはなかつた。畢竟それは、狐が少しばかり惡戯を演じてみようとしたのであつた。惡戯の相手となつた子供は、いつまでもその愉快な友達を慕つてゐた。

一四

三十年ほど前のこと、松江に鳶川といふ力士上がりの男がゐた。大の狐嫌ひて、遠慮會釋もなく狐を狩り立てて殺した。非常な腕力家だから、大丈夫狐の怪力には羅らぬものと、一般から思はれてゐた。しかし彼は當り前の死にやうはしまいと、預言する老人達もあつた。この預言は當たつた。鳶川は餘程不思議な死にやうをした。彼は極めて惡るじやれが好きてあつた。ある日、彼は翼や鍵爪や長い鼻のある天狗に變裝して、樂山(らくざん)に近い神聖なる森の中にある高い樹に登つた。暫くすると、無邪氣な百姓共が、そこへ蝟集してきて、いろ〳〵の品物を献げて彼を拜んだ。彼は此光景を見おろして、面白がり乍ら、天晴れ天狗の腕前を示さうと思つて、枝から枝へと、輕快に飛んで行かうとする際、足場を蹈み損ひ、落ちて、頸の關節が外づれて死んだ。

一五

しかし是等の奇異なる信仰は、急速に亡びつゝある。年々稻荷の社祠は、ます〳〵頽廢して行つて、再建されるのは決してない。年々彫像師が作る狐の數は減じて行く。年々狐憑きの犧牲となつて、病院――獨逸語を操る日本の醫者が、最も進歩せる科學的方法によつて治療を施す病院――へ送られる患者も少くなつた。その原因は古い信仰の衰頽に存するのではない。迷信は宗教の亡びたる後にも殘るのだ。況してそれは西洋から來た宣教師輩の勸誘的努力によるのでもない――彼等の多くは惡魔といふものの熱誠なる信仰を告白してゐるのだ。それは全然教育のためだ。迷信に取つて萬能力を有する敵は、公立學校である。そこでは近代の科學が、宗派または偏見によつて、妨げられることなく教へられてゐる。そこでは極貧な人々の兒童も、西洋文明に接することが出來る。そこでは十四歳位の男兒、又は女子にして、チンダル、ダーウキン、ハクスレー、或はハーバート・スペンサアなど、諸大家の名を知らぬものは一人もない。惡戯の際に狐の神の鼻を毀はす小さな手は、また植物の進化や、出雲の地質に關する論文を書くことが出來る。新しい學問によ

つて、新しい時代の人々に啓示されたる、美しき、自然そのまゝの世界には、妖狐の存すべき餘地はない。全能の陰陽師と改革者は子供なのだ。

知られぬ日本の面影　下卷

第十六章　日本の庭

一

大橋川のほとりの自分の小さな二階家は、鳥籠のやうにちんまりとした家ではあるが、暑氣が近づくと――部屋の高さが蒸汽船の船室（ケビン）と殆んど同じで、普通の蚊帳が吊られぬ程狹いのだから――樂（らく）に暮すには餘り小さ過ぎることが知れた。自分は湖水の美しい眺望を失ふ事は遺憾であつたが、市の北部へ、崩れかかつて居る城の背後の頗る閑靜な町へ、轉居するの必要を感じた。自分の今度の家は或る高位のサムラヒの昔の住宅で、カチウヤシキである。城のお濠の緣にある街路、いなむしろ道路とは、上を瓦が蔽うて居る長い高い壁で仕切られて居る。お寺の入口にあるのと殆んど同じ大きさの門口へ、低い幅廣い石段で昇つて行く。その門の右手に、壁から突き出て、太い棧のある、大きな木造の籠のやうな、見張窓がある。封建時代には、其處から、武裝した家來が前を通る總ての人に――棧

は密に設けてあつて、その後ろに居る人の顔は、道路からは見えぬのだから、目に見えぬ見張を――嚴しい見張を、いつもして居たものである。門の内側の、住所へ行くまでの處にもまた兩側に壁があるから、客は、許可を得なければ、何時も白いシャウジが締まつて居る家の入口を己が前に見得るだけである。あらゆるサムラヒの家同樣、住宅そのものはただ一階建てあるが、内には部屋が十四あつて、その部屋々々は高く、廣く、また美しい。悲しいかな、湖水の見晴らしも無ければ、惚々するやうな眺望も何一つ無い。松樹の遊苑に半ば隱された城がその頂上にある、オシロヤマの一部が、前側の壁の屋根の上に見える。が、それはたゞ一部分だけである。そして家の後ろのつい百ヤアド許りの處には、樹木の繁つた岡が在つて、地平線を遮斷して居るばかりでは無い、同樣にまた空の大部分をも仕切つて居る。が、然しこの幽閉には、この住宅の三方を取卷く非常に美しい庭といふ、否、むしろ一と續きの庭地といふ、佳い代償が存在して居る。幅廣い緣側からそれが見渡されるし、緣側の或る一角からは二つの庭を同時に眺め樂しむことが出來る。門の無い廣い出入口が眞ン中にある、竹と編んだ蘭草との障壁が、この遊園の三區の境界を示して居る。が、この構作物は眞の壁の役をさせる積では無い。それは裝飾的なもので、或る式の風景の庭造りが何處に終り、他の式の風景の庭造りが、何處から始まるかを表すだけのものである。

二

此處で一般に日本の庭に就いて二言三言述べたい。

日本人の花の活け方を少小――この技術を實地に知得するには、生來の本能的な美感の外に、數年の研究と經驗が要るから、唯それを見たばかりで――學び得た後で、其後で始めて人は西洋人の生花裝飾の思想は、全く野卑だと考へることが出來る。この觀察は何等輕卒な隨喜渴仰の結果では無くて、内地に長く居住して樹立し得た確信である。自分はただ日本の熟練家だけがその活け方を知つて居るやうな風に――花瓶の中へ單に小枝を突き込むのでは無く、恐らくは剪伐つたり姿を正したり、雅び極まる手細工をしたりに全る一時間の骨折をして――活けた、唯一本の花の小枝の言ふに言へぬ美はしさが解るやうになつて來たから、だから西歐人が『花束』と呼ぶものをば、花の野卑な虐殺であり、色彩觀念に對する凌辱であり、蠻行であり、言語道斷である、としか今は考へられないのである。それと稍〻同じ樣に、またそれに似た理由で、古い日本の庭はどんなものであるかを知つてから後は、我が本國の費用を盡した庭を想ひ出すと、自然を犯す不釣合な物を創造する

のに富なるものが、何を爲し遂げ得るかの無智な誇示としか考へられないのである。

さて日本の庭は花の庭では無い。また植物を栽培する目的で造られるのでも無い。十中九まではそれに花床に似たもの何一つありはせぬ。殆んど綠色の小枝一つ有つて居ない庭もあらう。綠色のものは全く何一つ無くて、さういふのは例外ではあるけれども、全然岩と小石と砂とから成つて居る庭もある。概して日本の庭は山水の庭であるが、その存在は或る定まつた大いさの地積に賴りはしない。一段歩でもよく數段歩でもよい。またほんの十尺四方でも宜い。極端な場合にはもつとずつと少くても宜い。或る種の日本の庭はトコノマに置くことが出來る程に小さく工夫し得るからである。大いさ果物皿ほども無い器物にしつらへた斯んな庭は、コニハ若しくはトコニハと呼ばれて居て、他の建物と建物との間にきつちり壓し詰められて、戸外の庭を作る地面を少しも有たない、小さな粗末な住宅

註。コンダア氏が記載して居る、トクワモン寺の院主の御殿の庭の如きがそれで、佛の敎に同じて石が頭を屈めたといふ傳說を記念せん爲め造られたものである。鳥取縣の東鄉の池で自分は殆んど全く石と砂とから成つて居る、頗る大きな庭を見た。設計者が傳へんと欲した感銘は、幾つかの砂丘を越して海へ近寄つて行くといふ感銘であるが、そのイリウジョンは美しいものであつた。

に時折見ることが出來る。（自分は『戸外の庭』と言ふ。日本の大きな家には、階上にも階下にも、戸内の庭のあるのがあるからである）このトコニハは普通には珍らしい鉢か、彫つた淺い箱か、又はどんな英語でも記述の出來ない奇妙な形の器の中に作られる。その中に、上に小文字的な小さな家が在る、小文字的な小さな小山が造られ、脊の曲つた極く小さな橋が架つて居る、顯微鏡的な池と小川が造られる。そして珍奇なちいちやな植物が樹木の役を勤め、妙な恰好した小石が岩の代りになり、頗る小さなトウロウがあり、多分頗る小さなトリキも亦一つありして――要するところ、或る日本風景の可愛らしい生きて居る雛形である。

記憶すべき今一つの一番重要な事實は、日本庭の美を理解せん爲には、石の美を了解する――或は少くとも了解することを學ぶ――必要があるといふ事である。人間の手が切り出した石の美では無い。たゞ自然が形づくつた石の美である。諸君は石に性格がある事、石に調子がありまた明暗がある事を感ずることが、しかも切に感ずることが出來なければ、日本の庭の藝術的意味の全部は、諸君に示顯され得ないのである。外國人には、その人がどんなに審美的であらうとも、この感情は研究に依つて修養する要がある。これは日本人には生來のものである。その人種の魂は自然をば、少くとも自然の映眼的形態に於て、我

我よりも無限に、より能く理解して居る。だが、西歐人のことてあるから、石の美の眞の感じは、日本人の石の使用法と選擇法とに長く慣れ親しんて、初めて得られるのてあるけれども、獲らるべき教訓の文字は、諸君の生活が內地に於ててあれば、身邊到る處に存在して居る。どんな街路を散歩しても、諸君が修むべき石の美學に於ける課業と問題とを眼にせずには居れぬ。寺院への進路に、道路の傍に、神聖な杜の前に、またあらゆる墓地に於ててもあるが、あらゆる公園と遊園とに於て、自然石の大きな不規則な平たい——多くは河床から採つたものて水に磨滅された——表意文字が彫りこんてはあるが、決して斫り刻みのして無い——石があるのに氣が付かう。是等は奉納の牌として、記念の碑として、墓石として、建てられて居るものて、神佛の形像が浮彫に刻まれて居る、尋常の伐石の柱やハカよりか遙か高價てある。それからまた、大抵な神社の前に、否、殆んど總ての大きな屋敷の地面にすら、激流の作用て磨滅した花崗岩か、或は他の堅い岩の大きな不規則な石塊をば、その上部に圓形の窪みを刳つて水鉢（テウヅバチ）に變へてあるのを見るてあらう。こんなものはどんなに貧しい村に於てても見うける石の利用のほん普通の實例て、若し諸君にして少しても生來の藝術的感念を有つて居らるゝなら、かういふ天然な形の方が石伐師の手に成つた、どんな恰好よりかどんなにか勝れて美しいか、早晩、必ず發見せ

ずには居れぬ。多分また諸君は、殊に國內を多く旅行すると、しまひには岩の表面に刻まれた文字を見るに慣れて來て、表意文字は自然の法則によつて、岩石構造の附物（つきもの）ててもあるやう、そんなものが全く無い處に、またそんなものがある筈が無い處に、文字か或は鑿（ほ）つた物は無いかと我知らず探して居ることを屢〻知るてあらう。そして石が、恐らくは、——日本人に對してさうのやうに、氣分と感じとを暗示する——個性的な或は人相的な貌を諸君に呈し始めることてあらう。實際、日本は、火山的高地がさうあり勝ちのやうに、特に石に暗示的形狀がある國てある。だからそんな形狀が、『岩と木の根と木の葉と綠の水の泡とに物を言はせた』出雲の鬼のことを云うて居る、あの古代（譯者註）の文よりかずつと前の或る時代に、この人種の想像力に訴へたことは疑ふべくも無い。

自然の形體が與へる暗示が、斯く認められる國に豫期さるゝやうに、日本には石に關する妙な信仰と迷信とが澤山ある。殆んどいづれの州にも、神聖だとか、物が憑（つ）いて居るとか、或はまた不思議な力を持つて居るとか、想像されて居る有名な石がある。鎌倉八幡宮の女の石、それから那須の殺生石、それから巡拜者がそれを恭敬する江ノ島の福石の如きそれてある。出家ダイタがそれに對つて佛の言葉を說いたら、頭を屈めたうなづき石の傳說の如く、また應仁天皇が、御酒（みき）に醉ひたまうて、『御杖（もち）以ちて大坂道の中なる大石を打

ちたまひしかば、[註]その石走り避りぬ！』といふ古事記にある古い話の如くに、石が感受性を表した傳說さへあるのである。

註。チエムバレン教授譯古事記二五四頁。

さて石はその美しさで評價される。だからその形が美しい爲めに選ばれた大きな石は、幾百弗の美的價値を有つことがある。そして大きな石が古風な日本庭の設計の骨骼卽ち骨組である。啻に一々の石がその特別な表現的形體の爲めに選擇される計りで無く、庭内の或は家屋近くの一々の石は、その目的或はその裝飾的義務を示す箇々別々な名を有つて居る。が然し自分は日本庭の民間傳說については、たゞ少し、極く少ししか諸君に語ることが出來ぬ。若し諸君にして石とその名に就いて、また庭園の哲理に就いて、もつと多く知らんと欲せらるゝなら、[註一]日本の山水庭園の造り方に關するコンダア氏の無比な論文と、日本の花の裝飾の技術に關する同氏の美しい本と、それからまたモオルスの日本の家庭に載つて居る簡單ではあるが面白い一章を讀まれたい。[註二]

註一。この一篇を書いた後に、コンダア君は『日本の山水庭園術』といふ繪入の美しい書物を出版した。（一八九三年ジョシュア・コンダア著。東京にて出版）この書の寫眞附錄は東京及び其他の最も有名な庭

園の景色を見せて居る。

註二。レイン博士の日本庭園に關する觀察は、正確といふ點に於ても、またこの問題の理解といふ點に於ても、推薦が出來ない。レインはたゞ二ケ年を日本で費しただけで、それもその大部分は漆工、絹と紙との製造並びに他の實際的な事柄の研究に費したのである。それ等の問題に關しては、その著作は正當の尊重を受けて居る。が然し日本の風俗習慣藝術宗教及び文學に關しての章は、それ等の題目を知ること極めて少きを示して居る。

譯者註。出雲國造神賀詞（イヅモノクニツコガカムホギノコトバ）の中に『豐葦原の瑞穗國は、蓋は五月蠅なす皆沸き、夜は火瓮なす光く神あり、石根木根立ち、青水沫も事問ひて荒ぶる國なり』とあり。

三

在るべくも無い山水を、或は純理想的な山水を造らうといふ努力は、日本の庭ではされない。その藝術的な目的は本當の山水の人目を惹く處を忠實に模倣し、且つ眞の山水が與へる眞の印象を傳へるに在る。だからして同時に一つの繪であり、また一つの詩である。恐らくは繪の方よりも詩の方が餘計な位であらう。それは、自然の風景が、その移り變る相好で、喜悅の念或は森嚴の念を、物凄い感じ或は美しい感じを、力の感念を或は平和の

感念を與ふるが如くに、山水庭園師の勞苦に成る自然の眞實な反映は、啻に美の印象を與へるばかりでは無い。精神に或る氣分を起こすに相違無いからである。古昔の偉大な山水庭園師は、卽ち始めてこの技術を日本に輸入し、後ち之を發達せしめて、殆んど玄妙とも云ふべき一つの學問となした佛敎の僧侶共は、その說をこれよりも尙ほ遠くへ進めた。彼等は道德的敎訓を庭園の設計に表現する、――貞節とか、信心とか、敬虔とか、滿足とか、平靜とか、夫婦の至福とかいふ抽象感念を、それて表現する事は可能だと思つて居た。だからして、詩人か、武士か、哲學者か、又は僧侶か、その持主の性質に應じてそれ〴〵庭園を工夫した。さういふ古い庭ては（悲しいかな、その技術は平凡極はまつた、西洋趣味の影響に萎んて失せ去りつゝあるが）自然の或る氣分と、人間の或る氣分の東洋的な珍稀な意想とが一緒に表現されて居たのてある。

自分は自分ところの庭の主たる區分が、人間のどんな感念を反映させる考てあつたものか解らぬ。語つて吳れる者は一人も居ない。それを造つた者共は、魂の永遠の輪廻に、長の幾代の古昔に世を去つてしまつた。然し一つの自然詩として、どんな說明者も要りはせぬ。その主な區分は、南に面して、地面の前方を占めて居る。そして西に伸びて庭の北の

區分の境に至り、その境とは妙な隔ての壁て半ば分たれて居る。それには苔の厚く蒸した大きな岩があり。水を容れて置く妙な恰好の種々な石鉢があり。年月の爲め綠になつた石燈籠があり、また、城の屋根の尖つた角に見るやうな――その鼻を地に着け、その尾を空に立てた、理想化した海豚の、大きな石の魚の――シャチホコ[註]が一つある。古木がそれに

註。シャチホコのこの姿勢は、さう無くてはならぬことになつて居ると言つて宜い。それからして「頭を下に突いて立つ」といふ意味の「鯱鉾立ち」といふ語が出來て居る。

植わつて居る微細畫式の小山があり、花の灌木が蔭を與へて居る、川土手のやうな、綠の長い傾斜地があり、小島のやうな綠の饅頭山がある。青々した斯ういふ高みは總て皆、その表面が絹の如く滑かな、そして川の道筋の紆餘曲折を眞似て居る、淡黃色な砂の地面から高まつて居る。この砂地の處は踏んてはならぬ。踏むには餘りに美し過ぎる。微小の一點の埃と雖も、その感銘を傷けることてあらう。だからその體裁を缺點なしにして置くには、その地生れの經驗に富んだ庭師――愉快な老人てある――の訓練の餘に成る手際を要する。が、その砂地は、正しく小川を横に渡る踏石のやうに、次から次と稍〻不規則な距離に置いてある、斫り削りして無い平たい幾列かの石を傳つて、種々な方向に横ぎること

が出來る。全體の感銘は、或る眠くなるやうな物淋しい氣持の好い處にある、或る靜かな流れ川の岸の感銘である。

このイリウジョンを破るものは何一つ無い。それ程にこの庭は引込んで居て閑靜である。高い壁と塀とが街路や近處の物を遮つて居り、そして境界に近い方が高く茂つて居る、灌木と樹木が隣のカチウヤシキをその屋根すら見えぬやう隱して居る。日が射して居る、その砂地へ映る木の葉の震へる影は、やんわりと美しく、花の香は生ぬるい風の漂ひごとに、うつすらと匂うて來、それから蜂の微かな唸り聲がする。

四

佛敎では萬有を、木石の如き、情を有たぬ物ヒジャウと、それから人間禽獸の如き、情を有つて居る物ウジャウとに分つ。この區別は、自分の知つて居る限りては、物に書かれた庭園哲理には表明されて居らぬ。が、これは便利な區別である。自分の小領土の民間傳說は、生きて居ないものと生きて居るもの兩方に關係がある。て、自然の順序として、自分のヤシキの入口に近い、そして第一の庭の門に接して居る、珍らしい或る灌木から始め

ることにして、非情を初に考察してもよからう。

殆んど總ての古いサムラヒ屋敷の表門の內側に、それも普通は住宅そのものの入口に近く、大きな獨特な葉を有つた小さな木が屹度在る。出雲でのこの木の名はテガシハて、自分の門の橫にも一本ある。その學名は何であるか自分は知らぬ。またこの日本名の語原も十分確かには知つて居ない。が然し、手の枷といふ意味の、テガシといふ語がある。そしてこのテガシハの葉の恰好は手の恰好に稍〻似て居る。

さて、昔時、サムラヒがそのダイミャウに隨いて、江戶へ行く爲め自分の家を去らなければならぬ時、丁度出立の前に、燒いた[註]タヒをテガシハの葉に載せて、その前へ置くのが習慣であつた。この暇乞の食事後、その上へ鯛を載せて供へたその葉は、出て行つた士を無事に歸らせる呪符として、門の上へ吊るされるのであつた。手柏の葉についてのこの面

註。タヒ（學名セラヌス・マアギナリス）と呼ぶ美事なパアチは、それは出雲海岸に沿うて極普通な魚で、日本の魚類中最も美味なものとして、正當に珍重されて居るばかりでは無い、その上また幸運の徽號と考へられて居る。これは婚禮の時また祝賀の折の儀式的の贈物である。日本人はこれをまた「魚類の王」と呼んで居る。

白い迷信は、その由來はその恰好に在るばかりでは無い、その動き樣に在つた。風が搖すぶると、その葉は――尤も我が西洋風にでは無く、掌を地に向けて手を穩やかに上下に振つて、友人に來いと日本人が合圖する樣に――手招きするやうに思へたのである。

大抵の日本の庭に見出さるゝ今一つの灌木は、ナンテン[註一]て、それには餘程珍らしい信仰がある。惡るい夢を、不運の前兆の夢を見た時は、翌朝早くそれを南天に囁かねばならぬ。するとその夢は決して本物にはならぬといふ。[註二] この優美な植物には變種が二つある。一つ

註一。學名ナンディナ・ドメスチカ。

註二。出雲で云ふには、一切の夢の中で一番目出度いのは、かの聖山フジの夢である。吉兆の順序でそれに次ぐのは鷹を夢見ることである。三番目に一番好い夢の主題は茄子である。日又は月の夢を見るのは甚だ緣起が好い。が、星の夢を見るのはもつともつと緣起が好い。若い妻には星を呑むと夢見るは最も好運である。美しい兒の母さなることを意味するからである。牛の夢を見るのは吉兆である。馬の夢を見るのは緣起は好いが旅行を意味する。雨か火の夢を見るのは善い。西洋でもさうのやうに、日本でも『逆さになる』と思はれて居る夢が少しある。だから、自分の家が燒けたことを、或は葬式を、或は死んだことを、或は死人の幽靈と話したことを夢見るのは善い。女には善い夢で男が見ると、反對になる夢が少しある。例へば、鼻血が出ると夢見るのは女には善いが、男にはこれは甚だ惡るい。多くの金錢を夢見るは損失の

來る前兆である。鯉或は何か淡水の魚を夢見るのは一番緣起が惡るい。これは妙である。日本の他の地方では鯉は幸運の徽號であるから。

は赤い實を結び、一つは白い實を結ぶ。後者は稀てある。兩種類とも自分の庭に生えて居る。この普通な方の變種が（恐らく夢見る人の便宜の爲めに）緣に近く植えられて居り、他のは、小さな枸櫞樹[シトロンツリイ]と共に、庭の眞ん中の小さな花床を占めて居る。此非常に雅美な枸櫞樹は、その芳[かん]ばしい實の不思議な恰好からして『佛手柑[註一]』と呼ばれて居る。その近くに、青銅のやうな光澤[つや]のある槍と尖つた葉の一種の月桂樹がある。日本人はユヅリハ[註二]と呼んて居るもので、古い士屋敷の庭には、殆んど手柏と同じく普通のものてある。後から生えるその新葉が充分に發育しないうちは、古葉は一枚も決して落ちぬから、緣起の好い木だとされて居る。といふのは、斯くしてユヅリハは、その息子が一家の長として、後を嗣ぐこ

註二。『ユヅル』は他人に讓與するの意で、『ハ』は葉である。（ポンの字書に據ると、その植物學上の名はダフニフイルム・マクロボオダムである。

註一。テブシュカン。學名シトルス・サアコダクチリス。

とが充分出來る程に强壯な成人にならないうちに、父が亡くならないやうにとの希望を象徴して居るからである。だから毎正月、讓葉の葉をば、羊齒の葉と交へて、その時出雲の何處の家の前にも吊るすシメナハに着ける。

五

樹木は、灌木同樣、その珍らしい詩と傳說とを有つて居る。石の如くに、樹木には一々、庭の構成上のその位置と目的とに從つて、特殊の風景的な名がある。恰も岩と石が庭の地面計畫の骨骼を成すが如くに、松の木がその樹木意匠の骨組を成す。松の木が全體に肉體を與へるのである。此處の庭には松は五本ある——苦しめられて奇妙な恰好になつて居る松ではなくして、長年の倦まず撓まずの世話と、思慮分別ある刈込みとの爲め驚く許り繪のやうに、美しくなつて居る松である。庭師の目的は、ごつ〳〵な線を畫かう、葉を——日本の藝術が金屬の象眼に、或は金色の漆器に之を模することに決して飽かぬ、あの針のやうな黑味がかつた綠の葉を——かためて付けよう、とするその本來の傾向を出來る限り、發展せしむるにあつたのである。松はこの表象の國では表象の木である。永久に綠て

居るから、同時に不撓不屈の目的と、强壯な老齡との徽號である。そしてその針の恰好した葉は、惡鬼を追ひ拂ふ力があると信ぜられて居る。

サクラノキ、日本のチエリイツリイが——チエムバレン敎授がいかにも正當に述べて居らるゝ如く、其花は『歐羅巴が示し得る如何なる物よりも、比較を絕して遙かに美しい』あの木が——二本ある。これには多くの變種が栽培され鍾愛されて居る。自分の庭のは最も微かな淡紅の、紅味を帶びた白の、花を着ける。春、その木が花を咲かすと、ほのかに夕日に色どられた羊毛のやうな、雲の塊が最も高い空から漂ひ降りて、枝を抱いて居るが如くである。この比喩は決して詩的誇張では無い、また斬新でも無い。自然が爲し得る最も驚嘆すべき花の表示の日本古來の叙述である。日本での花盛りの櫻の木を一度も見たことのない讀者は、その眺めの美しさは到底も想像が出來ぬ。綠の葉は少しも無い。葉は後て出る。華麗極はまりない、花の全くの一と爆發で、そのまた花の美妙な霞で大枝も、小枝も殘らず蔽はれて居る。そして、その木一本々々の下の地面は、淡紅ゐの積雪を見るが如くて、落ちた花瓣に地が見えぬ程に厚く蔽はれる。

然しそれは栽培した櫻の木である。他に、ヤマザクラ註卽ち山櫻のやうな、花より前に葉

註。この山櫻に就いては、日本人が地口を好む例證になる滑稽な話がある。それを充分に鑑賞するには、讀者は日本語の名詞には、單數複數の差別が無いことを知らなければならぬ。「ハ」といふ語は、發音しただけでは「葉」「齒」いづれをも意味し、「ハナ」といふ語は「花」「鼻」いづれをも意味する。山櫻はそのハ（葉）をハナ（花）より前に出す。そこでハ（齒）がハナ（鼻）より前に突き出て居る人を、ヤマザクラだと言ふ。突顎は日本では、殊に下流階級では、珍らしく無い。

を出すのがある。が然し、これ亦美と象徴とのその詩を有つて居る。神道の大家で詩人であつた本居はかう歌つた。

シキシマノ
ヤマトゴコロヲ
ヒトトハバ
アサヒニニホフ
ヤマザクラバナ

栽培されるものでも、栽培されないものでも、日本の櫻は徽號である。昔のサムラヒの庭に植ゑてあるものは、たゞその麗はしさばかりの爲めに、大事にされるのでは無かつた。その清淨無垢の花は、非常な慇懃と眞實な勇武とに屬する、彼の感情の優美と生活の非難

無さとを象徴するものと考へられて居た。『花は櫻木、人は武士』と古い諺は云つて居る。

此庭の西の端を陰らせて、そして緣の廂の上にその滑らかな黑い四肢を突き出して、餘程年數を經た、そして元々、他の庭でと同樣、その花の咲くのを見るために植ゑられたに相違無い、立派なウメノキ卽ち日本のプラムツリイが一本ある。春の極くの始めの梅[註]の花

註。顯著な變種が三つある。一つは紅い花をつけるもの、一つは淡紅と白の花をつけるもの、今一つは純白の花をつけるもの。

は、それから全一月後で無いと咲かぬ、櫻の木に劣らず驚くべきもので、兩方とも花が咲くとみんな業を休んで、それを賞め稱へる。が、この二つが一番有名であるが、斯く世人の愛好を蒙る花は、この二つだけでは無い。藤、朝顏、牡丹、各〻その季節には、それを見る全市の住民を田舍に赴かしむるに足る程の美はしい花を見せる。出雲では、牡丹の花は殊に驚く可きである。之を觀るのに一番有名な處は、中海といふ大きな鹹湖の中にある、松江から船で一時間ばかりの、大根島といふ小さな島である。五月には全島が牡丹で紅ゐに燃える。小學校の男女兒童すら、それを眺めて樂しむ爲め、一日の休暇を貰ふ。

梅の花は美に於て、確かに櫻の花の敵手であるのに、日本人は婦人の美をば——肉體美

をば――櫻の花に較へて、決して梅の花には較へぬ。然しまた、之に反して、婦人の貞節と深切とは梅の花に例へて、決して櫻の花には例へぬ。或る著者が斷言したやうに、日本人は女を木や花に例へることを考へぬと斷言するのは大なる誤である。優しさには、少女はほつそりした柳[註一]に、若盛りの色香には、花の盛りの櫻に、心の麗はしさには、花の咲い

註一。「ヤナギゴシ」といふ言葉は、ほつそりした美しさを柳の木に例へる、普通使用されて居る多くの言葉の一つである。

て居る梅の木に例へられて居る。それどころか、日本の昔の詩人は女をあらゆる美しい物に例へて居る。次記の歌に見るが如くに、その種々な姿勢に對し、その動作に對して、彼等は花から比喩を求めさへしてゐるのである。

タテバ シヤクヤク[註二]
スワレバ ボタン
アルク スガタハ
ヒメユリ[註三] ノ ハナ

註二。學名ピオニア・アルビフロラ。此名は優美なといふ意味を含んで居る。ボタン（英語のツリイ・ピ

オニイ）への比喩は、この日本の花を能く知つて居る人だけが、充分に鑑賞が出來る。

註三。ヒメユリと言はずにキシユリ（英語のポピイ）と言ふ人もある。前者は優美な一種の百合で、學名リリウム・カロスムである。

實際、身分の非常に賤しい、田舍娘の名てさへ、往々敬語の『お』[註]を前に附けた美しい木又は花の名のことがある。舞子やヂョラウの職業的な華名は、言ふまでも無いとして、オマツ（松）、オタケ（竹）、オムメ（梅）、オハナ（花）、オイネ（稻）の如きそれである。ところが、娘が有つて居る木の名のうち、その或る者の起原は、木そのものの美しさについての、どんな民衆觀念にも求むべきては無くして、寧ろ長命とか幸福とか幸運とかの徽號としての、その木の民間思想に求めなければならぬ、と可なり有力に議論され來つて居る。が、それはどうあらうとも、日本人が女を木や花にたとへる、その比喩が美的感念に於て少しも、我々西洋人の比喩に劣つて居ないことを、今日の諺、詩、歌、並びに日常の言葉が充分に證明して居るのである。

註。今は日本の社會のより高等な階級では、敬語の『お』を、概して言つて、娘の名の前に用ひず、また派手な稱呼は息女の名には附けぬ。貧しい可なりな階級のうちに在つてすら、藝者なんかの名に似た名は嫌はれて居る。が、上に記載した名は立派な正しい、日常の名である。

六

木には、少くとも日本の木には、魂があるといふ事は、ウメノキとサクラノキの花を見たことのある者には、不自然な空想とは得思はれぬ。この事は出雲や他の地方での普通の信仰である。これは佛教の哲理には一致しないが、或る意味に於て、木は『人間の用の爲めに創造された物』といふ西洋の古の正統思想よりも、遙かに宇宙眞理に近いものと誰しも感ずる。その上亦、貴重な森林の絶滅を防ぐ上に於て、大いに效のあつた或る種の西印度信仰に似ぬても無い、數々の妙な迷信が特殊の樹木に就いて存在して居る。日本には、熱帶世界と同樣に、化物の木がある。そのうちで、エノキ（學名セルチス・キルデノキアナ）とヤナギ（枝の垂れるヰロウ）とが、殊に靈的なものと考へられて居る。て、古風の日本庭に見らるゝことは今は稀てある。兩方とも化ける力を有つて居ると信ぜられて居る。『エノキガバケル』と出雲で云ふ。諸君は日本字書に『バケル』といふ語が『姿を變へる』とか、『變態する』とか『變はる』とかいふ言葉て、反譯されて居るのを見らるゝてあらう。が、此二つの木に就いての信仰は頗る特殊なものて、『バケル』といふ動詞の、

そんな飜譯ては說明が出來ぬ。木そのものが形や場所を變へるのては無くて、木のお化けといふ妖怪が木から放れて、樣々な姿[註]を執つて歩き廻るのてある。最も屢〻此幽靈が執る

註。サトウ氏は、これが或る程度までその同類かとも思へる、或る信仰を――珍らしい神道の數を――平田に發見して居る。『その數に據れば、神は自己の部分を分裂の方法によりて脫ぎ棄て、斯くして所謂ワキミタマ――各異れる機能を具へたる分き魂――を生ず』るのだといふ。出雲の大神、大國主之神は、平田の說に據ると、こんな『分き魂』を三つ具へて居らるるといふ。罰するその荒い魂（アラミタマ）、赦すその和い魂（ニギミマタ）、及び惠を與へる、その祝福的或は慈善的な魂（サキミタマ）それである。この神の荒魂がさうとは知らずに、一度和魂に遭つたといふ神道物語がある。

姿は美人のそれてある。この木の妖怪は滅多に物を言はぬ、また滅多にその木から餘程の遠方へ行くことを敢てせぬ。人が近寄ると直ぐと幹か簇葉かの中へ退きすさる。古い柳ても若い柳ても、伐ると血がその傷口から流れ出るといふ。こんな木は極く若い時は、超自然的な習慣を有つて居るとは信ぜられて居ないが、年をとればとる程危險となる。

京都の或るサムラヒの庭に生えて居た柳に就いて――ドライアッド〔譯者曰、木に棲むニムフ〕についての昔の希臘人の夢を想はせる――やゝ可憐な傳說がある。その木に氣味の惡るい評判があるが爲めに、其家の借家人は、それを伐り倒さうと思つた。が、別な一

人のサムラヒが諫めて『自分の庭に植ゑるから、それを自分に賣つて吳れ』と言つた。斯くて購はれ移し植ゑられて、その柳は、その新しい家で能く繁茂し、そしてその魂が、感謝の念からして、美しい女の姿を執り、自分を助けて吳れたそのサムラヒの妻となつた。可愛らしい男の兒が、その結婚の結果であつた。四五年經つて、その地面の持主であつたダイミヤウが、その木を伐り倒せと命じた。すると妻は甚く泣き悲しんで、始めてその夫に事の仔細を洩らした。そして『私は死なねばならぬ事は分つて居ります。でも私共の子供は生きて居ませうし、またあなたはいつも可愛がつてやつて下さるでせう。さう思ふことが私のたつた一つの慰めであります』と言ひ足した。驚きまた怖れた夫は、女を引留めようとしたが徒勞であつた。永久の訣を夫に告げて女は、その木の中へ消え失せた。その士は己が力の及ぶ一切を盡して、その目的を棄てるやう大名に說き勸めたことは言ふに及ばぬ。その大名は[註]サンジフサンゲンダウといふ大きな佛寺の修繕に、その木が要るのであつた。その木は伐られた。が、倒れてしまふと、三百人の力もそれを動かすことが出來ぬ程の重さに突然成つた。その時その子が、その小さな手に一枝を持つて『おいで』と言つた。するとその子に隨いて、その寺の庭まで大地を辷つて行つた。

註。京都の佛寺總てのうちで、一番印象的なものであらう。千手觀音に奉獻されたもので、その像が三萬

三千三百三十三體ある。

榎は化物の木だと言はれて居るけれども、時々最高の宗教的尊敬を受けて居る。古い人形をそれに奉納することになつて居る、荒神（くわうじん）といふ神の靈は、或る非常に古い榎の木に宿つて居ると想像されて居るからで、人々がそれに對してお祈をする、祠がその木の前に置かれて居るのである。

七

北側の第二の庭は自分の好きな庭である。大きな草木は何一つ無い。青い小石が敷いてあつて、小池が一つ——珍奇な植物がその緣にあり、小さな島が一つその中に在つて、その島には小さな山が幾つかあり、高さは殆んど一尺にも足らぬが、恐らくは一世紀以上の年を經たのも、その中にはある一寸法師的な、桃と松と躑躅がある小型の湖水が一つ——その中心を占めて居る。ではあるがこの作品は、さう見せようと計畫されて居たやうにして見ると、眼に少しも小型なものとは見えぬ。それを見渡す客間の或る一角から見ると、石を投げれば屆くほどの遠さに、向うに眞の島のある、眞の湖岸の景である。この庭園全

部を立案した、月照寺の杉の下に眠つてから一百年を經て居る、その古昔の庭師の技巧は如何にも巧妙なので、そのイヅウジョンは、その島の上にイシドウロウ、卽ち石の燈籠が在るので座敷からだけ見破られるのである。その石燈籠の大いさが、その僞りの遠景を裏切るが爲めて、この庭を造つた時には、其處に置いて無かつたものと自分は考へる。

この池の縁の其處此處に、そして殆んど水と水平に、その上に立つことも坐ることも出來、その湖沼住者を窺ふことも、その水中植物を世話することも出來る、扁たい大きな石が置いてある。池には、その輝かしい綠の葉面が、水の表に油の如く浮いて居る美しい睡蓮（ヌフアル・デヤポニカ）があり、また二種類の、一つは淡紅い花をつけるもの、一つは純白の花をつけるものと、多くの蓮がある。岸に沿うて、三稜鏡的菫色の花を咲かす菖蒲が生えて居り、それからまた裝飾的な種々な、草や羊齒や苔がある。が、この池は蓮池て、蓮がその最も大なる妙趣となつて居るのてある。葉が始めて解れる時から最後の花が落つる時まて、その驚くべき生長の一々の相を見るのは樂しみてある。殊に雨降りの日には蓮は觀察に値する。その盃形の大きな葉が、池の上高く搖れつゝ雨を受けて暫くの間それを保つ。が、葉の中の水が或る一定の水平に達すると、屹度莖が曲つてポチヤリと高い音を立てて水を零す、そしてまた眞直ぐになる。蓮の葉の上の雨水は日本の金屬細工人の

得意の題目て、その油氣のある綠の表面に動く水の運動と、色とは正しく水銀のそれてあるから、金屬細工のみがその感銘を再現し得るのてある。

八

第三の庭は、これは甚だ大きなものて、この蓮池のある構内を越して、この昔の士族町の北と東北の境を成して居る、森の小山の麓まて延びて居る。前にはこの廣い平坦な地面は全部竹藪が占めて居た。が、今は雜草や野花の荒地に過ぎぬ。東北の隅に素晴らしい井戸があつて、其處から極はめて器用な竹筒の小さな水道でもつて、氷と冷たい水が家へ運ばれて居る。そして西北の角には、丈高い雜草に蔽はれて、稻荷の甚だ小さな石の祠があつて、其前にそれに釣合つて小さな石の狐が二匹立つて居る。祠も狐の像も削がれ毀たれて、綠濃き苔が厚く處々に附いてゐる。が、家の東側の、庭のこの大きな區分の屬する四角な小さな一と地面は、今なほ耕作されて居る。それは全部菊に使用されて居て、その菊は、輕い木てシヤウジのやうに、劃々に白い紙を貼つて造つた斜めな枠物の、竹の細い柱の上て天幕のやうに支へられたものてもつて、非道い雨と強い日光とに遭はぬやう庇はれ

て居る。日本の花卉栽培のこの驚くべき産物その物に就いては、自分は既に他人が筆にして居ることに何物をも加ふるを敢てし得ぬ。が、菊に關係のある短い物語で、自分が語つてもよからうと思ふのが一つある。

日本のうちで、やがて判るであらう理由の爲め、菊を栽培するのは不吉だと考へられて居る處が一と處ある。その處といふのは、播磨の國の姫路といふ綺麗な小さな町である。姫路には櫓の數が三十ある、大きな城の廢趾がある。その城には祿高十五萬六千石の、或る大名が住んで居たものである。さて、その大名の重臣の一人の家に、良家の生れの名をおきくと呼ぶ女中が居た。『キク』といふは菊の花といふ意味である。その女中は貴重品を澤山託されてゐて、そのうちに高價な黄金の皿が十枚あつた。そのうちの一枚が突然見えなくなつて、見つからなかつた。そこでその女の子は、それに責任を感じて、自分の身の潔白を他にどうして證明すべきかを知らなかつたから、井戸へ身を投げて死んだ。ところがそれからといふものいつも、その幽靈が夜毎歸り來ては、獻欷と共に、低い聲で皿の數を數へるのが聞かれた。

イチマイ　ニマイ　サンマイ
ヨマイ　ゴマイ　ロクマイ

シチマイ　ハチマイ　クマイ——

すると絶望的な叫びと、高いわつと泣く聲とがきかれるのであつた。それからまた、その女の子の悲しさうに皿の數を數へる聲がする、『一枚——二枚——三枚——四枚——五枚——六枚——七枚——八枚——九枚——』

この女の靈魂が、その頭はふり亂した長い髪毛の幽靈の、それに微かに似て居る、妙な小さな蟲の身になつた。それはキクムシ卽ち『おきくの蟲』と呼ばれて居る。そして姫路よりほか何處にも居らぬといふことである。有名な脚本がおきくについて書かれて居て、バンシウ・オキク・ノ・サラ・ヤシキ卽ち『播州お菊の皿屋敷』と題して、民衆的な劇場何處でも今なほ演ぜられて居る。

バンシウといふは東京（江戸）の或る古い町の名の、轉訛に過ぎぬから、この話は其處へ持つて行かなければならぬと公言する人が居る。然し姫路の人々はその町の一部分で、五軒屋敷と今呼ばれて居る處が、昔のその屋敷の跡だといふ。姫路のうちの五軒屋敷と呼ばれて居る處で菊を栽培するのは、おきくといふ名が『菊』を意味するが故に、不吉だと考へられて居る事は、これは確かに眞實である。その爲めに其處では誰も菊を栽培せぬ、と自分は聞いて居る。

九

今度は上記の庭に棲んでゐるウジャウ、卽ち情のあるものに就いて。

蛙が四種居る。蓮池に棲んで居る三種と、木に棲んで居る一種と。木の蛙は非常に見事な綠色の、頗る可愛らしい小さな奴である。鋭い、殆んどセミの聲のやうな叫びを發する。そして、他國のその同類同樣、その啼くのが雨の前兆だといふので、アマガヘル卽ち『雨蛙』と呼ばれて居る。池の蛙はババガヘル、シマガヘル、それからトノサマガヘルと呼ばれて居る。そのうちで、名を第一に擧げた一種は一番大きくて一番醜い。色が甚だ不快で、且つまた省略しないでのその名は（『ババガヘル』といふは體裁の好い省略である）その色同樣に頗るいとはしいものである。シマガヘル卽ち『縞蛙』は前に揭げた物に比ぶればさうでもないが、好くは無い。然し素晴らしい立派な紀念物を死後に殘したさる有名な大名にあやかつて、斯く名づけられたトノサマガヘルといふのは美しい。その色は青銅色を帶びた見事な赤である。

この三種の蛙のほかに、庭に大きな見苦しい出眼な奴が棲んで居る。此處ではそれをヒ

キガヘルと呼んで居るけれども、自分は蝦蟇だと思ふ。『ヒキガヘル』といふ語は、普通蝦蟇（ブル・フロッグ）に與へて居る名である。此奴は殆んど毎日、物を食はせて貰ひに家へはいつて來て、見知らぬ人をも一向恐れぬやうに思はれる。家の者共は之を幸運を齎す御客と考へて居る。そしてただ息（いき）を吸ひ込むだけで、部屋の蚊を總てその口の中へ取込む力を有つて居ると信じて居る。庭師や他の者共は大いに之を可愛がつて居るけれども、古昔の化物蝦蟇の物語がある。息を吸ひ込んで、口の中へ蟲では無い、人間を吸ひ込んだといふ蝦蟇である。

池にはその上多くの小さな魚が棲んで居る。鮮やかな赤い腹をしたキモリ卽ち蠑螈も居る。それからマヒマヒムシと呼ぶ小さな水蟲が澤山居る。それは水面を始終旋回して、時を過ごして居るが、餘り迅いのでその形を明白に見分けることは、殆んど不可能である。興奮のあまり目的（あて）無しにあちこち走り廻る人は、マヒマヒムシに例へられる。それから甲に黃色な條文（しまん）のある美しい蝸牛が居る。日本の子供は蝸牛にその角を出させる力があると想つて居る面白い歌をうたふ。

『ダイダイムシ（註）、ダイダイムシ、ツノ　チツト　ダシヤレ！
アメカゼ　フクカラ　ツノ　チツト　ダシヤレ！

註。ダイダイムシは出雲での名、字書での言葉は『デデムシ』。蝸牛は雨天を好むと思はれて居る。それ

で雨の時よく出る人は――デデムシノヤウナと――蝸牛に例へられる。

上流社會の子供の遊び場は、貧民の子供のそれが寺の庭である如く、いつも家の中の庭であつた。小さな子供が植物の不思議な生活と、昆蟲世界の驚く可き事實に就いて、始めて少しく學ぶのは庭に於てであり、また庭に於て彼等は、日本の民間傳說のあんなに面白い部分を成して居る所の、彼の鳥と花との愛らしい傳說と歌とを始めて敎はるのである。子供の家庭の訓練は大部分は、母に委せられて居るから、動物に對して親切であれとの敎訓は夙に敎へ込まれ、その結果は後年强く顯れる。尤も日本の子供は、原始的本能の殘存として、あらゆる國の子供どもの特徵たる殘忍への、あの無意識な傾向を全然脫しては居ない。が、この點に關して男女間の大なる道德的相違は、極く小さな時からして目立つて居る。女の心の優しさは子供の時分にすら見える。蟲や小さな動物をもてあそぶ日本の小さな女の子は、それを害することは稀で、大抵は相當に慰んだ後で放して遣る。小さな男の子は、親か保護者が見て居ないと、女の子ほどには善良で無い。が、何かむごいことをして居るのを見られると、子供はその行爲は恥づべきことだと思はしめられ、佛敎の戒の「むごい事をするとお前の後世は不幸だよ」と言つて聽かせられる。

池の岩の中の何處かに――此家の前の借家人が、多分、この庭へ殘したのであらう――

小さな龜が一匹棲んで居る。甚だ可愛らしい。が、一度に幾週間も續いて姿を見せずに居るやうにする。民間神話では、龜は[註一]コムピラといふ神の召使で、信心深い漁師は龜を見付けると、その背へ「金比羅樣の召使」といふ意味の文字を書いて、それからサケを一ぱい飲ませて放す。龜はサケが大變好きだと想像されて居る。

陸に棲む龜卽ち「イシガメ」だけが金比羅の召使で、海に棲む龜卽ち海龜(タアトル)は海の底の龍王の召使だと言ふ人がある。海龜は、その息で、雲、霧、或は壯麗な宮殿を造り出す力を有つて居ると言はれて居る。それはあの美しい昔のウラシマ[註二]傳說に出て來て居る。どんな

註一。佛敎の神であるが近年神道の爲めにコトヒラ神と同一のものとされた。

註二。日本の美術家の手に成つた見事な繪を添へた「日本のお伽噺叢書」中の、そのチエムバレン敎授の飜譯を見られよ。

龜でも龜は皆、千年の間生きると想像されて居る。だから日本美術に於て、最も頻繁に見る長命の徵號は龜である。が、日本土着の繪師及び金屬細工人が最も普通に現す、龜は一種特別な尾を、むしろ小さな尾の群集を有つて居て、藁の雨衣卽ちミノの緣のやうに、背後にそれを伸ばして居る。といふ譯でミノガメと呼ばれて居る。ところが、佛寺の神聖な

貯水池に飼はれて居る龜は、非常な高齡に達するのがあつて、或る水草がその甲にくつついて、歩くと背後に長く垂れる。ミノガメの神話はその來由は、そんなやうな甲に藻のくつ着いて居る龜の姿を現さうとする古昔の藝術的努力に在つたのだと想はれる。

一〇

夏の始には蛙が驚く許り澤山で、暗くなつてからは言語に絶して騷々しい。が、多くの敵の攻擊を受けてその數が減るに連れて、週一週とその夜の喧噪が弱くなる。蛇の、中には長さたつぷり三尺はある蛇の、大家族がその群落へ時折侵入する。被害者は屢〻憫れな叫び聲を發する。と、出來る場合には何時も、家の者誰かが直ぐに返事する。自分の下女の爲め生命の助かつた蛙は澤山居る。下女は竹の杖を輕く叩いて、蛇にその犧牲を放さざるを得ぬやうにするのである。此等の蛇は泳ぎが上手である。庭のあたりて勝手な振舞ひをするが、暑い日にだけ出て來る。自分の家の者は誰一人、その一匹も害しようとか殺さうとか考へもせぬ。もつとも、出雲では、蛇を殺すのは不吉だといふ。或る百姓が『原因無しに蛇を殺すと、後でその蓋を取るとコメビツ〔炊ぐ米を容れて置く箱〕の中にその首

があります』と自分に確言した。

然し蛇は割合に蛙を食ふことが少い。圖々しい鳶と鴉とが、その最も執念深い驅逐者である。それにまたクラ（庫）の下に棲んて居る頗る可愛らしい鼬が居て、家の主人が見張りして居る時でも、躊躇なしに池から魚でも蛙でも取る。その上に自分の禁獵場で密獵する猫が一匹居る。痔せこけた浮浪者で、大盜人て、自分は色々と手段を講じて無賴を直さうとしたが駄目である。一つにはこの猫が不行狀であるのと、また一つにはそれが偶〻長い尾を有つて居るのとて、ネコマタ卽ち化猫だといふ惡評を受けて居る。

出雲には生まれ落つるから、尾の長い小猫が居るには居る。が、尾を長くした儘て生長せしめられることは滅多に無い。猫は本來化物になる傾向を有つて居るものて、この變態傾向は、其尾を子猫時代に切らなければ阻止することが出來ぬ。猫は、尾があらうが尾が無からうが、魔物て、屍骸を踊らせる力を有つて居る。猫は恩知らずてある。『犬に三日物を食はせると、その親切を三年間覺えて居る。猫に三年間物を食はせても、その親切を三日て忘れる』と日本の諺は言うて居る。猫はいたづら者て、疊を破り、シャウジに穴を明け、トコノマの柱てその爪を磨ぐ。猫は呪を蒙つて居る。猫と毒蛇だけが佛陀が死なれた時泣かなかつた。だから猫と毒蛇とはゴクラクの至福を受けることは出來ぬ。こんなや

うな理由と、また語るには餘りに多い他の理由とて、猫は出雲では大して可愛がられぬから、その生涯の大部分は餘儀なく戸外で過ごす。

一一

十一種類を下らざる蝶が、過去數年の間、かの蓮池の近所を見舞つた。一番普通な種類は雪白のである。これは殊にナ卽ち雲臺に惹きつけられると想はれて居る。だから小さな女の子はそれを見ると、

テフテフ、テフテフ、ナノハニ　トマレ、
ナ　ノ　ハ　ニ　アイタラ、テニトマレ、

と歌ふ。

が、然し最も面白い蟲は確かにセミ（シカデイ）である。木に棲む日本の此蟋蟀は、熱帶地方のあの驚くべき蟬（シカデイ）にすら勝る、實に異常な歌ひ手である。それに暖い季節全體に亘つて、殆んど毎月、全然異つた歌をうたふ、異つた種類のセミが出るから、煩はしさも遙かに少い。自分の信ずるところでは七種ある。が、自分が能く知つて居るのはただ四種

である。自分ところの木で鳴く最初のものは、ナツゼミ卽ち夏蟬で、日本語の單綴音ジに似た音を出し、始めは息苦しいゼイ〳〵聲である。が、段々高まつて蒸氣を吹く時のやうな漸次强音の叫びになり、次第にうすれて又更に息苦しいゼイ〳〵聲になる。このジーイーイーイイイイイイイは、實に耳を聾する許りて、夏蟬が二三匹窓近くに來ると、自分はそれを追拂はざるを得ぬ。幸にも夏蟬の後に直ぐミンミンゼミが來る。遙かにより巧妙な樂人で、その名はその驚く可き音から來て居るのである。『僧侶が御經を讀むやうにうたふ』と言はれて居るもので、實際、始めて聞いた時には、誰しもただの蟬の音を聽いて居るのだとは殆んど信じられぬ。ミンミンゼミの次には、秋早く、美しい綠色の蟬のヒグラシといふのが出る。カナカナカナカナカナと、小さな鈴を早く振るやうな、特に朗らかな音を出す。然し全體のうちで一番驚くべき訪問者はなほ後に來る、ツクツクバウシである。自分は此動物は全蟬世界の中に、他に匹敵するものを有たぬと思ふ。その音樂は正に鳥の歌である。その名は、ミンミンゼミのそれの如く、擬聲である。が、出雲ではその歌の音は、

註一。「バウシ」は「帽子」を意味し、「ツケル」は「冠る」を意味する。然しこの語釋は頗る怪しい。

ツクツク　ウイス[註二]
ツクツク　ウイス
ツクツク　ウイス
ウイオース
ウイオース
ウイオース
ウイオース・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス

だとされて居る。

註二。「チョコ・チョコ・ウイス」だといふ人もある。「ウイス」は英語でいふと、最後のuを無音にしたweeceの發音に能く似て居る。「ウイオース」はやゝwe ooeに近い。

が然し、蟬が庭の唯一の樂人では無い。二つの異常な動物がその合奏を助ける。第一は鮮かな綠の美しい蠑螈で、日本人にはホトケノウマ卽ち『死者の馬』といふ妙な名で知られて居るものである。この蟲の頭は實際馬の頭に恰好が稍〻似て居る——だから斯んな空想が生れたのであらう。妙に狎れ〳〵しい動物で、腕さもせずに人手に捕へさせ、屢〻家

へ入りもするが、家の中でも氣安げに居る。これは甚だ微かな音を立てる。それを日本人はジュンタといふ綴音の反復だと書く。で、その蠑螈そのものを時にジュンタと呼ぶ。他の一つの蟲は、これまた綠色の蠑螈で、前者よりもやゝ大きく、そして前者よりも餘程人慣れぬものである。

チョン
ギイス
チョン
ギイス
チョン
ギイス
チョン……（心まかせに何處までも）

と鳴くその歌の爲めに、ギイス[註]と呼ばれて居る。

註。殆んどgeeceとやうの發音である。

愛らしいドラゴンフライ（トムバウ）が幾種も暑い晴れやかな日には、小池のあたりを

さまよふ。その一種は――これは、言ふに言はれぬ金屬性の色彩に光つてゐて、妖怪的にかぼそいもので、自分がそれまで見た蜻蛉のうちで、一番美しいもので――テンシトムバウ卽ち『天子蜻蛉』と呼ばれて居るものである。今一つ、日本のドラゴンフライ中最も大きなのがある。が、これは稍〻稀で、子供がもてあそび物にしようとして追求する。この種類は雌よりも雄の方が數が多いといふ。眞實だと自分が請合へる事は、雌を捕へると、その捕虜を出して置けば、殆んど直ぐと雄が惹きよせられるといふ事である。だからして、子供は雌を手に入れようとする。そして一匹捕へると、それを絲で或る枝に括つて、妙な短い歌をうたふ。その歌の原のまゝの言葉は斯うである。

註 コナ　オンジヤウ　カウライワウ
アヅマ　ノ　メトウ　ニ　マケテ
ニゲル　ハ　ハヂ　デハ　ナイカイ

註。『コレナル』の約言。

其意味は『汝、男たる、高麗王よ。東の女王に敗けて逃げるのを恥かしくは思はぬか』である。（この嘲罵は神功皇后の朝鮮征伐の話を仄めかしたものである）出雲では、この

原の歌の初七語が訛つて『コナ　ウンジヤウ　ガウライ、アブラ　ノ　ミトウ』になつて居る。だから雄蜻蛉の名のウンジヤウと、雌蜻蛉の名のミトウは、訛つた言葉の二語から出て來て居るのである。

一二

暖い夜にはあらゆる種類の招びもせぬ、嫌な御客が群を爲して家へ侵入する。二種類の蚊が生活を不快ならしめんと全力を盡す。そして其奴どもはラムプへ餘り近くは、近寄らぬといふ智慧を有つて居る。が、多勢の面白い、そして無害な者共は、その死を炎に求むることを禁じ得ないで居る。そのうち一番數多い犧牲は、これは驟雨の如く密集して來る。サネモリと呼ぶものである。少くとも出雲ではさう呼んで居るもので、發育ざかりの稻に多大の損害を與へる。

さてサネモリといふ名は著名なもので、源氏に屬する古昔の有名な武士の名である。この人が或る敵と馬上で鬪つて居るうちに、自分の馬が辷つて稻田に倒れ、爲めにその相手にねぢふせられて殺されたといふ傳說がある。その武士が稻を食ふ蟲となつたといふので、

出雲では今猶、敬つてサネモリサンと呼んで居る。夏の或る夜、其蟲を惹寄せる爲めに稻田で火を焚いて、銅鑼を鳴らし竹笛を吹き、その間『サネモリサン、どうかこつちへ來て下さい』と歌ひはやす。カンヌシが宗教上の或る式を行つて、馬と騎者とを現した藁人形を燒くか、又は近處の川若しくは掘割へ投げ込むかする。この儀式の爲めに田地にその蟲が居なくなると信ぜられて居る。

この小さな動物は、殆んど全く籾殼の大いさと色のものである。此蟲についての傳說はその身體が、翅とともに、日本の武士(註)の冑に稍〻似て居るといふ事實から起こつたものかも知れぬ。

註。胡瓜を食ふ小さな黃色い蟲の、シワンといふのにも似寄つた傳說がある。シワンは嘗つて醫者であつたが、密通して居る處を見付られて一所懸命逃げた。が、途中その足が胡瓜の蔓に絡まつた爲め、倒れて引捕へられて殺されたので、それでその魂が胡瓜の蔓を枯らす、一匹の蟲となつたのだと言はれて居る。日本の動物神話及び植物神話には、變形變態(メタモオフオシス)の古昔の希臘物語に妙に類似して居る傳說が澤山に在る。が、然しそんな民間傳說の最も著名なもので、その起原が比較的近代なのもある。長門に居る、ヘイケガニといふ名の蟹の傳說は、その一例である。一一八五年壇ノ浦(今の瀨戸內海)の大海戰に死滅した平家の武士共の魂がヘイケガニに變つたのだと想はれて居る。ヘイケガニの甲は確かに不思議である。鍬が寄

つて物凄い顏に肖たもの、或はむしろ、封建時代の武士が戰の時に着けたもので、眉を顰めた頰附のやうな恰好したあの鐵製の黑い瞼甲(めん)即ち面の一つに正(まさ)しく似たものになつて居る。

火の犧牲のうちで數に於て之に次ぐものは蛾で、それには甚だ風變りな、そして美しいのが居る。最も著しいのは、どんな家でもそれの入る家へ、間歇熱病を齎らすといふ迷信的信仰があるが爲めに、俗にオコリテフテフ即ち『瘧蝶』と呼ばれて居る巨大な奴である。その身體は一番大きな蜂鳥の身體の重さは充分にあり、またそれと殆んど同じ力を有つて居るから、手に捕へた時、その踠く力に驚かされる。飛んで居る間、一種非常に高いヒユウヒユウいふ音を立てる。自分が檢べた一匹の翅は、擴げて、端から端まで五寸あつた。ても、その重い身體に比べては小さいやうに思はれた。翅は種々濃淡の度を異にした黯んだ褐色と銀鼠との美しい斑點がある。

が然し、飛翔する夜間來客は多くはラムプを避ける。あらゆる訪問者のうち一番風變りなのは、タウラウ又の名出雲では、カマカケと呼ぶカマキリで、其奴は嚙む力を具へて居るから、子供は非常に怖ろしがつて居る、冴えた綠色の螳螂である。餘程大きい。長さ六寸以上の標本を見たことがある。カマカケの眼は夜は光りのある黑であるが、日中は身體の他の部分同樣草色に見える。螳螂は甚だ怜悧で、そして驚く許り喧嘩好きである。自分

は元氣な一匹の蛙に攻撃された奴が、容易に敵を敗亡さしたのを見た。それは次に池の他の住者の餌となりはしたが、この異常な蟲を征服するには、數匹の蛙の聯合の努力を要した。しかもその時でもそのカマカケを水の中へ引ずり込んで、始めて勝敗が決したのであつた。

他の來訪者は樣々の色をした甲蟲と、『頭に御器をかぶつて居るもの』といふ意味の、ゴキカブリと稱する一種の小さな油蟲（ロオチ）とである。ゴキカブリは人間の眼を食ふ事を好むと言ひ立てられてゐて、その爲めに眼の病を醫し給ふイチバタサマ――一畑の藥師如來――に憎まれて居る敵である。ゴキカブリを殺す事は從つて、またこの佛樣の眼には功德な行爲と考へられて居る。いつも喜び迎へられるのは美しい螢（ホタル）で、これは全く音無しに入つて來て、直ぐと家中で一番暗い處を探して、そよ風にゆらぐ一點の火の如くゆるやかに、ちらり〳〵と光る。非常に水が好きだと想はれて居る。だから子供等は螢に向つて次のやうな短い歌をうたふ――

ホタルコイ、ミヅ ノマセウ、
アッチ ノ ミヅ ハ ニガイゾ、
コッチ ノ ミヅ ハ アマイゾ。

普通に庭へ能く出て來るのとは全く異つた、灰色の可愛らしい蜥蜴がまた夜現れ出て、天井に沿うて己が餌を探す。時々非常に大きな百足蟲が同じ事を企てるが、蜥蜴ほど成功はせず、しかも一對の火箸で摑まれて、外（そと）の暗闇の中へ投げられる。極く稀に、馬鹿に大きな蜘蛛が姿を現す。この動物は無害なやうである。捕へると、自分を見張つては居ないと確かめるまで死んだ風をよそはうて、機會を得ると驚く許り素早く逃げ去る。これは毛の無いので、タランチュラ卽ちフクログモとは餘程異ふ。ミヤマグモ卽ち山蜘蛛と呼ぶのである。此附近に普通な蜘蛛は他に四種ある。テナガグモ卽ち手長蜘蛛、ヒラタグモ卽ち、『平たい蜘蛛』、ヂグモ卽ち『地蜘蛛』、それからトタテグモ卽ち『戸たて蜘蛛』である。蜘蛛は大抵惡い物だと考へられて居る。何處でも夜見た蜘蛛は殺さなければならぬと皆んなが言ふ。暗くなつてから姿を見せる蜘蛛は皆んな化け物で、人が眼を覺まして見て居る間は、そんな動物は身を小さくして居るが、誰も彼も寢靜まると眞の化け物の姿を執つて、異常な大いさになるのだといふ。

一三

庭の後の小山の高い杜は鳥類に富んで居る。野ウグヒス、梟、野鳩、餘りに多い烏、それから夜不思議な音をさせる――深い長いフウフウといふ音を立てる――妙な鳥が一羽棲んで居る。これはアハマキドリ卽ち『粟蒔き鳥』と呼ばれて居る。百姓がその聲を聞いて粟を蒔く時分だと知るからである。餘程小さなそして鳶色な、極めて臆病な、そして、自分の知り得る限りては、全然その習慣に於て夜の鳥である。

が稀に、甚だ稀に、それよりもなほ遙か不思議な叫びが、ホトトギスといふ綴音を苦しんで叫ぶ人間の聲のやうな聲が、夜間此邊の街路て聞かれる。その叫び聲とそれを發する者の名と同一不二てある、卽ちホトトギスてある。

これは、それに就いて不思議な話のある鳥てある。實は生命ある此世の物では無くて、闇の國からの夜のさまよひ者てあると人は言ふからてある。冥途てはその棲家はあらゆる靈魂が、審判の場に達する爲めに通らねばならぬ、あの日の光りの無い死出の山のうちにあるといふ。毎年一度來る。その來る時節は月の古昔の數へ方て言って、五月の末てある。

て、百姓はその聲を聽いて互に『さあ米を蒔かねばならんぞ、シデノタヲサが來たから』と言ふ。タヲサといふ語は、古昔の支配時代のムラ卽ち村の長といふ意味である。が、どうしてホトトギスを死出のタヲサと呼ぶのか自分は知らぬ。靈魂が死の王閻魔の國へのいやな旅路の途中その上て、いつも休息をする死出の山の或る暗い、小村からの靈だと多分思はれて居るのてあらう。

その叫び聲はいろ〳〵に解釋されて居る。或る人はホトトギスは、自分の名を實は繰返すのては無くて、ホンゾンカケタカ（註ホンゾンを懸けたか）と尋ねるのだといふ。他の人は、その解釋を支那人の智慧に置いて、この鳥の言葉は『不如歸』を意味するのだと斷言する。故郷を離れて遠く旅して、他の遠國てホトトギスの聲を聽く者は、誰も懷郷の病に罹るといふ事、この事は少くとも眞實てある。

その聲はただ夜だけきかれ、それも最も屢〻滿月の夜て、そして眼に見えぬほど空高く翔りながら啼くのだと云ふ。そこて或る詩人は、それに就いてから歌つて居る――

註。ホンゾンとは此處では佛の誕生日、卽ち昔の四月の八日だけに寺院で、一般の人に見せる神聖なカケモノ卽ち繪の意である。ホンゾンとはまた佛寺での主たる佛像をも意味する。

ヒトコエハ
ツキガナイタカ
ホトトギス

また今一人の詩人はかう書いて居る――

ホトトギス
ナキツルカタヲ
ナガムレバ
タダアリアケノ
ツキゾノコレル

都會の住人は、ホトトギスの聲を聽かずに一生を送ることがあるかも知れぬ。籠に入れると、この小さな鳥は無言の儘で居て死んでしまう。あんなに多くの絶妙な詩歌を鼓吹し來たつて居るその奇異な啼聲を聽かうといふので、日暮から夜明まで、露に濡れて詩人は屢〻甲斐無く待つ。が、その聲を聽いたことのある人は、手傷を受けて死ぬる人の叫び聲

に、その聲を譬へて居る程にそれを悲しいものと思つた。

ホトトギス
チニナクコエハ
アリアケノ
ツキヨリホカニ
キクヒトモナシ

出雲の梟に就いては、自分は自分が教へて居る、日本人の生徒の一人が物した作文を引用して滿足しよう。――

『梟は暗い處でも物の見える嫌な鳥であります。泣く子供は梟が取りに來るぞと嚇されて怖かります。梟は、ホ！ホ！ソロツトコウカ？と啼くからであります。その意味は、「お前！そつと私ははいつて來なければならぬのか」であります。それからまた、ノリツケホセ！ホ！ホ！と啼きます。その意味は「お前は明日洗濯するに使ふ糊をつくるのか」であります。そして女はその啼聲を聽くと、明日は天氣だと知ります。それ

からまた「トトト」と啼きます。それは「その人は死ぬる」といふことであります。それから「コウトコッコ」と啼きます。それは「その男の子は死ぬる」といふことであります。だから皆此鳥を嫌ひます。それから鴉は之を大變嫌ひますから、鴉を取るのに使ひます。百姓は田地に梟を置いて置きます。すると其處の鴉がみんなそれを殺しに來て、しかと罠に捕へられます。この事は私共は他人に對する嫌惡の念に從つてはならぬといふ事を敎へて居ます」

一日中市街の上を舞うて居る鳶は、近處には棲んで居ない。その巢は靑い峰の上にあるのである。が、魚を捕へたり、裏庭から物を盜んだりして、その時間の大部分を費す。これは林や庭に迅速且つ突然の海賊的訪問をする。そしてその——ピイヨロヨロ、ピイヨロヨロといふ——不吉な啼聲が町の上に、夜明から日沒まで、間を置いてきこえる。確かに羽毛の生えた物總ての中て一番不遜な——その盜賊仲間たる鴉よりも、もつと不遜なぐらねな——奴てある。魚屋の手桶から鯛を、或は子供の手から油揚を盜みに五哩の空からさつと降りて、その窃盜被害者が小石拾ひに屈む間もあらせず、矢の如く雲表に立歸る。だから「鳶に手から油揚を攫はれたやうに吃驚した顏をして居る」といふ譬へがある。その

註。大豆の粉卽ち豆腐から造つたドオナツトのやうなもの。

上、鳶はどんな物を盜むのが當り前だと思つて居るか分つたものではない。例を擧げると、自分の近處の下女が、飯粒て造つて巧妙に染めた、一つなぎの小さな眞紅の珠を髮に着けて、この間川へ行つた。と、一羽の鳶がその頭上に下りて、その珠の紐を引ちぎつて呑んだ。が、前の晩係蹄て捕へて、それから水に浸けて殺した鼠か二十日鼠を鳶に食はせるのは非常に面白い。鼠の死骸を見える處へ出すが早いか、鳶は空から飛び下りてそれを持逃げる。時折鴉が鳶の機先を制することがあるが、その鴉はその獲物を自分のものにして置くには、實際非常に迅く林に達し得なければならぬ。子供達は斯んな歌をうたふ——

トビ、トビ、マウテミセ、
アシタ ノ バン ニ
カラス ニ カクシテ
ネズミヤロ。

舞ふと云ふのは、空を飛んて居る時の鳶の翼の、あの美しい運動を云つて居るのてある。

兩手を伸ばして、その絹の着物の長い廣い袖を振り動かす、マヒコ卽ち舞妓のあの優美な身振に暗示して、その運動を詩的に喩へて居るのである。

自分の家の背後の森には、鴉の數多き小屯營地があるのであるが、鴉軍の大本營は、自分の前側の部屋から見える古昔の城地の松林である。毎夕同じ時刻にみんな飛び歸るのを見るのは、興味ある眺めで、民衆の想像心はこれに對しての面白い比較を、慌て急いて火事へ走つて行く人達に見出して居る。この比較が、その巢へと歸り行く鴉に向つて、子供等が歌ふ歌の意味を說明する、——

アトノカラス　サキヘイネ、
ワレガイヘガ　ヤケルケン、
ハヨインデ　ミヅカケ、
ミヅガナキヤ　ヤラウゾ、
アマツタラ　コニヤレ、
コガナキヤ　モドセ。

孔子の敎は鴉に德を見出して居るやうに思はれる。「カラスニハムポノカウアリ」とい

ふ日本の諺がある。鴉はハムポの孝を行ふといふ意味で、もつと文字通りに譯すると「鴉にハムポの孝在り」になる。ハムポとは文字通りに言へば「養を返へす」である。子鴉は自分が丈夫になると、親を養うて親の世話に酬ゆると云ふ。親孝行の今一つの例を鳩が提供して居る。「ハトニサンシノレイアリ」——鳩はその親の三枝下に止まる。もつと文字通りに譯すれば、「行ふ三枝の禮がある」である。

野鳩（ヤマバト）の啼聲は、これは自分は殆んど毎日森で鳴くのを聽くが、これまで自分の耳に達した音のうちで、一番美はしい物哀れなものである。出雲の百姓は此鳥はかういふ言葉を述べるのだと言ふが、如何さま百姓が主張する處の綴音を覺えた後で、これを聽くとさうのやうに思へる。——

テテ
ポツポオ、
カカ
ポツポオ、
テテ
ポツポオ、

カカ

ポッポオ、

テテ……（突然に止む）

『テテ』は『父』の、『カカ』は『母』の赤ん坊言葉である。そしてポッポオは幼兒の言葉では『胸』を意味する。

註。パパア及びママアといふ語は、日本の赤ん坊言葉にある。が、その意味は我々の或は想像するものとは全く異ふ。ママア卽ち通例の敬語を添へてのオママムマは『炊いた米』の意味である。パパアは『煙草』の意味である。

野ウグヒスがまた屢〻その歌を以てして、我が夏を快よくし、そして多分籠に飼つて居る自分の愛鳥の歌に惹付けられてであらう、時々家の甚だ近くまで來る。ウグヒスはこの國では極めて普通である。この町附近の何處の林にも神聖な杜にも棲んで居る。暖い季節に自分が出雲を旅行した折、何處か蔭深い處でその鳴く音をきかぬことは無かつた。此處でもウグヒス、其處でもウグヒスである。一二圓で買へる鶯もあるが、能く馴らした、籠で育てた歌ひ手は時に百圓を下らざる價を呼ぶことがある。

この華車な動物に就いて、妙な或る信仰を始めて聞いたのは、小さな村寺でのことであつた。日本では、屍體を埋葬に運ぶ棺は西洋の棺とは全然異ふ。驚く許り小さな四角な箱で、その中へ死者は坐つた姿勢に置かれる。大人の屍體がどうしてあんな小さな場所に收められるのか、外國人には充分に一個の謎であらう。所謂死後强直（リゴ・モルチス）の場合遺骸を棺に收める仕事は、專門のダウシンバウズにさへ困難である。が、敬虔な日蓮宗信者は死後、その遺骸は全く撓め易いまゝで居ると主張する。そしてウグヒスの死體は、同樣に決して硬くならぬ、それはこの小鳥は自分等と同じ信仰を抱いて居て、妙法蓮華經を讃美する歌をうたつて、その一生を送るからだと彼等は斷言する。

一四

自分は既に自分の住所を少し好き過ぎて來た。毎日、學校の自分の勤務から歸つて來て、自分の敎師の制服をそれよりか無限に氣持の宜い、日本着物に改めてから、庭を見渡す日蔭の緣に蹲るといふ單純な快樂に、授業五時間の疲勞を償うて餘りあるものを見る。その崩れた瓦の屋根の下に厚く、苔蒸して居るあの古風な庭壁は、市街生活のつぶやきすら締

出して入れぬげに思はれる。鳥の聲、セミの叫び、或はのろい長い間を置いて、水へ飛込む蛙の物淋しいジャブンといふ音の他には、音は何一つきこえぬ。否、その壁は町の街路以上のものから自分を隱遁さす。壁の外では、電信と新聞紙と蒸汽船との、變化した日本が唸つて居る。内には、悠々たる自然の平和と十六世紀の夢とが住んで居る。空氣そのものにすら古色の妙趣があり、身のまはり總てに眼には見えぬ優しい、或る物が居るといふ仄かな感じがする。その或る物といふは、古い繪本に見る貴婦人のやうな顏をしてゐて、この庭全部が新しかつた時、この家に住まつて居た、今は世に無い、貴婦人どもの靜かな出入(でいり)ては或はなからうか。石の灰色な妙な姿に觸れたり、長く愛好された樹木の枝葉の中を渡つたりする、夏の日の光りにすら靈の優し味がある。此等は過去の庭である。未來は此等の庭をば、ただ夢として、どんな天才もその妙趣を再現することの出來ぬ、忘れられたる藝術の所産として、知るに過ぎぬであらう。

此處ではどんな動物も、人間の借家人を恐れないやうに思はれる。蓮の葉に止まつて居る小さな蛙は、自分が手を觸つても殆んど尻込みせぬ。蜥蜴は手易く自分の手が屆く處で日に當たる。水蛇は恐れ無しに自分の影を辷りよぎる。セミの樂隊はつい自分の頭の上の梅の枝で、その耳を聾する合奏を始める。そして蟷螂は厚かましくも自分の膝の上で姿を

構へる。燕や雀は自分ところの屋根に巣を造るばかりでは無い——或る一羽の燕は實際に浴場の天井に巣を造つたほどで——心配無しに家の中へ入(はい)りさへするし、鵯は自分の直ぐの眼の前で何の氣兼ね無しに魚を盜む。野鶯が一羽窓の横の杉の木に止まつて、美はしの囀聲を突發して自分の籠の愛鳥を歌の競爭に挑む。そして常に金色の空氣を通して、小松の綠の薄暗がりから、ヤマバトのあの物哀れな愛撫するやうな、美妙な呼び聲が自分の耳へ流れて來る、——

テテ
ポッポオ、
カカ
ポッポオ、
テテ
ポッポオ、
カカ
ポッポオ、
テテ……

どんな歐羅巴の鳩もこんな啼聲はせぬ。ヤマバトの聲を始めて聽いて、その情に或る新しい感じを感じ得ない人間は、この幸福な世界に住む價値は殆んど無いのである。

が然し、此等は總て――この古いカチウヤシキもその庭も――必ずや數年を經ずして、永久に消えてしまうであらう。早既に、幾多の、自分のよりももつと廣い、もつと美しい、庭が稻田や竹藪に變つて居る。そしてその古雅な出雲の町も――計畫されて久しい鐵道線路にやがては觸られて――或はこの十年のうちにすら――膨脹し、變化し、平凡となり、此處の地面を工場に製造場に要求するであらう。啻に此處ばかりからでは無い、總ての土地からして古昔の平和と、古昔の妙味とは失せ去るべき運命の下に在るやうに思はれる。無常は、殊に日本に於ては、事物の自然である。そして變化と變化を行ふ者とはまた變化して、末終にそれを容れる餘地無きに至るであらう、――だから悼むのは無駄である。此處の美を造つた今は無き藝術は、また、我等の非常な慰安となる所の聖句を信じて居る、あの信仰の藝術であつたのである。その聖句は云ふ、

草木國土　皆入涅槃

と。

第十七章　家の内の宮

一

日本には死者の宗教が二種類ある――神道に屬するものと、佛教に屬するものと。前者は原始的な信仰で、普通には祖先崇拜と呼んで居る。が、祖先崇拜といふ言葉は、日本人種の祖先だと信ぜられて居る、古昔の神々に崇敬を拂ふばかりで無く、同じくまた神と祀られた君主英雄諸侯、及び著名な人士の大勢にも崇敬を拂ふこの宗教に對して餘りに局限された言葉のやうに自分には思はれる。例を擧ぐれば、比較的近代のうちに出雲の大きな大名が神に祀られた。そして島根の百姓共は、今なほ松平の神社の前に祈を捧げる。その上神道には、希臘や羅馬の信仰の如くに、四大の神があり、あらゆる種々な人事を主宰する特殊の神がある。だから祖先崇拜は、猶、神道の著しい特徴ではあるけれども、それだけでこの國家的宗教は成つて居るのでは無い。またこの言葉は死者に就いての神道の信仰

を――出雲では、日本の他の部分よりか、もつと多くその原始的性質を保留して居る信仰を――十分に述べ現しもしないのである。

で、自分は決して漢學者では無いけれども、國民生活に佛教よりももつと深い根柢を爲して居る程であるのに、西洋では遙かにより少く知られて居る、その日本の國家的宗教に就いて――出雲のその古昔の信仰に就いて――此處で敢て少しく語つてもよからう。チエンバレン並びに、サトウ如き博學な人の手になつた特殊の著書――西洋の讀者は、自分が專門家ならぬ限り、日本の外に在つてそれに親しめさうには思はれぬ著書――の中には述べてあるけれども、神道とは何ぞやの極く乏しい概念すら與へて居る、神道に就いて英語で書いてあるものは、殆んど全く無いのである。神道の古昔の傳說幷びに儀式に就いて、上に述べたこの兩言語學者の著書から、世にも稀な興味あることを多く知ることが出來る。が然し、サトウ氏が自ら認めて居らるゝやうに、『神道の本性は何か』といふ問に對しての明確な答はやはり與へにくい。神道には六種在ると知られて居て、其うちの或る物は外國の學者がまだ誰一人も、時間が乏しい爲め、或は典據が少い爲め、或は機會が無い爲め、檢べ得ずに居るのであるが、その六種の神道に共通な要素をどう說明するのか。その近代

的な表面的な種類に於てすらも、ただ單にその進化發展の夥多の筋道を跡附け、且つその種々樣々な要素、卽ち原始の多神教と物體禮拜、起原の疑はしい傳說、支那、朝鮮及び他の地方から來た――佛教と道教と儒教とが一緒に混合して居る――哲學的思想の根元を決定するだけにも、歷史家、言語學者及び人類學者の聯合力を要する程に、神道は頗る複雜である。所謂『純なる神道の復活』――外來的特徵を剝奪し、特にその起原の佛教的な表示徵候悉くを剝奪して、この信仰をその古代の單純さに還さうといふ、政府の援助を受けた、努力――は、その公言した目的だけを思ひ見れば、無限の價値ある藝術を破壞して、しかも起原の謎は依然として、元の如く複雜なるが儘に在るといふ結果を見るに過ぎなかつた。神道は十五世紀間の變化の道途に餘りに深く變化されてしまつて、斯く一片の法令で形成し直すことが出來なくなつて居る。同樣な理由で、單に歷史的幷びに言語的解剖によりて、國民倫理へのその關係を說明せんとする、學者的努力は失敗に終るに相違無い。それが出來る位なら、生命がそれを活動させる身體の要素によつて、生の究極の祕密を說明することが出來よう。が、然しさういふ努力の結果が、日本人の思想と感情の――或る一つの特別階級のでなくて、汎く此國民全體の思想と情操の――深い知識と緊密に結合せられたであらうならば、その時初めて過去、幷びに現在の神道が充分に理解されるかも知

れぬ。そして、自分は思ふに、これは歐洲と日本との學者の共同の勞力に依つて、成遂げられることであらう。

が然し、其信仰の單純な詩美に於て、子供の家庭訓練に於て、祖先の位牌の前での孝行の崇拜に於て、神道は何を意味して居るかといふことは、此國民の中に數年住居して居る間に、其國民同樣の生活をして、其風俗習慣を採用して居る者に依つて、幾らか知られるかも知れぬ。そんな經驗があれば、少くとも自己の神道觀を述べる權利は要求出來よう。

二

佛教との國家關係を斷つて神道を鞏固ならしめやうとした、明治時代の先見の明ある爲政者等は、自分等の國家政策と全然一致して居る、或る一信仰に新しい力を與へつゝあるのみでは無い、同じくまた、藝術の力の如く全能なものであるのに、日本の知的土壤には決して深い根柢を得なかつた外來の信條よりも、遙かに深奥な生活力を具有して居る、或る一信仰に新しい力を與へつゝあるのである、といふことを疑も無く知つて居たのである。佛教は千三百年の古昔に、支那から移植されたのであつた、けれども、既に衰頽して居つ

た。然るに神道は、確にそれよりも數千年古いけれども、時代々々のあらゆる變化を通じて、力を失つたと云ふより、寧ろ力を得たやうに思はれる。神道は、この人種の精神同樣折衷的で、その物質的表明を助け、或はその倫理を強め得るあらゆる種類の外國思想を我が物にして同化したのであつた。佛教は、恰もそれが以前に婆羅門教の古昔の神々を吸收したやうに、神道の神々を吸收しようと圖つたのであつた。が、神道は、降參するやうに見えて居て、實はその敵手からして力を藉りただけであつた。かくして神道のこの不思議な生活力は、記錄に上つて居ない濫觴よりして、それが發展し來たつた長年月のうちに、極はめて古い時代に情(こころ)の宗教となつたもので、表面には見えぬが今なほ依然として情(こころ)の宗教であるといふ事實に基くのである。その儀式と傳統との起原は何んであらうと、その倫理的精神は、この人種のあらゆる最も深い、最も善い情緒と同じものとなつて居る。だからして、殊に出雲では、佛教的神道を創造しようといふ企は、ただ神道的佛教の形成に終つたのであつた。

それから今日の神道の神祕な生活力——改宗させようとする宣教師の努力を斥けるあの力——は傳統、若しくは崇拜若しくは儀式よりも遙かに深い、或る物を意味して居るのである。神道は、眞の偉力は失はずに、傳統崇拜儀式總てが亡びても、矢張り生き殘るかも

知れぬ。教育に因つての一般民心の展開と、近代科學の影響とは確に古代の神道思想の多くを變更し、或は放棄するを餘儀なくするには相違無い。が、神道の倫理は屹度永續することであらう。それは神道はより高尚な意義に於ての性格を——勇氣、禮儀、名譽心、それから特に忠義を——意味するからである。神道の精神は孝の精神であり、義務の嗜好であり、何が故にとは一考もせずして、或る主義への早速の生命投與である。それは兒童の柔順性であり、日本婦人の温和である。それはまた保守主義であり、外國の現在を餘りに多く同化しようといふ輕卒な熱誠のあまり、過去全部の價値を棄て去らうとする、國民的傾向への健全な制止である。それは宗教である——が然し、遺傳的道德衝動に變形された宗教であり、——倫理的本能に變質された宗教である。それはこの人種の情緒生活全部であり——日本の魂である。

子供は生れながらに神道である。家庭の教と學校の仕附はただ生得な物に表現を與へるに過ぎぬ。新しい種を植ゑるのでは無い。祖先傳來の一特性として傳へられた、倫理觀念をただ覺醒さすだけである。恰も日本の幼兒が西洋人の指では、決して習ひ得られないやうなあんな筆をもち扱ふ才能を繼承するが如くに、我々のとは全然異つた倫理的同感を繼承するのである。一と級の日本學生に——十四歳乃至十六歳の若い學生に——その最も大

事とする願望を言うて見よと尋ねて見よ。その學生が若しその質問者に信頼心を有つて居るなら、恐らくその十の九は『天皇陛下の爲めに死ぬること』と答へるであらう。そしてその願望は、これまで世に生れた殉教の如何(どん)な願望もがさうのやうに、純な情(こころ)から浮出るのである。この忠義の念が、新しい不可知論により又學生社會に於ける、他の十九世紀思想の迅速な發達に依つて、東京のやうな大中心地ではどの位弱められたか、或は弱められなかつたか、それは自分は知らぬ。が、田舍では兒童にとつて依然として歡喜と同じく自然なものである。またそれは——より成熟した知識と固定した信念との結果たる、あの我我の忠義感念とは異つて——理由無しである。日本の青年は決して自己に何故にとは尋ねない。自己の犧牲の美はしさだけで、十分に滿足な動機である。そんな夢中な忠義心が、その國民生活の一部を成して居る。それは——その小さな共和國の爲めに死ぬる蟻の衝動の如く遺傳的に——その女王への蜂の忠義心の如く無意識に——その血液の中にあるのである。これが神道である。

忠義の爲めに、長者の爲めに、名譽の爲めに、自己の生命を捧げるあの迅速さは、これは近代に在つて、この人種を他の人種と區別する特性となつて居るのであるが、これはまたその人種が獨立して存在するに至つた、最初の時代からしての國民的特徴であつたやう

に思はれるのである。封建制度確立の時代、卽ち名譽の自殺が、啻に武士に取つて計りて無く、女子供に取つても、嚴乎たる一儀禮となつた時よりもずつと前に、君主の爲めに己が生命を棄てるといふことは、その犧牲が何の役に立たぬ時すら、神聖な義務と考へられて居たのである。種々な實例を古代の古事記から引用し得られるのであるが、そのうち次記の如きは中々感銘的なものである。

目弱王が、齡僅に七歲の時、その父を殺した者を殺して、都夫良大臣が家へ逃げ入り給うた。『その時大長谷王軍を興して、その家を圍みたまひき。射出る矢、葦の來り散るが如くなりき。是に圓大臣、自ら參出て、佩ける兵を解きて、八度拜みて白しけるは、「先日に問賜へる女子、訶良比賣は侍らはむ。また五處の屯宅を副へて獻らむ。賤奴意富美は、力を竭して戰ふとも、更にえ勝ちまつらじ。然れども、己を恃みて賤家に入坐せる王子は、死ぬとも棄てまつらじ」此く白して、亦其の兵を取りて、還入りて戰ひき。爾力窮き、矢も盡きぬれば、其の王子に白しけらく、「僕は手悉傷ひぬ、矢も盡きぬ。今は得戰はじ。如何にせむ」と白しければ、其の王子、「然らば更に爲むすべなし。今は吾を殺せよ」と答詔たまひき。故刀以て其の王子を刺殺せまつりて、乃ち己が頸を切りて死せき』

これと同樣に鞏固な例證を、より新しい日本歷史から、今現に生きて居る人の記憶のうちにすら起こつた幾多の例證も含めて、幾千と容易に引用が出來る。また死ぬるといふ事が神聖な義務となり得るのは、人の爲めばかりては無かつた。或る不慮の場合に、全く個人的な信念の爲めに死ぬる事を、前者に殆んど劣らぬ義務と良心は思つた。だから自分でそれを無上に重要と信じて居る或る意見を抱いて居る者は、他の手段の無い折は、自己の信ずる所に注意を呼び、且つその信念の誠實なるを證明せんが爲めに、その意見を訣別の手紙に認めて、そして自ら己が生命を斷つを常とした。現にそんな實例がつい昨年東京で見られた。國民兵の青年中尉の大原武義といふが、北太平洋に於ける露西亞の力の增大が日本の獨立に及ぼす危險を一般に認知せしめては措かぬ、その希望をその行爲の理由として書き記した手紙を殘して、西德寺の墓地でハラキリして自殺した。が、同年の五月にあつた、それよりも遙かに人の心を動かす犧牲は——最も純粹な最も潔白な忠君の念からの犧牲は——畠山勇子といふ年若い娘のそれであつた。露國皇太子を暗殺しようといふあの企のあつた後、東京から京都へ來て、日本に不面目を與へまた國民の父を——神聖なる天皇陛下を——悲しませ申した彼の出來事に對して、代つて罪を贖はうといふだけのことで、

註。この文は千八百九十二年の始に書いたものである。

京都府廳の門前で自殺したのである。

三

近代の神道は、その外的形式に就いては、之を解剖するのは寔に困難である。が、そのまはりに如何にも厚く織り合はされて居る、幾多の外來信仰の込み入つた地合の全體を透して、その最も初期の性質を指示するものを今なほ容易に識別することが出來る。その原始的儀式の或る物に、その古代の祈禱に文言にまた表象に、その神社の來歴に、またその最も貧しい崇拜者の飾氣の無い思想の多くの中にも、神道はあらゆる崇拜の形式のうちの最も古いものとして――ハアバアト・スペンサアが『あらゆる宗教の根本』と呼んで居るものとして――死者への敬虔の念として――明らかに示顯されて居るのである。それどころか、神道の大學者、大神學者に幾度も左うと解釋され來たつて居る。神道の神々は亡靈である。死んだ者は悉く神となるのである。靈之眞柱(たまのまはしら)で、かの大註釋者平田は[註一]『死せる者

註一。日本亞細亞協會の會報に發表されたサトウ氏の立派な論文『純なる神道の復活』より引用。『神』といふ語は必ずしも仁慈なカミを意味しはせぬ。神道には惡魔は無いが、善い神があると共に『惡い神』

がある。

共の靈魂は、我等がまはり到る處に存在する不可見世界に猶も在りて、そは悉く性質を異にし、感化の度を異にする神となる。祀られた社に鎮まり居るもあれば、その墓の近くにさまよふもある。そしていづれも、生ける折と同じく、君親妻子に幸(さきは)ふことを歇めぬ』。そして死者の靈魂はこれ以上のことをする。人間の生命と行爲とを支配するからである。人間の行爲は悉く『神の御所爲(みしわざ)である』と平田は言つて居る。また純な神道の教儀の解釋者

註二。サトウ氏『純なる神道の復活』

として平田に劣らず有名な本居は、『人の要する道德觀念は總て皆な神が、その人の胸へ[註三]

註三。サトウ氏『純なる神道の復活』

植附るので、飢ゑた時に物を食ひ、渴した時に物を飲まざるを得ざらしめる、彼(か)の本能とその性質は同じである』と書いて居る。この直覺の教儀には十誡の要は無い、固定した倫理法の要は無い。人間の良心が唯一の必要な指導者であると宣べて居る。人間の一々の行爲は『神の御所爲(みしわざ)』ではあるけれども、然し人間は悉くその心の中に、正しい衝動と正し

からぬ衝動とを識別し、善神の感化力と、惡神の感化力とを識別する力を具へて居る。如何なる道德の指導者も、人自らの情が爲すほどの確實な指導を爲すことは出來ぬ。本居は『受行ふべき道（ミチ）なきことはおのづから知りてむ。其を知るぞ卽ち神の道をうけおこなふにはありける』と言つて居る。また平田は『眞の德を行はんと欲するならば、眼見うべからざる世界を恭ひ恐れるが宜い。そすれば惡を行ふことが出來ぬやうにならう。眼見うべからざる世界を支配し給ふ神々に誓を立てて、自分の心に植附られて居る良心（マゴコロ）を養へ。さすれば決して道にさ迷ふことは無からう』と書いて居る。此心靈的自己修養はどうしたら一番能く得られるか、それを該の偉大な註解者は、殆んど前と同じ簡潔さを以て述べて居る。『祖先の靈に敬虔なることがあらゆる德の源泉である。祖先に對してその義務を果たす者は何人も神に對し、或は己が兩親に對して不敬なるを得ぬ。かゝる人は君主に對しては忠義であり、友人に對しては信實であり、そして妻子に對しては親

註。サトウ氏『純なる神道の復活』より引用。本居の言葉の全體の力强さは、讀者が『シンタウ』といふ語は日本ではその起原比較的に新しいもので、この古來の信仰を佛道と區別せん爲め、漢字を假り用ひたのである事、又、この原始的信仰の昔の名はカミノミチ卽ち『神の道』である事を知らなければ充分の了解が出來ぬであらう。

切溫順であらう』と。

この古代の信仰と十九世紀の思想とは、相去ることどの位であるか。我々がその信仰を笑ひ得るほどに遠いものでは確に無い。原始人の信仰と最も博學な心理學者の知識とが、同じ究極の眞理の門邊で相會して、珍らしくも一致して居ることを見ることもあらう。また一兒童の思想が一スペンサア、或は一ショオペンハウエルの結論を繰返して居ることもあらう。我々の祖先は眞實我々のカミでは無いか。我々の一々の行爲は、實際我々の內に住まつて居る死者の所爲では無いか。我々の衝動や傾向は、我々の能力や弱點は、我々の勇敢や怯懦は、我々がそれよりして生命といふ不可思議極はまる、遺產を受取つた所の彼の今は世に無き無數の人間が創造したものでは無いか。我々は、それが我々の銘々になつて居る所の、そしてそれを、『自分が』とか、『彼等が』とか、『自我』と呼んで居る所の、あの無限に複雜な或る物に就いて、今なほ考へはせぬか。我々の自負或は恥辱は彼等が今迄に造り來たつて居る物の裡に存する、眼見るを得べからざるものの自負、或は恥辱のほか何であるか。そして我々の良心といふも、善惡種々樣々の無數の死滅した經驗の遺傳繼承の總額のほか何であるか。我々は人間の神性を公言する所の、今日の彼の鞏固な精神の確信を尊敬すると同時に、死者は總て神と成るといふ神道思想を輕々に排斥は出來な

いのである。

四

神道の祖先崇拜は、あらゆる祖先崇拜の如くに、ハアバアト・スペンサアがあんなに充分にその源へ跡附けた、宗教進化のあの一般法則に從つて、疑ふまでも無く埋葬の儀式から發展したものである。そして神道の公の崇拜の初期の形式は――フステル・ド・クウランジュ氏が、その驚嘆すべき『古代の町』（ラ・シテ・アンチイク）といふ書物で、希臘人及び羅馬人間の宗教的公共制度は爐邊の宗教から、發達したものであることを示したやうな風に――それより尙一層古い家庭の崇拜から、發達したものと信ずべき理由がある。實際、目今一管區の神道の宮を意味し、その上またその宮の神をも意味するに用ひられて居る、ウヂガミといふ語は『家庭の神』といふ意味であつて、その現在の形は『家の內の神』或は『家の神』といふ意味のウチノカミの轉訛、又は省略である。尤も神道の解釋家共は、この語を左うて無いやうに說明せんと試み、平田の如きは、アアネスト・サトウ氏が引用したやうに、この名目は共通の祖先卽ち祖先達に、或は同樣の尊敬に値ひするほどそれ程、或る一地方民衆

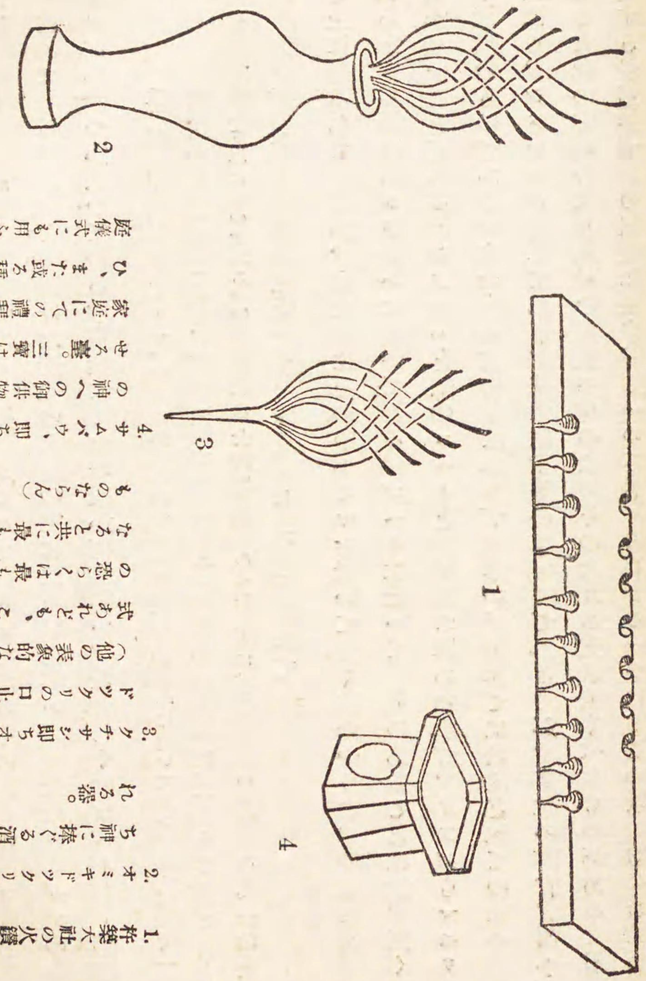
の感謝を受け得べき者にだけ適用すべきであると明言した。それは彼平田の時代に於ける、またそのずつと以前に於ける、この語の正當な使用法は疑ふまでも無く左うであつたのである。が、この語の語原は確に、その起原を家庭の崇拜に有つて居ることを示し、また宗教制度の進化に關する、近代の科學的信念を確めて居るやうに思はれる。

さて、希臘人幷びに羅馬人のうちにあつて、家庭の祭祀が公な宗教の、あらゆる發展膨脹の間（あひだ）も、なほ常に續いて存在して居たと丁度同じに、神道の家庭での崇拜は、數限り無いウヂガミでの地方的崇拜と、種々な國又は郡にある有名なオホヤシロでの民衆的崇拜と、そしてまた伊勢幷びに杵築の大社での國民的崇拜と、併立して現在まで繼續し來たつて居る。家庭での祭祀に關聯した物體のうち、確に外國又は近代の起原に屬するものが多くある。だが、その單純な儀式や、その無意識な詩歌はその太古の妙趣を保持して居る。だから、日本人生活の研究者には、神道の就中最も興味ある方面は、古代西歐人の家庭での禮拜同樣、二重形式で存在して居る、この家內禮拜が提供して呉れるのである。

五

殆んど總ての出雲の住宅にカミダナ卽ち『神々の棚』[註]がある。この上へ普通は神々の名の書いてある牌（その牌の少くも一枚は近くの神社が供給したもの）と、その崇拜者を守護してやるとの、或る神の名に依つて爲された約束の書いてあるのが一番多い、オフダ卽ち神聖な文句若しくは護符とが入つて居る、小さな神道の社（ミヤ）が載せてある、宮が無ければ、その牌或はオフダが或る順序に、最も神聖なものを中位に置いて、ただ置いてある。カミダナに像のあることは極く稀である。それは原始神道は猶太、或は回々教の律法の如く像をば堅く排斥したからである。そして神道の神體繪圖は比較的近代の——殊に兩部神道時代の——もので、その起原は佛教に在ると考へなければならぬ。何か像があるとすれば、それは多分杵築でつい近年造られたやうなものであらう。卽ち杵築の大社に關して前に掲げた一篇の文に述べた、大國主神と事代主神との、あの小さな對の像であらう。

註。カミ卽ち「上（かみ）に在す方々」卽ち「神々」とダナ卽ち「棚」の意。後の方の初文字タは、トツクリ卽ち「德利」のトが複合名詞オミキドツクリでは、ドツクリになるやう、複合名詞ではドに變る。



1. 杵築大社の火鑽。
2. オミキドツクリ、卽ち神に捧ぐる酒を容れる器。
3. ケチサシ卽ちオミキドツクリの口止め。（他の美象的なる形式あれども、この類は最も普通なるものならん）
4. サムハラ、卽ち神道の神々の御作物を載せる三寶。三寶はまた或る種の家庭式にも用ふ。
ひ、まつりの儀式に用ふ。

神道の古事記に見えて居る事件を現した掛物は、これまたその起原は近時のもので、この方は神像よりかもつと普通である。通例カミダナが置いてあるその部屋のトコ卽ち床の間を占めて居る。が、より開けた階級の人達の家にはそれは無い。大抵はカミダナの上にはオフダが幾つか入つて居る、質素なミヤのほか何も無い。鏡[註]若しくはゴヘイ――神棚の直ぐ上に吊るしてあるか、或は時にその中へミヤを置いて置く箱のやうな、枠組に吊下げてあるかする小さなシメナハに着いて居る、ゴヘイは除いて――のあることは極、極く稀にしか無いことである。シメナハと紙のゴヘイとが神道の眞の表象で、オフダもマモリも全く近代のものである。家の内の宮の前ばかりでは無い、出雲では殆んど總ての家の門口の上にも、シメナハが吊してある。普通は稻藁の細い綱である。が、高位の神官、例へば杵築の大社の宮司の如き人、の屋敷の前のは、その大きさ重さ驚くべきものがある。出雲を旅する者が必ずその記憶に殘す、第一の不思議な事實の一つは、この徽號的な藁繩が遍く

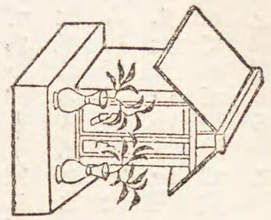
註。鏡は、女神の徽號として、種々な神社の祕密な一番内部の宮の中に置いてある。然し神社で一般公衆の眼の前に普通置いてある、金屬の鏡は實は神道起原のものでは無くて、眞言宗の佛の徽號として日本へ輸入されたものである。鏡が神道では女神の徽號であるが如くに、劍が男神の徽號である。が然し、男神或は女神の眞の徽號はどんな場合と雖も、人目に曝すことは無い。

存在して居ることで、時には田のまはりにすら見ることがある。然しこの神聖な徽號が壯大に飾附けられるのは、新年と、神武天皇が日本の帝位に卽き給うた日と、そして天皇の誕生日との大祭の時である。この時は幾哩にわたる街路が、悉く船のケエブルほども太いシメナハで花綵飾をされる。

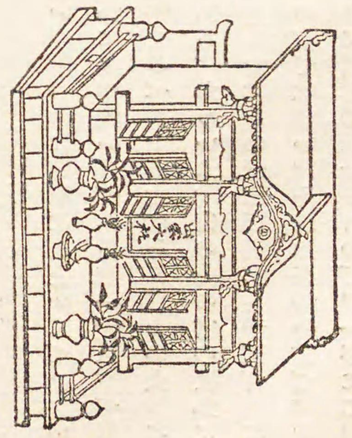
六

松江の特色はミヤ店である、――尤も、この古い出雲の町に特有な店といふては無いが、他の州のより大なる町に見らるゝものよりも、遙かに興味深い店である。一錢以下で買へる子供の玩具のミヤからして、何處か金持の家へ納まるべき十圓或はそれ以上の大きな宮に至るまで、幾百といふ大きい小さい種々な宮がある。かういふ、家の内の宮のほかに、時折、貴重な木材で出來てゐて、漆で塗り金で鍍金した、その價三百圓から千五百圓に至る嵩張つた宮を見ることが出來る。これは家の内の宮では無い。それは祭禮の宮で、ただ富裕な商人の爲めに造るのである。それは神の祭日に出して見せるもので、一年に二回行列をつくつて[註]チョウサヤ！チョウサヤ！の叫びに合せて、町をかつぎ廻る。各神社の管區

1. スヤ。神道の巫女がさゝの葉を
聖なる舞に用ふるもの。



2. ミヤ。内の宮。華麗い稲藁の葉の



3. ミヤ。内の宮。富裕な家族の有つ家

註。古昔は斯うした行列で宮をかつぎ廻つた、神道の二大祭禮はトシトクジンノマツリ、卽ち新年の神の祭禮と、神武天皇卽位記念の祭日であつた。後者は今なほ守られて居る。天皇の誕生の祝賀がミヤをかつぐ、他の唯一の場合である。この兩日には神道の徽號たる、緣飾のある稻藁の繩のシメナハと提燈とで街路は美々しく飾られる。その日に囃す言葉（チョウサヤ！チョウサヤ！）が何を意味するか、確實に知つて居る者は今居ない。一說には、トシトクジンノマツリと殆んど同時節に昔祝つた――この祭禮は二つとも今は廢れて居るが――サムラヒ共の軍の大祭の名のサギチヤウの轉訛であると。

にはそんな場合に、歌をうたひ太鼓を打いて、飾り立てて見せあるく大きな擔がれる宮がある。家の內の宮は大多數は廉價な構造のものである。頗る立派なのが二圓ばかりで求められる。が、普通の人の家の中に見らるゝ小さな宮は、大抵は五十錢よりも餘程下のものである。そして精巧な或は高價な家の內の宮は、純な神道の精神に反して居る。眞の宮は純無垢の白い[註]ヒノキで造り、釘を用ひずに合せなければならぬのである。自分が宮店で見た物は多くはその幾多の部分が、ただ米の糊で合はされて居た。が、製作者が熟練して居るからそれで充分であつた。純な神道は宮は鍍金も裝飾も無いものでなければならぬと要

註。學名スヤ・オブトユサ。

求して居る。金持の家に在る小形の美麗な宮は、その美術的建造と裝飾とに依つて、正當に歎賞の念を起こす。が然し、勞働者やクルマヤの家に在る、無地の白木の、十錢か十三錢の宮の方が眞にこの原始的宗教の特徴たる、あの質素の精神を現して居るのである。

七

宮と神道崇拜の他の神聖な品物とを、その上へ載せるカミダナ卽ち『神棚』は普通床の上六七尺の高さに固定されて居る。一般に言つて手が易々と屆く處より高く置いてはならぬ。が、天井の高い家では宮は時折、箱又は乘つてその上へ立つ他の品物の助を藉らんでは、神聖なお供へ物が出來ぬほどの高さに置いてある。通常それは家の構造の一部では無くして、部屋の何處かの隅で壁そのものへか、或は、此方がもつと通例であるが、部屋と部屋を仕切る半透明の紙の隔障（フスマ）が、それあるが爲め、右に左に辷るカモヰ卽ち溝の彫つてある水平な梁へか、棚承を用ひて附けてある飾の無い棚である。たまに色を附けたり漆を塗つたりして居る。然し尋常の神棚は白木で、宮の大いさ或はそれへ置くオフダ及び他の神聖な品物の數に應じて、大きくも小さくも造られる。或る家では、特に目立

つて宿屋や、小商人の家では、いろ〳〵異つた神樣、殊に財寶と商賣繁昌を司ると信ぜられて居る、神々へと捧げられて居る小さな宮を澤山支へるに足る程長く造つてある。貧民の家では殆んどいつも街路に面した部屋に置いてある。そして松江の商人は通例、それをその店に造る、――だから通行人やお客は、その家の住人はどんな神樣を信じて居るか一目で解る。それに就いては多くの規則がある。南か東に面して置くのは宜い。が、西に面してはならぬ。そしてどんな事情の下にも、北又は西北に面せしめてはならぬ。これについての一つの説明は、神道に於ける支那哲學の影響で、それに據ると、南又は東と陽性との間に、そして西又は北と陰性との間に、或る關係があるとされてゐるのである。が、此問題に關しての通俗の考は、死人は頭を北向きにして埋めるから北に向ふやうにして――死に關係した一切の事は不淨だから――宮を置くのは甚だ惡るいといふので、西の方角についての規則は固くは守られて居らぬ。が然し、出雲での神棚は多く南向きか、東向きである。極々貧しい者の――時にはただの一間しか無い――家では、部屋の選り好みは殆んど出來ぬ。が、神棚は客間（ザシキ）にも臺所にも置いてはならぬといふが規則で、中產階級の住宅では之を守つて居る。そして士族屋敷では、其置き場は通例家族が住んで居る部屋のうちの、より小さな部屋の一つである。神棚に對しては敬意を表しなければならぬ。

例へば、その方へ足を向けて寝てはならぬ、休みさへしてもならぬ。宗教上不潔の狀態に——屍體に觸つたが爲めに、或は佛式の葬禮に列したが爲めに、或は佛式で埋められた近親に對する服喪の時期中にすら、受けるやうな不潔の狀態に——在る間は、神棚の前で祈禱をしてはならず、その前に立つことさへしてはならぬ。一家のうちの誰かがそんな埋葬をされると、[註]五十日間は神棚は見えぬやうに、純白な紙で蔽はなければならず、また神道のオフダ卽ち家の戸口の上に着けてある信心の祈願すら、その上へ白紙を貼らなければならぬ。其服喪期間はその家での火は不淨と考へられて居る。だから期が終ると火鉢や臺所の灰は悉く打棄てて、新規の火を燧石と鋼とで造らなければならぬ。が、葬式だけが合法な不淨の唯一の根源では無い。神道は、純潔と淸淨との宗教だから、餘程廣汎な申命（デウテロノミイ）がある。或る時期の間は女は宮の前で祈禱すらしてもならぬ、況して捧物をしたり、神聖な器物に觸つたり、或はカミの燈を點したりしてはならぬのである。

註。或る種のサムラヒ家族で、そんな事情での服喪期間は少くも五十日である。二十五日で充分だといふ人もある。佛敎の服喪法は極はめて不同で、且つ複雜で、詳しく述べるには多くの紙面を要する。

八

宮の前には、或は神棚の上に置く神道崇拜のどんな神聖な物體でも、その前には、サケの供物を入れる妙な恰好をした德利が二つと、サカキといふ神木の小枝か、お供への花かを挿す小さな花瓶が二つと、それから小さな皿のやうな恰好をした、燈心草の髓が一本榮種油に浮いて居る小さな燈が一つと、置いてある。嚴密に云へば、是等の器具は花瓶を除いては總て皆、古事記の前の方の章に述べてあるやうなあんな、釉藥のかかつて居ない色の赤い土器でなければならぬ。出雲では神道の祭禮に、神の爲めに酒を飲む時は、今猶、淺い圓い皿のやうな形の赤い素燒の土の盃で飲む。が近年、立派な神棚の器具は總て——ハナイケ卽ち花瓶すらも——眞鍮又は唐金で造るのが流行になつた。貧乏人どもの間では、その最も古風な器具が今なほ、殊に遠隔の田舍地方では、隨分と使用されて居る。燈は赤土の質素な皿卽ちカハラケで、花瓶は最も屢〻竹の一節（ふし）を節（ふし）の直ぐ下の處と、その五吋許り上の處と切つただけの竹の水容である。

眞鍮の燈は値ひ僅か一厘のカハラケよりも、遙か込入つた品物である。眞鍮の燈は少く

とも二十五錢ぐらゐはする。それは二つの部分から成つて居る。下の方は、非常に淺い幅の廣い葡萄酒用の盃のやうな恰好をしてゐて、非常に太い軸が附いて居て、外側の縁があると共に内側の縁がある。そしてそれに丁度適合するやうな、幅廣い淺い眞鍮の皿、これが上部になつて油を入れるものであるが、それが其内側の縁にきちんと嵌まる。此種の燈にはいつも、平たい環の形した、その環の表面と直角に軸の着いて居る、眞鍮製の小さな品物が備へられて居る。これは浮いて居る燈心を動かして、所要のどんな位置にても置いて置く爲めに用ふるもので、その直立した小さな軸は、指を油に觸はらせぬ程の長さを有つて居る。

どんな尋常な神棚にても見らるゝ、最も妙な品物は酒の容物、卽ちオミキドックリ（御酒德利）の口止である。この口止――オミキドックリ　ノ　クチサシ――は眞鍮のこともあり、美事な薄い木片を結合して、所要の特殊の形に曲げたものもある。適當に云へば、この物は、名は左うであるが、眞の口止では無い。其下部は瓶の口を全く充たしはしない。ただ軸を下にして木の葉一枚挿したやうに、その孔に浮いて居るだけである。自分にはその來歷を知ることが困難である。が、その意匠はいろ〳〵あるけれども――眞鍮の方が意匠はより巧妙なのだが――全體の形が、その起原は佛教に在ることを思はせるや

うである。多分この形は佛教の一つの徽號――その淡い輕い（繪圖的に炎のたはむれを思はしめる）炎が純粹な本質の徽號となつて居る彼の神祕な珠、ハウシュ　ノ　タマ――から藉り來たつたもので、この品物は捧物の酒が純なものであると同時に、それを捧ぐる人の情も純なものであることを表示して居るのであらう。

この小さな燈は、この夜毎の無限小の油の出費にすら堪へない程、貧しい家族もあることであるから、あらゆる家で毎晩點されはせぬかも知れぬ。が、毎月一日と十五日と二十八日とにはいつも點す。それはその日は必ず守らねばならぬ、神道の祭日だからで、その日には神に對して供物をしなければならず、その日にはウヂコ卽ち神社の管區内の者は、總てそのウヂガミへ參詣するものと思はれて居る。この三日にはどこの家でも、サケを御供物としてオミキドックリへ注ぎ入れ、神棚の花瓶には神木サカキの小枝か、松の小枝か或は新しい花かを挿す。新年の元日には神棚は必ずサカキ、モロムキ（裏白）、松の小枝、それからシメナハで飾る。そして大きな重ね餅を神へのお供へとして神棚の上に置く。

九

然し神道の昔の神様だけを神棚の前て拜む。一家の祖先或は一家の死人は別な部屋（ミタマヤ卽ち『靈の部屋』と呼ぶ）て拜むか又は、佛式て拜むなら、ブツマ若しくはブツダンの前て拜むかする。

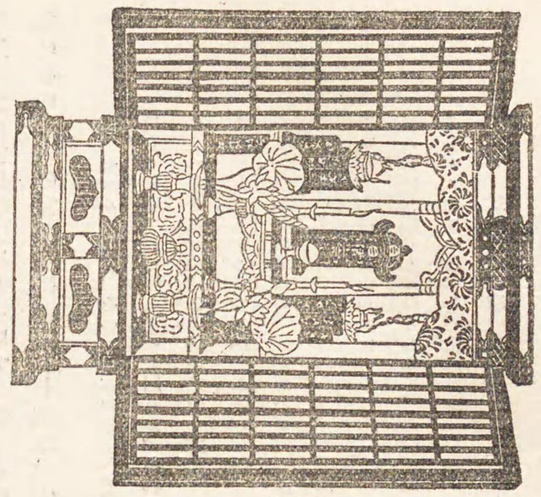
佛敎の家內禮拜は出雲の大多數の家て、神道の家內禮拜と共に存して居る。て、死人が御靈屋て拜まれるか、佛壇の前て拜まれるかは、全くその家庭の宗敎的傳統に因るのである。その上出雲には——特に杵築では——一家の誰もが佛敎の如何なる種類のものをも信じて居ない家があるし、家の者は神道の行をしない眞宗又は、日蓮宗のものが極めて少い

註。斯ういふことには日蓮宗は嚴正だと想はれて居るに拘らず、出雲でのその敎儀の信奉者は、多數は同樣にまた熱心な神道家である。概して言つて出雲の眞宗信者も、それと同樣であるかどうかは自分は觀察し得なかつたが、松江の眞宗信者には神社に禮拜するものがあることは自分は知つて居る。佛陀のうちでも阿彌陀と稱するあの形態のみを崇めるのだから、眞宗は佛敎の『唯一神敎徒』だと言つても宜い。その敎儀が神道に反して居るの故を以て、それは出雲では鞏固なる足場は終に得ないで居るやうに思はれる。

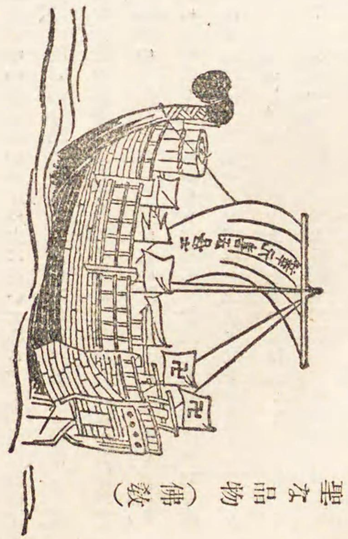
日本中他の地方では眞宗は佛敎諸宗のうちで、最も旺盛な最も繁昌な宗派である。

けれど在る。が、死者に對する家內ての祭祀は、その家が神道てあらうが佛敎てあらうが、依然行はれて居る。佛敎を奉じて居る家の死人（ホトケ）のイハイ卽ち牌は決して特別な部屋、又は宮に置きはしないて、普通その中へ置いてある佛神の像、又は繪とともに家の中の佛式の宮[註]の中に置く——或は、少くとも、それに對する尊敬を神式て無く、佛式

註。モオルス氏は、その『日本の家庭』で、『家の中の佛式の社は床の上に置いてある、——兎も角自分はさう聞いて居る』と述べて居るが、あれは又聞で頗る妙な譯を發表したものである。どんな場合にも床の上へ置きはせぬ。より好い階級の家では特別な設備を佛壇に爲して居る。横に辷る板か又は小さな戸で人目に見えぬやうしつらへてあるが普通で、床か壁の引込んだ處か、又は他の工夫をした處に置く。より小さな住居では他に善い處が無いが爲めに、棚の上に置くことはあらう。そして貧乏人の家ではタンス卽ち衣服入の上に置くことはあらう。神棚ほどの高さには決して置かぬが、床の上三呎以下の高さには滅多置かぬ。佛壇のモオルス自らの挿繪（二二六頁）を見ると、決して床の上に在るのでは無くて、戸棚、これは佛壇と混同してはならぬが、戸棚の上の段——極く小さな棚——の上に載つて居る。今問題にして居るそのスケッチは、その繪に見ゆるお供物が盆祭のお供物だから、死者の祭の間に描いたもののやう察しられる。盆の折には家の內の佛壇は、いつも扉を開けて中が見えるやうになつて居り、且つその前へ置くお供物に餘地を與へる爲め、いつもの場處から動かすことが能くある。床の上へ神聖な品物を置くことは



一般の位牌が内陣に納めてある浄土宗の佛壇。



神聖な品物（佛教）

死者の乘る小さな棺（シウリヤ。ウブネ。）（田舎）

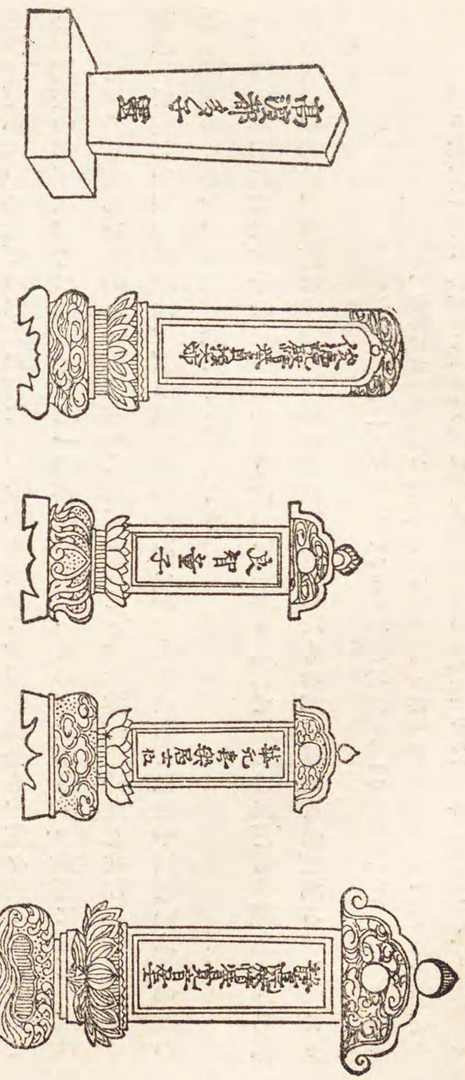
岸地方

日本人には非常に不敬な事に思はれて居る。神道の品物と云へば、マモリでさへ床の上へ置くのは罪だと考へられて居る。

て行ふ時はいつも必ず左うてある。佛壇或は佛間の形狀、その聖像そのオフダその繪圖の性質、またその前で唱へる祈禱すら、十五もある異つたシュウ卽ち宗派に依つて異ふから、佛間の問題を徹底的に述べる爲めには、餘程大きな書物一冊書かなければならぬことであらう。だから家の內での佛式の宮には、大小も價格も壯麗の度合も、種々樣々だといふこと、眞宗の佛壇は、これは自分には一番興味の乏しいものてはあるが、意匠に於て仕上げに於て、最も美しいものと一般に考へられて居ること、を述べて滿足しなければならぬ。極はめて貧しい家の佛壇は、値ひ四五錢のもあるが、富裕な信者は幾千圓といふその拂ひ得る限りのものを、京都で購ふこともあらう。

佛間の形狀幷びに、その在中物の性質は大いに異りはして居るけれども、祖先の卽ち葬禮の名牌の形は、此書の位牌[註]の挿繪の第四圖に示したものが普通のものてある。これより

註。佛教信者が死んだ場合には、一人に對していつも位牌を二つ造る。一つは家庭の宮に置いて置く物より大きいが通例で、それはその死者がその檀徒であつた寺で、お供物として毎日それへ茶か水を注ぎ入れる茶椀と一緒に、保存せられる。大きな寺では殆んどどの寺にも、そんな位牌が幾千となく、——死者の



1. 神道の位牌（田舎）
2. 士の妻の位
3. 小さな子供の位牌
4. 男子の普通の位牌
5. 士の官吏の饒な位牌

式（普通）牌位の數佛

靈も亦茶を飲むと想像されて居るから――一々その前に茶椀を置いて、段の上に段を爲して、横にづらりと並んで居るのが見られる。自分は幾列もの茶椀が、たゞ埃だけ入れて居るのを見たことがあるから、尤もその罪は恐らく横著な小僧に在るのだらうが、時折そのお供物が失念されることがあるやうである。

ももつと精巧な、高價な珍奇な形のもあり、最も低廉て最も簡素なより單純な形のもある。が、別紙挿繪の形は出雲と山陰道全部に普通なものてある。が然し、大きさには相違があつて、男の位牌は女のよりも大きく、その上、上に冠せ物があるのてあるが、女のにはそれが無い。そして子供の位牌はいつも頗る小さい。成人の男の位牌の平均の高さは一呎少し上て、その厚みは一吋許りてある。ハウシュノタマ卽ち神祕の珠の徽號が、上に載つて居る頂卽ち冠り物があり、普通は何か雲形の裝飾があつて、臺は雲から出て居る蓮華てある。一般には全部美々しく漆て塗られ、金色て彩られて居り、位牌そのものは黑漆塗て、金文字て死後の名卽ちカイミヤウ――賢夢自證信士とか、死んだ人が有つて居たと想はれて居た美德を示す他の文字とか――が書いてあるのてある。そんな美しい位牌を求め得ない極貧の人のは白木の位牌て、戒名はただその上へ黑文字て書いてあるだけてある。が、それよりもつと普通には、戒名を白紙の片に書いて、それを米糊て位牌に貼るのてある。生前の名が恐らくその位牌の裏に彫られてゐる。こんな位牌は固よりのこと、幾代と經つ

に連れて積まつて來る。だから、非常に澤山な數を蓄へて居る家がある。

大いに人を感動させる美くしい或る習慣が、古昔よりか餘程普通では無くなりはしたが、今なほ出雲に、そして多分日本中に、殘存して居る。が然し、自分の知り得る限りては、これはいつも修養ある階級だけに限られて居る。夫が死んだ時、その妻が再緣しないと決心する場合には位牌を二つ造る。その一つには死者の戒名を金文字で書き、今一つのには生きて居るその寡婦の戒名を書く。が、後者には、戒名の初の一字を赤で彩つて、餘の文字は金で書く。それからその二つの位牌を家の佛間に置く。それと同じ樣に文字を認めた、より大きな位牌を二つ檀那寺に納める。が、その妻のの前へは茶椀は置かぬ。その唯一つの深紅の字は死者の靈に對して、一生忠實をつくすといふ嚴肅な保證を意味して居る。その上また、その妻はその友人親族、總ての間にその生きて居る間の名を失つて、その後はただその戒名の一部分で呼びかけられる。例へば、俊德院樣と呼ぶ。それはそれよりもつと長いもつと口調の好い、死後の名の俊德院殿(註)情譽貞操大姉の省略である。だから自己の

註。これはサムラヒの戒名の好個の見本である。華族又は士の戒名は賤しい死者の戒名とは異ふ。だから日本人は位牌を一目見て、それに使つてある佛教の言葉で、その死者はどんな社會階級の人だつたか直ぐと言ひ得るのである。

戒名で名を呼ばるゝことは、夫の靈に對する貞操であり、同時に夫を亡くしたその妻の不變の誠實である。それと正しく似た保證を、自分の熱愛して居た妻を亡くした後、男が爲る。自己の位牌の上に見らるゝ深紅な一字は、啻に家内に於てのみて無く、公の崇拜の場處に於ても、その誓を書留めて居るのである。が、鰥は、寡婦とは異つて、その戒名で名を呼ばるゝことは決して無い。

佛教を信じて居る家での朝の、最初の宗教的義務は死者の位牌の前へ、最初の御湯でいれた御茶の小さな茶椀を置くこと——オホトケサンニオチヤタウヲアゲル(註)ことである。日

註。「尊き佛に御ン茶を呈上する」の意。佛教の信仰では、死んだ人は佛と成つて其後は輪廻の悲を免れる、と信じはして居なくとも、さう望む。だから「死んだ」といふ言ひ現しを日本語では「佛に成つた」といふ句で表すことが能くある。

日また御飯の供物もする。そして新しい花を花瓶に挿す。そして香を——これは神道では許さぬのであるが——位牌の前で焚く。夜は、また或る祭禮中は、蠟燭と小さな——宮の燈とは稍〻形を異にした燈でリントウと呼ばれて居る——油の燈を點す。毎月死んだ日に相當する日にはシャウジンレウリ、卽ち佛教信者の植物性食物だけから成る、食物を少し位牌に供へる。ところが家庭での神道崇拜には、新年の一日から三日まで續く特別の年祭

があるやうに、佛教の祖先崇拜には七月の十三日から十六日まで續く、年毎のボンク卽ちボンマツリがある。これが佛教の精靈の供養である。その時は佛間は出來る限の裝飾が施され、食物と花との特別な供物が爲され、その靈的訪客の來るを迎へる爲め、全家が美くしくされるのである。

ところで神道には、佛教同樣、位牌がある。が、それは質素極はまつた恰好と材料とのもので――無地の白木の木片に過ぎぬ。普通その高さはただ八吋ばかりである。此位牌は、神の宮が据ゑてある部屋とは別な部屋に置いてある、或る特別なミヤに置くか、又はミタマサンノタナ――『尊い御魂の棚』――と人の呼ぶ小さな棚の上に、ただ並べて置くかする。祖先とその家の死者との棚又は宮は、ミタマヤ或はソレイシヤ（御魂の部屋を時に斯く呼ぶ）に置いて、他の部屋にある神の宮が左うのやうに、いつも餘程の高さの處に置く。時々位牌は使用せずに、名前を御魂の宮の木材の上へ直かに書いたりする。が、神道には戒名は無い。死者の生前の名をその位牌に、『ミタマ』（御魂）の語をただ一字添へて、認める。そして月一回のその死亡日に相當する日に、毎月魚と酒と他の食物との御供物を、特殊[註一]の祈禱と共に捧げる。ミタマサンにも亦その特別な燈と花瓶とを捧げ、そして程度は

註一。死者或は神へのこの飲食供物の基を爲す思想は、無考へな批評家が左うと公言して居る程、しかく

不合理なものでは無い。死者は最も蒸氣的な種類の滋養だけを要する、空氣のやうな狀態に在ると思はれて居るから、自分共の前に供へられる食物の眼に見える物質を、少しでも攝るものとは想はれて居無い。死者はその食物の眼に見えぬ本質だけを吸收するといふのである。だから、果物やそんなやうな他の供物が、數時間空氣に曝された後、その風味を幾分か失ふと、靈魂がそれを味はつた證據だと、昔は考へたのであらう。科學的教育は必然的にかゝる慰安的妄想を消滅せしめる。そしてそれと共に、生者と死者との關係についての優しい美はしい、多くの空想をも消滅せしめる。

劣るが、神に對する儀式に似た儀式を以てして之を敬ふ。

神道若しくは佛教の位牌の前で唱へる祈禱は、それ〴〵その宗教的な法式の文句で始まる。神道信者は、手を三度若しくは四度[註二]打つて、先づ聖禮の『拂ひ給へ』を唱へる。佛教信者は、その宗派に從ひ、祖先へのその祈禱を始める前に、『南無妙法蓮華經』とか『南無阿彌陀佛』とか佛陀に祈り或は佛陀を讃へる、或る他の聖語をつぶやく。神道信者でも佛教信者でも、祖先への言葉は聲高に述べることは滅多無い。口の中で極く低い聲でさゝやくか、又はただ心の中で言ふ。

註二。拍手の數は州に依つて幾分異ふ。九州では拍手は、殊に朝日に向つての祈禱の前は、頗る長い。

出雲の家庭では夜になると、神へと先祖へとの燈を、その家での信頼を受けて居る奴僕か、又は家族の誰かが點す。神道の正統の規則では燈には純粹な植物性の油――トモシアブラ――だけしか用ひてはならぬことになつて居て、通例は蓖麻の油を使用する。が然し、より貧しい階級の間では、かの昔からの道具の代りに、極小の石油ラムプを用ひようとする明らかな傾向がある。が、嚴密に正統な式を守る人には、これは甚だ間違つた事と考へられて居て、燈をマッチで點すことすら稍〻異端な行ひである。それはマッチはいつも屹度純粹な物質で造らるゝものとは想はれぬのに、神の燈は最も純粹な火――一切の事物のうちに潛んで居る彼の神聖な自然の火――だけで點さなければならぬからである。だから嚴密に正統な式を守る神道家族の家では、どんな家でも、或る小さな部屋があつて、其處にはいつも神聖な火を點すのに用ひる、古昔の道具が入つて居る小さな箱がある。ヒウチイシ卽ち『火打石』と、ヒウチガネ卽ち鋼と、ホクチ卽ち乾かした苔から造つた引火奴と、それからツケギ卽ち脂松の見事な薄切とから、それは成つて居る。引火奴を少し燧石の上

へ置いて置いて、鋼を二三度打つて燻らせて、炎を出すまで吹く。それからその炎で松の木片を燃やして、それで祖先と神との燈を點すのである。若し宮に或は神棚に、數々の大神が數々のオフダで代表されて居れば、時として別々の燈をその一つ一つに點す。そしてその家に佛間があれば、其處の蠟燭又は燈も同時に點す。

神の燈を點すのに燧石と鋼とを使ふ事は、多分一代のうちに廢れてしまふことであらうけれども、出雲では、殊にその田舍地方では、今なほ大いに行はれて居る。安全マッチが全くこの正統な道具に取つて代つて居る處でも、正統の感念は、使用するマッチの選擇に自づと現れて居る。外國製マッチは許容されぬ。土地のマッチ製造者は、外國製マッチには『死んだ動物の骨から造つた』燐が入つて居るから、そんな不淨な火で神の燈を點すのは瀆神であると、首尾能く言ひ囃した。日本の他の部分ではマッチ製造者は『サイキャウゴホンザンショウ』（註西京の御本山の用に適す）といふ言葉をその箱の上へ捺した。が、出雲での神道感念は、そんな宣言によつて大いに動かされるには餘りに强かつた。それどこ

註。日本佛教の聖都たる京都の別名。

ろか、そのマッチが眞宗の寺で使用するに適當して居る、といふ推擧それ自體が神道信者をして、そのマッチに僻見を抱かせるに充分であつた。だから安全マッチをこの神の國へ見事輸入するまでに、特別の用心をしなければならなかつた。出雲のマッチ製造者は、今かういふ銘を貼つて居る、『純粹にしてカミ若しくはホトケ！の燈を點すに適す』

日本に於て一切の事柄に對しての避け難い危險は火である。一家が火事の時、それが出來たらば、第一に助け出すべき品物は、家の中の神と祖先の位牌であるといふことは、傳統的な規則である。これさへ助け出せば、一家の貴重品は大部分は助かるに極まつて居る。これが無くなれば萬事休すだとさへ言はれて居る。

一一

出雲で使用されて居る『ソレイシャ』幷びに『ミタマヤ』といふ言葉は、神道の（普通は櫻の木で出來て居る）位牌が入れてある小さな宮か、又は、其處に位牌が置いてあつて、そして其處へ供物を捧げるやうにしてある、その家の一部分を意味することがあるといふ

ことである。さういふ供物は、それが出來るほどの人はみな、机の上に載せることになつて居て、その机は無地の白木のもので、神社で又公の葬式で供物をする時の机と、同じなる高い狹い形のものである。

家の中での神道祭祀の際、昔の祖先に向つて唱へる、最も普通な形式の祈禱は聲高くは述べぬ。神道のあらゆる通俗な祈禱の最初の法式の文句『拂ひ給へ』云々を發言してから、その崇拜者は、『我等の遠き昔の祖先の御魂よ、代々の、我々の家族の、また我々の親族の汝等祖先の御魂よ、我々の家の創立者たる汝等に、我々は今日、我々の感謝の喜びを述べる』と、ただ自分の情で言ふのである。

佛教信者の家族的祭祀では、その家のホトケの間に――疾の昔に死んだ人達の靈と、つい間近に亡くなつた人達の靈との間に――差別を設けて居る。後者は之をシンボトケ卽ち『新しい佛』、もつと嚴密に言へば『新しく死んだ者』と呼んで居る。シンボトケに對しては何等超自然的な恩惠を直接乞ひ願ふことをしない。敬つてホトケとは呼んで居るものの、新しく死んだ者は佛の境涯に達して居るとは、實は考へられて居ないからである。彼方へと長の旅路へ出たばかりて、人に救助を與へ得るよりか寧ろ、自分の方に恐らくは救助を要して居るのである。だから實際、敬虔の念の深い人達の間では、死んだ者がどうし

て居るかといふ事が情の籠もつた心配事である。小さな子が死んだ時は、殊にさうである。幼な子の魂は弱くて、色んな危難に遇ふと思ふからである。だから母は、その子の去つた魂に物言つて、恰も生きて居る息子か息女に物を言ふやうに、忠告をしたり、訓戒したり、やさしく指圖したりする。どんなシンボトケにも、出雲で言ふ普通の言葉は祈禱の形式では無くて、寧ろ懇願或は勸告の形式である。例へば次記の如くである、——

『ジヤウブツセヨ』或は『ジヤウブツシマツシヤレ』

『マヨウナヨ』

『ミレンヲノコサズニ』

斯ういふ祈禱は決して聲高くは述べぬ。これよりももつと西洋の祈禱の觀念に一致して居るのは、眞宗信者がシンボトケの爲めに述べる次記のものである、——

『オムカヘクダサレ、アミダサマ』

言ふの要も無いが、祖先崇拜は、支那及び日本で佛敎の中へ取り入れられはして居るけれども、佛敎起原のものでは無い。これも亦言ふの要は無いが、佛敎は自殺を非認する。

ても日本では、死んだ者の魂はどんな境遇に居るかとの心配が、屢〻自殺を惹起した——或は少くとも、佛敎の敎義を信じては居ながらも、原始的慣習に執着することもある人達には、自殺は是認されてゐたのである。家來は、死んだなら、自分共の領主或は女領主の魂に勸告援助、若しくは御用を爲すことが出來るかも知れぬとの信念を抱いて、自殺した。だから保元物語といふ小說に、或る家來がその年若い主人が死んだ後、

死出の山三途の河をば誰かは介錯申すべき。恐しく思召さんに付けても、先づ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らん。

と言つたとしてある。

家の內での佛敎の崇拜では、遠き昔に死んだ者共の魂卽ちその一家の本の佛(ほとけ)に對して唱へる祈禱と、新佛に對して爲す言葉とは甚だ異つて居る。次記のはその二三の實例である。これはいつも聲を潛めて言ふ。——

『カナイアンゼン』

『エンメイソクサイ』

『シヤウバイハンジヤウ』

これは商人だけが唱へる。

『シソンチャウキウ』

『ヲンテキタイサン』

『ヤクビヤウセウメツ』

上記のうちで神道崇拜者も亦用ひるのがある。老年のサムラヒは今なほその階級の特別な祈禱を唱へる、即ち

『テンカタイヘイ』

『ブウンチヤウキウ』

『カエイマンゾク』

が斯ういふ無言の定り文句のほかに、情に促されてのどんな祈禱でも、歎願であらうと感謝であらうと、固よりのこと唱へても宜い。そんな祈禱は日常生活に用ふる言葉で述べる、否、寧ろ心の中で念ずる。出雲の母親が、病氣の子供の爲めに願つて、祖先の靈に對して述べる次記の短い祈禱は一例である、——

『オカゲデ、コドモノビヤウキモ、ゼンクワイイタシマシテ、アリガタウゴザイマス！』

『オカゲデ』は文字通りに言へば『の御ン蔭で』である。原の文句には自由譯も況んや正確譯も保持し得ない一種靈的な美がある。

一二

斯く、極東の家庭での崇拜に於ては、愛の念からして死者は神とされるのである。そして此優しい以人爲神が、自己にも爲されると豫知して居る事が、老年の自然の悲哀を慰藉の念を以て和らげるに相違無い。日本では決して死んだ者を我々が爲すが如くに、あんなに早く忘れはせぬ。單純な信仰によつて、死者はなほその愛せる者共のうちに住んで居ると思はれ、家庭に在つてのその地位は、永久に神聖なものとされて居る。そして將に此世を去らんとして居る老齡の家長は、愛らしい唇が家の内の宮の前で、自分の靈に對して夜毎囁いて呉れるといふ事を、信實なる心がその苦しい折には自分に懇願し、その嬉しい折には自分に感謝して呉れる事を、優しい手が自分の位牌の前へ果物や、花の純潔な供物を、

また生前自分が好きであつた品々の美味な食物を置いて呉れ、自分の爲めに、靈と神との前に置いてある小さな盃の中へ、客に侑める香ばしい茶か琥珀色の米のワインを注いて呉れる事を知つて居る。不思議な變化が此國を襲ひつゝある。古昔の習慣は消えつゝある。古昔の信仰は衰へつゝある。今日の思想は次の代の思想ではあるまい——然し、そんなことは一切、彼はその古雅な質朴な美しい出雲では、幸にも少しも知らずに居る。彼は自分の祖先に對するが如く、自分の爲めに彼の小さな燈が、幾代も〳〵點されることだと夢見て居る。彼は、其極はめて和やかな空想で、自分の忘れられることの無い名が記してある彼の小さな塵だらけな位牌の前で、神道の祈禱にその小さな手を拍つて、そして子たる勤めの辭儀をして居る、まだこの世に生れて居ないものを——自分の子供の子供等を——見て居るのである。

第十八章　女の髪について

一

家の妹娘の髪は甚だ長い。だからそれを結ふのを見るのは、感興少からぬ觀物である。三日毎に一度結ふ。そしてその四錢掛かる作業は、一時間を要するものと認められて居る。實際は殆んど二時間を要する。髪結（カミユヒ）は先づその女弟子をよこす。それが髪を綺麗にし、洗ひ、香を附け、少くとも五通り種類の異つた異常な櫛で梳く。髪は何處から何處まで綺麗にされるから、三日は、或は四日も、我々西洋人の考への及ばぬほど清淨な儘で居る。朝、掃除をする間は、ハンケチ又は小さな紺のタオルで大事にそれを蔽ふ。そして日本の妙な木枕、これは頭を支へるのでは無くて、頸を支へるものであるが、それがこの不思議な作物を崩すこと無しに樂に寢ることを可能ならしめる。

註。前には同じ理由で男女とも同じ枕を用ひた。年若いサムラヒの長い髪は、一種精巧な結びに束ね上げ

てあつたもので、結ふのに隨分の時間を要した。髪を短くするのが殆んど一般の習慣となつてからは男は小さな枕(ボルスター)のやうな恰好の枕を用ふることになつて居る。

弟子がその受持の仕事を終つた後へ、髪結の本人が遣つて來て髷を造り始める。この仕事に髪結は、その異常な種々な櫛の他に、金を塗つた絲又は色の附いた紙縒の美しい匝と、非常に麗はしい色取りの優雅な縮緬(ちりめん)切と、花車な鋼條の彈機と、取付けないうちに髪を其上て所要の形に造り上げる籠(かごなり)形の小さな妙な物とを使用する。

カミユヒはまた剃刀を携へて來る。日本の女は——頬、耳、眉、顎、おまけに鼻も!——剃るからてある。剃るべき何があるのか。最も美はしい人間の皮膚といふ天鵝絨の彼の桃の皮のやうな毬毛(うぶげ)だけてある。が、それを日本人の趣味は取り除けるのである。が然し、剃刀には今一つ使途(つかひみち)がある。少女は總て、頭の極くの天邊の處、直徑一吋許り、圓く小さく綺麗に剃つて、それを處女たる標徴にして居る。これは額からその上を横ぎつて後へ持つて來て、後の髪に結はへてある一束の髪て、一部分だけ隱されて居る。女赤ん坊の頭は全部剃る。四五歳になると、頭の天邊の處、其處はいつも大きく剃られて居るが、其處を除いては髪を生(は)やさせる。然し剃髪部の大いさは年々減つて行つて、幼年時代を過ぎると上述した小さな個處に縮まる。そしてそれも亦結婚後、なほ一層複雜な髪の結ひ方をする

やうになると、無くなつてしまふ。

二

日本の女が多く有つて居る髪のやうな、あんなに全く眞直な黑い髪は、少くとも西洋人の思想には、理髪師(クワフユウズ)の技術を無上に發揮するのに、不適合のやう思へるかも知(註)れぬ。然し

註。日本人の髪は總て青黑だと想ふのは誤である。二つの分明な人種的標式がある。一つは髪が純黑では無くて濃い褐色で、その上また柔かくて細い。日本人の毛(シユヴルウル)で波のやうに縮れる、自然の傾向を有つて居るのを見ることもあるがそれは稀で、甚だしく稀である。此處で述べることが出來ぬ妙な理由があつて、出雲の女は縮毛を非常に恥ぢる——生れ付の不具なのよりももつと恥ぢる。

カミユヒの手腕はあらゆる美的氣まぐれのまにまに、それを取扱ふことが出來るやうにして居る。尤も、捲毛といふものは無い、また捲髪用の鏝といふものも無い。然し何たる不思議な美くしい形を採るやうに女の髪がされることか!貝形、突出、廻轉、渦卷、引延べ、其各〻が恰も支那の大家の書の筆の蹟の繋がりの如くに、それからそれへと和やかに移つて行く!カミユヒの技術は、巴里の理髪師(クワフユウズ)の熟練に遙かに優つて居る。日本人の工夫力は、

この人種の神話時代から、女の髮の結ひ方に美くしい趣向の發明と、改良とに盡くされて居る。だから、日本ほど斯んなに數多い美くしい結ひ方は、これまで他のどんな邦にも多分無いことであらう。其結ひ方は幾世紀を經て變化し來たつた。或る時は意匠が驚く許り複雜であり、或時は――長い黑髮を束ねず、その儘腰の下まで垂らすといふ、あんなに多くの古風な繪で、我々に傳へられて居る、あの優雅な風習のやうに――みやびな簡單なものであつた。然し我々がその記錄を繪に於て、有つて居る髮の型は、一々それ獨得の著しい妙味を有つて居た。印度、支那、馬來、朝鮮の美の觀念が、この神の國へ到來して、その生得の一層美はしい優美の思想に取込まれて變形したのである。佛敎も亦、これは日本の藝術と思想とにいかにも深い影響を及ぼしたものであるが、恐らくは結髮の風にも影響

註。古事記執筆の時代にすら髮を結ふ技術は、幾分發達して居たに相違無い。チエンバレン敎授のその譯譯の緒言三十一頁を見られよ。また、第一卷第九節、第七卷第十二節、第九卷第十八節、その他を見られよ。

註。美術の專門家は、それに人の姿が現れて居れば、署名の無いカケモノ或は他の藝術品の時代を、女の人物の髮の結ひ方で決定し得るのである。

を與へたのであらう。その女性の神は非常に美しい髮の結ひ樣をして居るからである。觀音或は辨天の髮を、それから――大寺院の天井の上の、虛空に浮いて居る、あの少女天使――天人の卷髮に目を留めて看るが宜い。

三

その近代の樣式の殊に人目を惹く點は、若い女の顏が具へて居るどんな色白さ、又はどんな麗はしさでも、それを氣持よく引き立てて、その容貌の精巧な光背になるやうに髮を造り上げる方法に在る。だからこの美妙な黑色の後光の背後に、その始もその終も到底も見分ることの出來ぬ、優美な輪結と編込との一つの謎があるのである。カミユヒだけが、その謎の祕鑰を知つて居る。そしてその全體を裝飾用の奇妙な櫛で支へ、また巧な彫刻のある頭の着いた、金、銀、眞珠母、透明な鼈甲、或は漆塗の木で出來て居る長い細いピン

註。その主要なそして無くてはならぬ髮のピン（カンザシ）は通例長さ七吋許りで二つに割れて居て、その充分鍛へられた二叉は、一對の箸のやうに小さな物を、摑み上げるのに用ふることが出來る。上の方の尖は匙形の小さな凸起になつて居て、それは日本の化粧に特別な用途を有つて居る。

をそれへ差す。

四

出雲の髪結(クワフユウズ)が行(ヤ)る髪の結ひ方は十四種を下らぬ。が、首府では、また東部日本の大都會の或る物では、屹度この術はもつと精巧に發達して居る。理髪者（カミユヒ）は、一定の日に或る定まつた時刻に、その依頼者を訪れて、一軒々々商賣をして歩く。七歳から八歳までの小さな女の子の髪は松江では、ただ『垂れ髪』にして置くので無いなら、普通は『オタバコボン』と呼ぶ様式に結ふ。オタバコボン（『御煙草盆』型）では、髪をぐるり四吋許りの長さに切つて、額の上の處だけも少し短く剪み切る。そして頭の上は髪を延ばさせて、それを束ねて此髷の妙な名を如何にもと肯がしめる、一種特別な恰好の髷にする。女の子が女子小學校へ通ふほどの年齢になると、直ぐとその髪は『カツラシタ』とふ可愛らしい單簡な様式に結ふか、或は恐らくは、寄宿學校の規定の様式となつて居る、『ソクハツ』と呼ぶ新規な醜い半洋風の『束ね型』かに結ふ。貧乏人の娘は、中産階級の娘も大多數はさうであるが、その小學校時代は寧ろ短い。その勉學は結婚の出來る四五年前に終

るのが普通て、しかも日本では娘は餘程早く結婚する。處女の初めての精巧な髷は、早くて十四歳或は十五歳に達した時、初めて結ふ。十二歳から十四歳までは、その髪は『オモヒヅキ』と呼ぶ様式に結ふ。それから型を『ヂョラウワゲ』と呼ぶ美くしい髷に變へる。この型には、複雑の度を異にした、種々な形がある。二年過ぎると、ヂョラウワゲは止されて今度は『シンテフテフ』（『新蝶々』型）か又は『シマダ』又の名『タカワゲ』かになる。シンテフテフ型は普通な型て、種々な年齢の女が結ふものて、大して上品とは考へられて居ないものである。シマダは、これは非常に精巧なものて、上品である。が、その家族が良い身分の人てあればあるほど、この髷が小さい。ゲイシャとヂョラウとがその大きくて高い種類の、正しく『タカワゲ』卽ち『高髷』といふその名に應ずるのを結ふ。十八歳と二十歳との間に處女は、またこの様式を『テンジンガヘシ』といふ別な様式に取換

註。シンテフテフは年いつた人は『イテフガヘシ』とも呼ぶ。尤も原のイテフガヘシは少ト異つて居る。サムラヒの娘は本當のイテフガヘシ風に、その髪を結つたものである。その名はイテフの木（學名サリスピユリア・アンデイアンテイフオオリア）から出たもので、その葉は家鴨の足の形に能く似た、妙な形をして居る。この結髪をした時の髪の、或る束(たばね)が銀杏の葉に形が似て居たのである。

へ、二十歳と二十四歳との間に『ミツワゲ』卽ち環の三つある『三つ髷』と呼ぶ様式を用ひ、そしてそれと稍〻似ては居るが一層複雜な『ミツワクヅシ』といふ髷を二十五から二十八までの若い女が結ふ。その年齡までは髮を結ふ樣式の變化は、一度々々精巧と複雜の方向にあるのである。が、二十八以後は日本の女は、もはや若いとは考へられぬ。て、その後はただ一種の髷があるだけである、――卽ち年のいつた女が用ふる、どちらかと云へば醜い『モチリワゲ』或は『ボバイ』である。

が、結婚する娘は前記の何れとも全く異つた樣式に髮を結ふ。あらゆる樣式のうちで一番美しい、一番精巧な一番金の掛かるのは、文字通りては『花嫁』といふ意味の語の『ハナヨメ』と呼ぶ、新婦の髷である。その構造はその名の如くに優美なもので、藝術的に鑑賞するやうに眺めなければならぬ。その後、人妻は『クメサ』若しくは『マルワゲ』別名『カツヤマ』と呼ぶ樣式に髮を結ふ。クメサは上品では無い、そして貧乏人の髷である。マルワゲ卽ちカツヤマは高尙である。前にはサムラヒの女は、特殊な二通りの型にその髮を結つた。處女の髷は銀杏返して、結婚後の女のは片外づしてあつた。今でも松江では片外づし髷を少しは見ることが出來る。

五

家の髮結の、出雲で、その業にかけては一等上手な、オコトサンといふのは三十ばかりの丈は低いが、今猶、餘程人目を惹く女である。その首のまはりに、美術鑑定家が『ギイナスの頸珠』と名づけて居るものをつくつて、可愛らしい柔かい筋が三本ある。これは滅多に無い、女の縹緻の一つであるが、一度それが、コトの身の破滅になりさうてあつた。その話は妙な話である。

コトにはその職業生活を始める時分に競爭者が一人あつた、――髮結としては餘程技倆はあつたが、根性の惡るい女で、ジンといふ名であつた。ジンは次第に其佳い得意を皆失つて、小さなコトが流行の髮結になつた。ところが、その年寄の競爭者は、嫉妬の憎惡に胸が一杯になつて、コトに就いて怪しからぬ話を造り出した。すると、その造り話が古い出雲迷信の肥えた地面に根附いて、不思議なほど大きくなつて行つた。その話の趣向はコトの首のまはりのその三本の柔かい筋を見て、ジンの惡る賢い心が思ひ付いたのであつた。コトは『ヌケクビ』だと觸れ出したのである。

ヌケクビとは何か。『クビ』とは首をも意味し頭をも意味する。『ヌケル』といふは匍ふ、潜み行く、密行する、窃つと辷り出るといふ意味てある。ヌケクビだといふのは體軀から離れて、夜――それだけが――忍びあるく首だといふのである。

コトは二度結婚した。そして、その二度目の縁組は幸福てあつた。が、その最初の夫はコトに大變な心配をさせ、下らぬ女と一緒になつて、到頭コトを棄てて逃げた。その後その男については全く何の噂も無かつた、だからジンはその男が姿を隠した因由の怖ろしい話をこしらへても大丈夫だと思つた。男がコトを棄てたのは、或る晩眼を覺ますと、その若い妻の頭が枕から起き上つて居て、身體の他の處は動かずに居るのに、その首は大きな白い蛇のやうに伸びて居るのを見たからてある。見ると、その頭はいつまでも長くなる首に支へられて、遠くの部屋へ入つて燈の油を皆んな飲んて、それからそろ〳〵と枕へ――首は同時に縮まつて――歸つて來た。『そして亭主は起き上つて、大恐れて家を逃げてしまひました』とジンは言つた。

話は一つが又一つを生むものだから、いろんな妙な噂が可哀相にコトに就いて擴まり始めた。或る巡査が、夜晩く、身體の無い女の頭が庭の壁へ垂れ下つて居る、或る木の實を咬んて居るのを見た。ヌケクビだと知つて劒の平てそれを打つた。首は蝙蝠が飛ぶほど早

く縮んて逃げたが、それてもそれが、あの髪結の顔だと解るほどの時間はあつたとふい話もあつた。『え、そりや本當てす』と、其事があつたとされた翌けの朝ジンは觸れるのてあつた、『嘘だとお思ひになりや、コトに會ひたいからと言つてやつて御覽なさい。出られやしません、顔が全るて脹れ上つて居ますから』。ところがこの最後の陳述は――コトはその時分劇しい齒痛を患つて居たから――事實てあつた。そして其事實が、この虚事の助けになつた。そしてその作話が地方新聞にきこえると、その新聞は――ただ一般人民の輕信の珍らしい一例として――その事を載せた。するとジンは言ふのてあつた、『私しや本當の事をお話し致すんぢやありませんか。御覽なさい、新聞が書いて居ります！』

そこて物見高い人達が、多勢コトの小さな家の前に集つて來て、コトが自殺しないやうにと、始終夫は見張して居なければならぬほどに、コトの生涯を堪へ忍びがたいものにした。幸にもコトには、髪結として數年そこへ傭はれて居た、縣知事の家に心の善い友があつた。て、縣知事はその怪しからぬ事を耳にして、それについて公然の非難の文を書いて、それに自分の名を署して印行した。ところが松江の人達は、その老武士たる縣知事を神の如くに尊敬して居て、その片言隻句をも信ずるのてあつた。て、彼が書いたものを見て、自ら恥ぢ、かつまたその虚言とその虚言者を非難した。そしてその小さな髪結は、やがて

一般の同情の爲め前よりか一層繁昌するやうになつた。

昔時の極はめて異常な信仰のうち、出雲やまた他の處に、亞米利加の所謂『旅興行の附屬の觀物』て生き殘つて居るのがある。日本の附屬觀物にどんなものがあり得るか、無經驗の外國人は決して想像も及ばぬてあらう。或る盛んな祭日には觀物師が出て來て、何處かの寺の庭て蓆と竹との蜉蝣的な芝居小屋を建て、怪しい限りの不思議な物で期待を滿腹させ、そして來るのが不意のやうに、不意に姿を消す。鬼の骸骨、化け物の爪、『羊ほど大きな鼠』、これが自分が見た、最も異常ならざる觀物のうちにあつた。化け物の爪といふは非常に見事な鱶の齒てあつた。鬼の骸骨といふは――その頭蓋骨へ巧に角を附けたほかは全く――猩々のてあつた。そしてその驚くべき鼠は、自分は馴らした袋鼠だと發見した。自分の充分に合點の行かなかつたのは、ヌケクビの見せ物て、若い女が、見たところ二呎ばかりの長さに首を伸して、その藝當中もの凄いいろんな顏をして見せた。

六

なほ女の髮に就いて不思議な古い迷信が二三ある。

メドウサの神話は、それに對應するものを幾つも、日本の民間傳說に有つて居る。そんな物語の主題は、いつも、髮が夜だけ蛇に變る、そして到頭それは龍か龍の娘かと解る、驚く許り美しい女てある。が、古昔は、若い女はどんな女てもその髮は、或る種の苦しい事情の下に居ると、蛇に變ると信ぜられて居つた。例へば、長く抑へ忍んだ嫉妬心の爲めに。

舊日本時代には、分限者てその妾（メカケ又はアイセフ）をその正妻（オクサマ）と同じ屋根の下に置いて居たものが多かつた。苛酷極はまる家長的訓練が、メカケとオクサマとを日中は見た處ては全く和合して、一緒に暮らさなければならぬやうにしても、その二人の心中の憎惡は、夜その髮毛の變形によつて、自づと現れたといふことてある。どちらもその長い黑髮が解けて、ひしめいて、相手のそれを嚙まうと力めるのであつた。そして寢て居るその二人の鏡すら、ぶつつかり合ふのてあつた。昔の諺は言つて居る、カガミハ

ヲンナノタマシヒ――『鏡は女の魂』――だからである。それから、加藤左衞門重氏といふ人についての有名な傳説がある。その妻の髪とその妾の髪とが夜、毒蛇に變つて、互に蹠き絡んでひしめいて嚙み合つて居るのを視た。そこで加藤左衞門は己が過失の爲めに斯く存する、その人知らぬ劇しい憎惡を大いに歎き、頭を剃り、高野山の佛敎大僧院で僧となり、死ぬる日まで、カルカヤといふ名で暮して居たといふのである。

註。昔の日本の鏡は金屬で出來てゐて、極はめて美しいものであつた。カガミガクモルトタマシヒガクモルは鏡に關する今一つの珍らしい諺である。恐らくどんな國語で書いてあるものでも、鏡についての最も美しい最も人を感動させる物語は、ヂエムズ氏が譯した『松山鏡』と呼ばれて居る物語であらう。

七

死んだ女の髪は、非常に簡單にしたシマダに幾らか似て居て、何の裝飾も無い、タバネガミと呼ぶ樣式に結ふ。『タバネガミ』といふ名は、稻の束のやうに、一束に結んだ髪といふ意である。この形式のをまた服喪の期中、女は結はねばならぬのである。

が然し、幽靈は髪を長く捌いて、物凄く顏に垂れて居るやうな繪には描いてある。そして柳は、屹度その垂れる枝が物悲しさを暗示するからであらう、幽靈が好む木だと信ぜられて居る。その下で幽靈は、その影のやうな髪毛を、その木の長い亂れた髪と交じへて、夜中悲しんで居るといふ。

傳説に據ると、圓山應擧が日本で幽靈を描いた最初の繪師だといふ。將軍が彼を御殿へ招いて『自分に幽靈の繪を描いて呉れ』と仰せられた。應擧はしか致しませうと約束した。が、その命令をどう滿足に果したらばと迷つた。その後二三日して、その一人の叔母が大病だと聞いて、見舞に行つた。非道く痩せ衰へて、死んで長い間經つた人のやうな顏をしてゐた。病床に侍して看とりして居るうちに、物凄い靈感が彼を襲つた。肉の無い顏と振亂した長い髪を描いて、その匆々のスケッチからして、全く將軍の期待に優る幽靈を一人物した。後、應擧は幽靈の繪師として非常に有名になつた。

日本の幽靈はいつも透明な、そして――ただその姿の上の方だけが判然輪廓が見えて居て、下の方は全く消え失せて居る――異樣に脊丈の高いものに現されて居る。日本人の言ふやうに『幽靈には足が無い』その姿は、地上或る距離の處で初めて見えるやうになる、蒸發氣のやうである。そして美術家の構想では、風に動く蒸汽の如くに、ふわついて、伸び縮みして、ゆらめいて居る。時折變化の女が、生きて居る女の姿をして、繪本に出て來

る。が、それは本當の幽靈では無い。それは狐が化けた女か、又は他の化け物で、その神異な性質はその眼の一種特異な表情と、到底もありさうに無い一種の魑魅的な品の好さとで、それと知ることが出來るのである。

日本の子供は、何處の國の子供とも同樣に、恐怖の愉快を非常に面白がる。だからそんな快感がその主たる興味となつて居る遊戯が澤山ある。その中にオバケゴト卽ち『幽靈遊び』がある。子守女か姉娘かが髮を前の方へ解いて、顏の上へ垂れるやうにする。そして繪本の幽靈のあらゆる姿勢を眞似て、呻き聲を立て物凄い身振をして、小さな子等を追つかけるのである。

八

日本の女の髮毛は、その最も豐麗な裝飾であるから、そのあらゆる所有物のうちで、失なくするのを一番苦痛とする物である。だから昔時は、不貞な妻を殺すには、餘りに男らしい男は、女の髮を悉皆剃つて、追ひ出すのを充分の復讐と考へて居たのである。ただ最も大なる信仰か又は最も深い愛のみが、女をして自ら進んでその髮總てを捧げしめ得るのである、——出雲の多くの神社の前に吊るされて居るのを見る一部分の犧牲は、一房二房の長い太い切髮は、あるけれども。

斯んな犧牲の方面に、信仰なるものが如何なる事を爲し得るか、これは京都の本願寺といふ大寺院に吊るしてある、女の髮毛で編んだ大きなケエブルを見た人が一番能く知つて居る。だが、表示的といふ點では遙かに劣るけれども、愛は信仰よりも力强いものである。夫に死に別れた妻は、古昔からの習慣に從つて、夫の棺に納めて、夫と一緒に埋めるやうに、その髮の一部分を犧牲にする。その量は一定しては居らぬ。大多數の場合、髷の樣子がその爲め少しも害はれぬほどに、極はめて少しである。が、亡夫の靈に永久に忠實でありようと決心する女は全部を棄てる。自分の手でその髮を切つて、そのつや〳〵した犧牲全部を——その若さと美しさの印を——死者の膝の上に置く。

決して二度と生やさぬ。

第十九章　英語教師の日記から

一

一八九〇、九月二日、[譯者註一]松江にて

私は出雲松江の尋常中學校及び師範學校に於て一ヶ年間英語教師として奉職する契約をして居る。

尋常中學校は暗青灰色に塗つた歐風の大きな木造二階の建物である。これには約三百の通學生を收容する設備がある。二方は運河、二方は甚だ靜かな街路で境になつた大きな方形の地面の一方に建つて居る。この敷地は舊城に甚だ近い。

師範學校は同じ地面の他の一角を占めた更に大きな建物である。同時に又更に立派である、眞白に塗つて、それから頂上に小さい圓屋根がある。師範學校には僅かに百五十程の生徒しかないが皆寄宿生である。

この二つの學校の間にまだ外にいくつかの教育に關する建物がある、これ等について私

は追々分るやうにならう。

この日は私が學校に出た第一日である。西田千太郎[譯者註二]氏は私をつれてこれ等の學校に案内し、校長及び同僚となるべき人々に悉く紹介し、授業時間の事と、教科書の事につき必要な注意を悉く與へ、凡て必要な物を私の机にのせてくれなどした。しかし授業の始まる前に、かねて官房書記を通じて私と契約のできてゐた縣知事籠手田安定[譯者註三]氏に紹介して貰はねばならない。そこで西田氏は私を往來の向側の別の歐風の建物にある縣廳へ案内する。

縣廳に入り、廣い階段を上り、歐風に敷物をしきつめた一室に入る、その室には出窓もあれば、クッションのついた椅子もある。ひとりの人が小さい圓卓に對して椅子にかけて居る、その周圍に五六人の人が立つて居る、何れも日本の禮服を着て居る、――立派な絹の袴、絹の着物、絹の紋付羽織、――自分の平凡な洋服を恥ぢ入らせる立派な威嚴のある服裝である。これ等は縣廳の役人と教師である、椅子にかけたのは知事である。知事は私に挨拶せんがために立つて巨人の握手を與へる、この人の眼を見て私は一生この人が好きになるやうな氣がする。溫和な力と、大樣な親切の多く表はれた――佛の靜けさが悉く表はれた――小兒のやうに鮮やかな正直な顏である。この人の側にあつては外の人々も甚だ小さく見える、實際この人を始めて見た時は別人種の如き感じがする。私は古への日本の

英雄はこの人と同じ型ではあるまいかと考へて居る時、この人は私に椅子を取るやうに合圖して軟い低い聲で私の通譯の勞を取れる人に話しかける。その顏を見た時に私が豫想した通りの流暢な深い聲に一種の魅力がある。

給仕が茶をもつてくる。

西田氏通譯する、『知事はあなたが出雲の昔の歷史を御存じかときかれるのです』

私はチエムバレン教授の譯にかかる古事記を讀んで、日本最古の國の話を少しは心得て居る事を答へる。日本語で話が暫らくつづく。西田氏は私が昔の宗教と風俗を知りたいので、日本に來た事、殊に神道及び出雲の傳說に興味をもつて居る事を知事に語る。知事は自分に杵築、八重垣、熊野の名高き神社に詣てはいかがと云つて次ぎに問ふ、

『あなたは神社の前で手を拍つ起りの傳說を御存じか』

私は知らない事を答へる、そこで知事はその傳說は古事記傳に出て居ると云ふ。

『第十四卷第三十二章[譯者註四]にあります、八重言代主神が手を拍つた事が書いてあります』

私は知事の有難い忠告や教へに對して御禮を云ふ。しばらくの沈默ののち又眞率なる握手をして丁寧に送り出される、そして私共は學校に歸る。

譯者註一。明治二十三年九月二日は始めて登校せし日。當時は學年は九月に始まり七月に終つた。

譯者註二。西田千太郎（今は故人）英語の教師で當時の教頭、現福岡大學教授工學博士西田精氏の令兄。

譯者註三。籠手田安定（今は故人）、山岡鐵舟の高弟、故武士の面影のある人、熱心な國粹保存家であつた。

譯者註四。十四卷三十二章と云ふうち、十四卷は古事記傳の卷、三十二章はチエムバレンの飜譯の方でできた分ち方、手をうつ事の古き文書に見えたのはこれが始めてと云ふ意味であるが、これを讀めば、手をうつ事はそれから起つたやうに見える。

二

私は中學校に於て三時間教へた處である、そして日本の生徒を教へる事は私の想像したよりは面白い事が分つてくる。各級は豫め西田氏がよく準備して置いてくれるので私の全く日本語を解しない事が教へる事に何等の困難をも來たさない。その上生徒は私が話す時には私の言葉をいつも悉くは解せないでも白墨で黑板の上に書く事は何でも分る。生徒の多數は幼時より日本の教師について、すでに英語を學んで居る。皆非常に順良で又辛抱强

い。昔からの習慣に從つて教師が入り來る時には全級立つて頭を下げる。教師は禮をかへしてのち出席簿を調べる。

西田氏は非常に親切である。できる事は何でもして自分を助けてくれて、つねに及ばざるを恐れて居る。勿論ここにも打勝つべき艱難がいくつかある。たとへは生徒の名の分るまでには餘程の時を要するのである、それ等の名の多數は私の前に生徒名簿を置きながら發音する事もできないのである。又各組の名は各教室の入口に外國教師のために、それぞれ英語でかいてはあるが、自分に分るやうになるまでには少くとも數週間を要するのである。それまでのところ西田氏はたえず自分を案内してくれる。氏は又長い廻廊をへて師範學校に行く道を教へて、そこで自分に案内の勞をとつてくれる中山（譯者註）と云ふ教師に私を紹介する。

私は師範學校では只四時間だけ教へる約束になつて居る、しかしそこでも教官室で美しい机をあてがはれ、直ちに我家へ歸つたやうな感じを與へられる。中山氏は私のこれからの生徒に紹介する前に、學校にある面白い物を悉く、私に見せる。生徒への紹介は學校に關する經驗としては、愉快に、かつ、珍らしい物である。私は廊下を通つて案内され、紺の制服をつけた青年の滿ちた白壁の大きな明るい一室に導かれる。ささが三支（ミツマタ）になつた一

本足でささへてある極めて小さい机に向つて銘々坐る。室の一方に教師の分の高い机と椅子とのある教壇がある。この机のところに私が席をとると一人が英語で聲を上げる『起立』卽ち一同はばね仕かけて動くかのやうに飛び上るやうな擧動で立つ。『敬禮』再びさきの聲が命令する、それは袖に級長の筋のある若い生徒の聲である、そこで一同私に敬禮する。私はこれに答へて頭を下げる、一同席に復する、それから授業が始まる。

師範學校の教師は毎授業時間の始めにこれと同じ軍隊風の敬禮を受ける、ただ命令は日本語でされる。私にだけ英語でされるのである。

譯者註。中山彌一郎（今は故人）

三

一八九〇、九月二十二日

師範學校は縣立である。生徒は品行方正を證する履歷書を出し、試驗をへて入學を許されるが人數には勿論限りがある。生徒は月謝も寄宿料も書籍代をさへも、旅費も、衣服代も拂ふに及ばない。國家の費用で衣食住と學問を受けて居る代り卒業ののち五ヶ年間教員

として國家に奉公すべき義務がある。しかし入學すれば必ず卒業する物とは定まらない。年々三回乃至四回の試驗がある、一定の高い標準の試驗點を得ない生徒は如何にその品行が模範的で如何に勉强に熱心でも學校を退かねばならない。國家の教育事業と云ふ點から何等の容赦も示されない、そしてこの教育事業は生れつきの才能とその才能を證明する高い標準を要求する。

その訓練は軍隊的で、峻嚴である。實際師範學校の卒業生は軍隊(譯者註一)で一年以上も歸休する事を軍法によつて許される程その訓練は完全である、それ程完全な軍人となつて學校を出るのである。行狀も又一の必要物である、特別の評點がこのために設けてある、入學の當時如何に無作法でも、そのままである事は許されない。男らしい精神は養成される、そして粗野の風は排せられ、獨立自制の風は發達するやうになる。生徒は言語を發する時には教師の顏を見なければならない、言語は明確であるのみならず又高聲でなければならない。教場での行儀は教室内の器具によつても幾分よくしないわけに行かないやうになつて居る。小さい机は餘り狹くて肘をかける事ができない、腰かけにはよりかかるところがない、それて生徒は勉强中は固く眞直に身體をもたねばならない。生徒は又極めて清潔にさつぱりと身を整へ置かねばならない。どこで又いつ教師に遇つても止まつて足をそろへ體を眞直

にして兵式の敬禮をしなければならない。しかもこれは書く事もできない程のすばやい美しさでなされるのである。

授業時間中の生徒の態度は强いて云へば餘りによすぎる。ささやきの聲も聞えない、許可なしには書物から頭をあげる事もない。しかし教師が名を呼んで生徒にあてるや否や、その少年は直ちに立つて、慣れない耳には外の生徒の靜肅沈默と對照して殆んどびつくりする程力のある調子で答へるのである。

師範學校の女子部には五十人程の若い婦人が教員としての訓練をうけて居るがそれは別の二階作りの四角な大きな風通りのよい建物で、附屬の庭園と共に外の建物と全然別になつて、往來より見えないやうになつて居る。これ等の少女は最新の方法で西洋の科學を學ぶと共に日本の藝術卽ち刺繍、裝飾、繪畫、生花の訓練をうける。洋畫も又教へられる、しかも立派に教へられる、それはことばかりでない、到る處の學校で。しかし日本風の方法と聯絡して教へてある、この聯絡の結果は必ずや將來の美術作品に多少のよい影響を與ふる事を期待してもよからう。繪畫に於ける日本學生の平均能力は歐洲學生のそれよりは少くとも五割は高いと私は思ふ。日本人種の魂は根本的に美術的である、その上幼時より教へ込まれる極めてむつかしい漢字の書法は、繪畫の先生が透視畫法の講義を始めるずつ

と昔に既に眼と手とを極度に（殆んど西洋人には夢にも分らない程の程度に）訓練して居るのである。

この大師範學校に附屬して、又中學校にも廊下でつらなつた小さい男兒女兒の大きな小學校がある、教師は卒業の時期に達した男女の學生である、かくして國家の奉公に入る前に彼等の天職を實地に練習するのである。教育に關する見物としてはこの小學教育程、同情のある外國人にとつて興味のある物はない。私の見た第一の教室では、極めて小さい女兒男兒の一組が（中にはこの子供等自身の人形の如く不思議に美しいのが居る）眞黑な草紙を机上に置いて屆んで居るところである、所謂墨と筆とを一心に使つてその黑い草紙を一層黑くしようとでも努めて居るのだらうと他人には思はれる。實は彼等は一筆一筆漢字と假名とを書く事を習つて居るのである。一筆がよくてきたあとでなければ又つぎの一筆を下す事は許されない、一字を書く事はなほさらの事である。第一回の課業は充分終らないずつと以前に白紙は無數の未熟の筆のあとで悉く一樣に黑くなつて居る。しかし同じ紙はやはり用ひられる、ぬれた墨は乾いた墨の上では更に黑いあとをつけて容易に見られるからである。

つぎの室ではさみを使用する事を習へる一組の子供を見る、日本のはさみは一つになつてゐて餘程U文字の形にできて居るが私共のはさみより餘程あつかひにくいやうである。小さい子供はひな形又はこれから學ぶ特別の物や符號を切り出す事を習はうとして居る、花の形は最も普通のひな形であるが時としては何かある符號なども題として與へられる。

又ある教室では別の小さい組が唱歌を習つて居る、教師は黑板に白墨で音譜（ド、レ、ミ）を書き、そして手風琴に歌を合せて居る。子供は日本國歌（君が代）及びスコットランドの節に合せてできた二つの日本の唱歌[註二]をすでに知つて居る、その一つをきいて私はこの極東の片田舎に於ても、ずつと昔の種々の樂しい思ひ出にかへるのである。

この小學校では制服を着ない、皆日本服を着て居る、男の子供は藍色の着物を着て、小さい女の子供は蝶々のやうに光つた色々の色の着物を着て居る。着物の上に女の子供は袴[註一]をはいて居る、そしてこの袴は鮮やかなうす紫である。

授業時間の間に十分間を休憩なり遊戯なりに與へてある。男の子供は鬼ごつこやかくれんばうや又はその他の面白い遊戯をする、笑ふ、はね廻る、叫ぶ、駈けつこをする、相撲をとる、けれども歐洲の子供のやうに喧嘩やつかみ合ひはしない[註二]。小さい女の子供の方は又別に一緒になつて手まりをついたり、又は何か大勢で歌につれて一緒に遊戯をするため

に圓形をつくる。圓くなつて一緒に歌ひ合ふ可愛い聲はたとへやうのない程やさしく又美はしい。

註一。天照皇大神がもすそを結んで、始めてはかまを發明されたと云ふ傳說がある。

註二。かう書いてから二年日本の諸學校に敎師として敎へたが一つも學生間の本氣の爭鬪を聞いた事がない。すでに八百人程敎へて居る。

かんごかんごしようや　譯者註三
仲よにしようや
どんどんとくんて
地藏さんの水を
松葉の水入れて
まつくりかへそ

私はこれ等の生徒を敎ふる若い婦人も若い男子も自分等の敎へ子には非常にやさしい事を認める。遊戲のために着物が亂れたり汚れたりして居る子供はわきへ連れ出されて親身

の兄にされるやうに丁寧にそれを直したり塵をはらつたりして貰ふ。

小學生を敎へて彼等の未來の天職の準備とするまだその上に師範學校の女學生はその近くの幼稚園にも敎ふる事を習ふ。大きな陽氣な日當りのよいいくつかの室のある愉快な幼稚園である、そこでは極めてよい思ひつきの敎育玩具が毎日使用するために棚の上に澤山積んである。

譯者註一。以前は師範學校卒業生には兵役はなかつたがその後六週間現役をやればよい事になつた、この當時は六週間現役制度のできたばかりの頃であらう。

譯者註二。スコットランドの節に合せた二つの日本の歌、一つは「螢の光」一つは「美しき我兒はいづこ」である、前者は Auld Lang Syne 後者は Blue Bell より取つた物ときく。Auld Lang Syne. スコットランドの方言で昔の事、ことに幸福であつた時の事。

譯者註三。東京邊の子供のする「かごめ、かごめ、かごの中の鳥は……」と云ふ遊戲に似たものと云ふ、歌の意味は分らない處あるが「仲よにしようや」は「仲よく致しませう」なるべく「まつくりかへそ」は「ひつくりかえそ」と云ふ事。

四

一八九〇、十月一日

しかし私は師範學校について知るところ少いのは止むを得ない。嚴密に云へば私はそこの教官の一員ではない、私の時間の大部分はこの中學校にあるのである。中學校が私のつとめをたゞ貸して居るに過ぎない。私は師範學校の生徒は教室で見るだけである、彼等は松江に於ける先生の私宅を訪ふために外出する事は許されないからである。それで私は中學校の生徒に對するやうに、師範學校の生徒に對して親しくなる事は望まれない、中學校の生徒は私に『Sir』（あなた）と呼ばないで先生と呼んで、私を謂はば兄のやうに遇するやうに、なりかかつて居る。〔私は教師（Master）と云ふ字を用ふる事を好まない、日本では教師ぶる必要はないからである〕そして私は師範學校の大きな明るい居心のよい教官室に居るよりも、私の机が西田氏のと相ならんで居る餘り綺麗でない寒い教官室に居る方がもつと氣樂である。

壁に日本文字の澤山ある地圖がある、進化論の見方から動物學の事實を示した二三の大きな圖もある、小さい黑い漆塗りの小板のぎつしりつまつた大きな枠がある、それが皆一

面にはまつて居るから、全體の表面が黑板の表面のやうに一樣になつて居る。これ等の黑い小板に白く教師の名、課目、組、時間割など書いてある、むしろ塗つてある、この巧みな板の配列で時間の變りなどは板さへ置き換へれば分る。何れも漢字と假名で書いてあるから、私には全體の案と目的に關する點を除いてあとは分らない。私は私の名の文字と數字のやさしいのだけしか學んでゐない。

銘々の先生の机に藥のかかつた青白色の瀬戸物の小さい火鉢がある、火床に少しの赤い火が入れてある。しばらくの休憩時間に各教師は眞鍮、鐵、銀の小さいきせるで煙草を吸ふて居る。この火鉢とあつい茶の一杯が教場の疲勞を慰むるのである。

西田氏との外に一二人の教師は英語が達者なので私共はこの休み時間に時々談笑するが大概は皆默つて居る。何れも授業時間で疲勞するから默つて煙草を吸ふ方を好む。こんな時には聞えるものは時計のひびきと火鉢のふちで吹がらを落す小さいきせるの鋭い音ばかりである。

五

一八九〇、十月十五日

私は今日島根縣全體[譯者註一]の學校の例年の運動會を見た。この競技は二の丸の城内の大廣場で行はれた。昨日圓形のトラックは仕切られ、高飛びのためにしがらみは造られ、參觀人や來賓のために數百の木の腰かけは準備せられ、見事な假屋は知事のために設けられた、何れも日暮までにでき上つた。周圍は板の腰かけの層で段々と高くなり、知事の席には飾りや旗のあるこの運動場は廣大なる圓戲場のやうに見える。十里以内の町村から集つた學童は驚くべき數である。殆んど六千の男女の生徒はこの競爭に加はるために集つた。兩親、親戚、教師は腰かけの上や門の内で非常な群集をなしてゐた。この一大區劃を見下せる城壁の上には、恐らくこれだけで松江市の人口の三分の一にも當る程の更に大多數の群集が集つてゐた。

各競技の始めと終りの合圖はピストルの發射であつた、この運動場内は一軍團をも容れる程の廣さがあるから、各所に同時に四種の運動が行はれた、そして賞品は知事手づから各競爭の勝利者に授けた。

各學校の各組に於ける選手競走があつた、全體のうちで自分等の五年級の坂根が一等ときまつた、坂根は綽々たる餘裕を示して四十ヤードも他に先んじて決勝點に入つた。彼は私共の學校の運動選手である、强壯であるが同時に溫良である、それで私は彼が兩腕に一杯賞品の書物をかかへて居るのを見て甚だ嬉しく思つた。彼は各劍士の左腕に結びつけた小さい土器を割るのて勝負のきまる擊劍の仕合にも勝つた。又彼は大きな生徒のうちに入つて跳躍の競爭にも勝つた。

しかし勝利者は外にも數百人あつた、そして數百の賞品は與へられた。一人の左足と一人の右足とを結び合せて二人づつになつて走る競走[譯者註二]もあつた。同じく奇妙な競走[譯者註三]があつた、この競走に勝つためには走るばかりてなく代る代る這うたり、よぢ上つたり、跳びこえたり、飛んだりする技倆によらねばならない。少女の競走もあつた（空色の袴とさまざまの色の着物を着て蝶々のやうに美しく見えた）、競走者は芝生に散らしてある無數の球のうちから色のちがつた球を三つ拾ふて走らねばならないと云ふのであつた。この外に少女の所謂旗競走もあつた、それから羽根をつく仕合もあつた。

つぎに綱引があつた。しかも綱の一方に百人、他方に百人の大きな綱引であつた。しかしこの日の最も驚嘆すべき運動は啞鈴體操であつた。五百人程のあつさの列をつくつた六

千の男女の生徒が方々の小さい木造の塔から一同を指揮せる體操教師の合圖に隨つて、一萬二千の腕が全く同時に上下し、一萬二千の草履をはいた足が進んだり退いたりした、六千の聲が同時にそろふて啞鈴體操の『一、二、三』を唱へて居た、『一、二、――三、四、――五、六、――七、八』

最後に『城の取りあひ』といふ珍らしい仕合があつた。竹の枠に紙をはつた一丈五尺程の日本の塔の二つの模型が場内の各一方に建てられた。城の内部に蓋のない器に燃燒液があつた、もしこの器がくつがへれば全建築が火になるわけてある。二組に分れた少年が紙の壁を造作なくつき破る木の球で城を砲撃した、忽ちのうちに兩方の塔が盛んに火焔を上げた。勿論さきに城の燒けた方がこの仕合に負けたのであつた。

運動は午前八時に始まり、午後五時に終つた。それから合圖に隨つて一萬の聲が莊嚴な『君が代』を歌ひ出した、そして日本の天皇及び皇后兩陛下の萬歳を三唱して終りを告げた。

日本人は自分等の歡聲を上げる時のやうに叫んだり、どなつたりはしない。日本人のは歌ふのである。長い叫びは何れも大きな音樂の合唱の始めの調子のやうに『アアアアアアアアア』である。

『譯者註一。島根縣全體の學校は少し大げさ。

譯者註二。二人三脚の事。

譯者註三。障礙物競走の事。

六

舊日本のこの最も邊鄙な地方にても、植物學、地質學その他の科學が日々教へられる有樣を見る事は頗る驚くべきである。植物生理學や植物の組織の性質は立派な顯微鏡の下に研究される、しかも化學と關係して研究される、そして一定の時期に教師は各級を田舍に率ゐて、標本となるべきその地方の花卉草木を採集してその學期の課業を説明する。有名なる札幌農學校の卒業生の教ふる農學は、全く教育の目的で學校が買ふて維持して居る田畠て實際に説明される。地質學の課業は、湖水の近傍の山々又は海岸の恐るべき斷崖絶壁を訪れて參考とされる、そこては學生は、地層の形狀又は岩石の歴史のそこに現れた物を親しく學ぶ。湖水を入るる凹地層及び松江近傍の地方は、ハックスレー(譯者註)のすぐれた小冊子

に示してある教案に隨つて地相學的に研究するところとなつて居る。生物學も又最新最良の方法によつて、又顯微鏡の助けによつて教へられて居る。かくの如き教授の結果は時に驚くべき物がある。私は一人の生徒僅か十六歳の少年が、自ら進んである東京の大學教授のために、海產植物の二百種以上を集めて分類したのを知つて居る。又一人、十七歳の少年が手近に一冊の參考書もなく、そして後に自分の發見したところでは一つの誤りも、とり落しもなく、自分のために松江の近傍で見出される凡ての蝶類の科學的目錄を自分の手帳に書いてくれた。

譯者註。Huxley (1825—1895) は有名なる生物學者、(生物學者なるが故に化石、その他の研究より physiography の著述がある)

七

文部大臣をへて、陛下は明治二十三年十月三十日の日附の勅語を帝國のあらゆる學校に賜はつた。そこで各種の學校の學生教師集つて教育勅語の捧讀をきくのである。

八時に中學校の私共は、講堂に集つて知事の來校をまつて居る、知事は各種の學校でこれから勅語を讀むのである。

まつ事只暫らくにして、知事は縣廳の凡ての官吏と松江市民の重なる者を率ゐて來る。一同起立して知事に挨拶する、つぎに國歌は合唱される。

それから知事は壇に上つて勅語を取り出す、絹表裝の卷物になつた漢字交りの書き物である。知事は徐ろに織物の包裝からこれを引き出して恭しく額に捧げ、これをほどいて再び又額に捧げ、しばらく嚴肅に一息ついて後、彼の朗らかな深い聲で流暢なる辭句を、古風な讀み方で讀み始める、その讀み方は一種歌のやうである——

『朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ

顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』

それから知事と校長は短い話をする、勅語の深い意味について注意し、かつ一同にこれを記憶し且つ固く守るべき事をすすめる。

そのあと生徒はその日休みとなる、すでに聞いたところを一層よく反省するためである。

八

近代日本の教育制度では凡て教育は極めて親切に穩かに施される。教師は只教師である、英語の意味で云ふマスターと云ふ者に當らない。生徒に對してただ先生卽ち兄の關係を有するだけである。教師は生徒に對して、自分の意志を押し通さうとはしない、罵る事は決してしない、批評がましい事も餘りしない、罰する事も餘りない。日本の教師で生徒を打

つ者は決してない、そんな事をしたら、その人は直ちに自分の位置を捨てねばならない。教師は決して怒らない、もし怒つたら生徒の面前及び同僚の心中に自分の價値を下げる事になる。實際日本の學校には罰はない。時々大のいたづら者が、休憩時間に校舍内に留め置かれる事はある、しかもこの輕い罰も直接教師が課するのではない、教師の苦情をきいて校長が課するのである。こんな場合でもその目的のあるところは娯樂を奪ふて苦痛を與ふるのではなく、一過失を示して一般の戒めとするに過ぎない、そして多數の例によれば、一人の少年が自分の仲間の前で自分の過失を深く自覺せしめられる事は、過失をくりかへす事を妨ぐるだけの力は充分ある。鈍い生徒に餘計の課業を強ゆるやうな或は四五百行を寫して眼を勞せしむるやうな殘酷な罰は夢にも見られない。又かりにこんな種類の罰則があつたとしても現在の狀態ではもはや生徒自身が許して存し置かないであらう。日本國中到るところの教育當局者の大概のやり方は罰しでもしなければ充分に制し切れない生徒はその學校に置かないのである、しかし放校と云ふ事もまれにしかない。

學校から家に歸る道すがら城内の廣場を通つて近路をする時に、私は屢〻美はしい物を見る。着物をきて、草履をはいて、帽子を冠らない三十人ばかりの小さい少年の一組がや

はり日本服を着た立派な若い日本の教師に行進しかつ歌ふ事を習つて居る。歌ふ時に列をつくつてそして小さい素足で拍子をとつて居る。教師は愉快なはつきりした高調子の聲の人である、列の一方に立つて歌を一行づつ歌ふ、つぎに凡ての少年がそれにならつてそれを歌ふ。今度はそのつぎの一行を歌ふ、又それを一同がくりかへす。もしまちがへば又改めてその歌を歌ひ直さねばならない。

それは日本の英雄愛國者のうちの最も貴い楠正成の歌である。

九

私は教師の方で嚴に失する事があれば、學生の方で中々容赦しないと云つて置いたが、この事は英人や米人の耳に變にきこえるかも知れない。トム・ブラウン[譯者註一]の學校は日本に存在しない、それより通常の公立學校は、デ・アミチスの『クオレ』[譯者註二]にあんなに面白く寫してある理想的伊太利の學校によほど似て居る。その上日本の生徒は一種の獨立を享有してゐてそれを當然と心得て居る、これは西洋の人が嚴しい訓練に必要と考へて居る事と全く反對である。西洋では教師は生徒を放校するが、日本では丁度それ程生徒が教師を放逐す

る事がある。各公立學校は熱心な元氣のよい小共和國で校長と教師はそれに對して單に大統領と內閣の關係を有するのである。實際校長と教師は東京の文部省の推薦によつて縣廳が任命したのではあるが事實に於ては彼等の能力及び人格が學生によつて認められて始めてその地位を維持するのである、もし能力なり人格なりに缺くるところがあると思はれる場合には一種の革命的運動によつて放逐されがちである。生徒は彼等の力を時々濫用するとよく云はれて居る。しかしこの說は嚴格なる英國風の訓練を非常に過信して居る西洋人の口から出るのである。（これについて、横濱の一英字新聞が樺の棒主義を輸入する事を主張した事を思ひ出す）私の觀察は私につぎの事を知らしめた、そして多く經驗をつんだ他の人々もさう信じて居る、卽ち教師に反抗する生徒の大概の場合に於て、道理が生徒側にあるのである。生徒が嫌ふ教師を侮辱したり、或は教場で邪魔をしたりする事は殆んどない、ただその教師の止められるまでは學校に出ないのである。個人的感情は私の知り得る限りではこんな要求の第二の原因となる事は、時にはあるかも知れぬが、第一原因となる事は殆んどない。擧動が冷淡であるとか、或は更に進んで不親切であると云はれる教師でも、教師としての資格、或は公平の念があると生徒の信じて居るうちは、生徒はその教師に服し又尊敬する、そして生徒は教師の不公平を發見するに鋭敏なると共に、その才能

を認むる事も鋭敏である。又一方に於ては教師の性質がよいと云ふだけでは智識の不充分な事及び智識を傳へる熟練の不足と云ふ事を償ふ事にはならない。私は近傍のある公立學校で化學の教諭を止めて貰ひたいと生徒の要求した例を聞いた。この不平を述べる時、彼等は打明けて云つた『私共はこの先生が好きです。先生は親切です。先生のできるだけをつくして居られるのです。が先生は私共の習ひたいと思ふだけ私共に教へる事はできません。質問に答へる事ができません。先生のなさる實驗の説明ができません。前の先生はこんな事は皆できました。私共は別の先生が欲しいのです』調べて見ると生徒側の云ひ分は全く事實ときまつた。この若い教師は大學の卒業生であつた。よい推薦を受けて來たのであるが教へようとする科學の周到なる知識と教師としての經驗とを缺いてゐた。日本では教師が學位があるので成功するとはきまらない、ただ實際の知識とその知識を容易に又充分に傳へる技倆とによつて成功するのである。

譯者註一。Thomas Hughes（1823—97）の小説 Tom Brown's School-days に表はれた Rugby の學生生活、それには爭鬪も友情も、惡戯も勉强もある。

譯者註二。Cuoré これは日本にも『愛の學校』『學童日誌』など種々の飜譯も、拔萃もあつて人の知るところ、イタリーの小説家 Edmondo De Amicis（1846—）の作。

一〇

一八九〇、十一月三日

今日は天長節である。日本國中の大祭日である、この日は授業はない。が八時に學生教師悉く天長節を祝するために尋常中學校の大講堂に集る。

講堂の教壇に黑い絹をかけた卓が置いてある、この卓の上に天皇、皇后兩陛下の御眞影が金の枠に入れて相ならべて眞直に安置してある。教壇の上になつた部分は旗と花環で裝飾してある。

そのうちに市長、聯隊區司令官、警部長、その他凡ての縣官を引きつれて知事が來る、金モールの大禮服をつけた知事はフランスの將官のやうに見ゆる。これ等の人々は教壇の左右に默して座につく。つぎに學校のオルガンが突然ゆるやかな嚴肅な美はしい國歌を奏し始むる、凡ての列席者は百代の敬愛をうけて尊くなつて居るこの古への歌詞を歌ふ、

きみが——あ世——をは
ちよに——い——いやちよにさざれ——

いしの
いはほとなりて
こけの
むーうすーうまーあーあーて

國歌が終る。知事は講堂の右側から威嚴のある徐ろな步調で敎壇と御眞影の前方の場所の中央に進み、御眞影に向つて鄭重なる敬禮をする。つぎに敎壇の方へ三步進んで止り、再び敬禮する。つぎに更に三步進んで最敬禮をする。つぎに六步退いて又敬禮をする。それから席にかへる。

そのあとで敎師は六人づつ同じ美はしい敬禮をする。悉く御眞影に對して敬禮を終つた時、知事は壇に上つて生徒に向ひ、天皇、國家、及び敎師に對する學生の本分について少しの巧妙なる注意を與ふ。それから再び國歌をうたふ、そして一同はその日の殘りを面白く過さうとして退散する。

一一

一八九一、三月一日

尋常中學校の生徒の過半數はただ通學生（フランスてならエキステルンと云ふところ）である。午前學校に行き、正午に歸りて晝飯をたべ、再び短い午後の課業に出るために一時にかへる。市の生徒は悉くその家庭に居るが市中に親戚をもたない邊鄙な田舍から來て居る多數の生徒がある、そこてこれ等のために學校には寄宿舍の設けがある、そこでは特別な敎師がゐて健全な道德的訓練を行ふて居る。しかし餘力あつて別に下宿（但し風儀のよい物に限る）を選ぶ事も、又はどこかよい家庭に宿を求むる事も彼等の自由に任せてある、しかしこの二つの何れかを選ぶものは餘りない。

私は日本程敎育の費用が安價なるところはどこかにあるだらうかと疑ふ。しかもその敎育は、最も優秀なそして進步した敎育てある。出雲の學生は、それを記述しただけて讀者を驚かす事疑を容れない程、西洋人の必要なる費用なる物の考よりも、遙かに少い金額て生活する事を得るのてある。米貨殆んど二十弗（譯者注）に相應する高があれば、一ヶ年の下宿料に充分てある。授業料をこめて一切の費用は一ヶ月七弗程てある。間代と一日三度の充分なる

食事のために四週間毎に一圓八十五錢を拂ふに過ぎない。卽ち米貨一弗半よりも多くはない。もし非常に貧窮なれば制服を着るにも及ばない、しかし上級の殆んど凡ての生徒は制服をつけて居る、帽、革の靴をこめて一切の制服の費用は、安い方にすれば三圓半程にすぎない。革の靴をつけない者は學校に居る間は、騷々しい下駄を輕い草履にはきかへねばならない。

譯者註。二十弗は二十圓、當時は下宿料一ヶ月一圓五十錢程であつた、寄宿舍では一圓八十五錢であつたとここに記してあるから七弗卽ち七圓は過大。

一二 IV

しかし尋常中學校に於てさほど立派に與へられる智育は、結局、生活の安い事、授業料の安い事などから想像せられるやうに、さほど安くは得られない。卽ち自然は更に高い授業料を要求して、嚴重に、人の生命に於てその負債をとり立てるからである。

この道理を理解するためには、先づ現今の出雲の學生が米飯と豆腐を喰べながら學ばねばならない近世の學問は、贅澤なる肉食によつて强健になつた頭腦によつて發明され發達

され總合されたのである事を知らねばならない。西洋が日本人の前になげ出した文明を消化する事が充分できるためには、一般の粗食と云ふ事は日本の教育者が解かねばならない難問題である。ハーバート・スペンサーが示した通り、人間の元氣の多少は肉體的精神的何れを問はず食物の滋養如何による物である、そして歷史は美食の人種は氣力旺盛かつ優勝なる事を示して居る。列國民の將來に於て恐らく頭腦が勢力を占むるであらう、しかも頭腦も活力の一つであるからやはり胃を通じて養はれねばならない。全世界を動かした思想でパンと水とでできたものはかつてなかつた、これ等の思想は、ビフテキとマトンチョップ、ハムエッグ、豚肉とプデンによつてつくられ、さらに强い葡萄酒、强い麥酒、强いコーヒーによつて刺激されたのである。又科學は生長ざかりの少年青年は大人よりも更に一層の滋養物を要する事、殊に又學生は頭腦の勞働より起る肉體的疲勞を恢復するために强い滋養を要する事を教へる。

しかも勉學のために日本の學校生徒の身體が受くる疲勞は如何程であるか。それは歐米の學生の身體が同じ年頃に於て受ける物よりは、たしかに大きいのである。日本の少年に漢字の眞草行の三體や、正確ではないがもつと簡單な言葉で云へば日本文學にある莫大なる文字について必要なる知識だけを具へるために七年の勉學が必要である。その文學も學

ばねばならない、國語の二種類の技術卽ち言文の二體を學ばねばならない、勿論、同じく國史と國民道德を學ばねばならない。これ等東洋の學問の外にさらに履修すべき學科として、外國歷史、地理、算術、天文、物理、幾何、生物學、農學、化學、圖畫、及び數學がある。最も困る事には、英語を習はねばならない、この英語の日本人に困難な事は日本語の組立てを知らない人には想像もできない、この英語なる物が日本語と非常に違つて居るので、極めて簡單な日本語の句でも、言葉の直譯や、或は思想の形だけの直譯だけでは、とても理解する事はできない。そして日本の學生は英國の少年がとても生きて居られないやうな食物をたべながら凡てこれ等の學問を學ばねばならない。その上いつでも貧しい木綿のうすい着物を着て、大寒の時でも敎場にはただ灰の中に赤い炭の少し入つて居る火鉢が一つあるだけで、外に何の火の氣もない。日本帝國が彼等に與へた課程を立派に通過した學生でも、その長い勉强の結果は西洋の學生によつて表はされた結果と同じ程度には殆んどならないのは不思議な事であらうか。追々に學生の境遇もよくなりかけて居る、しかし現在の處新しい過勞のために若い身體若い頭腦の破壞し去る事が餘りに多い。しかも破壞し去るのは鈍い人々でなく、かへつて學校の花、級中の秀才である。

一三

しかし學校の經濟の許す限り生徒を健康にかつ愉快にするためのあらゆる方法、——運動及び娯樂の種々の機會を與ふるためのあらゆる方法は講じてある。勉學の課程は嚴重だが時間は長くはない、そして毎日五時間のうちの一時間は兵式體操に捧げてある、政府から授けてある本當の銃や劍を用ふるので生徒には一層興味がある。學校の近くに立派な運動場がある、ブランコや平行棒や木馬などが備へてある、中學校だけの體操敎師が二人ある。ボートがある、天氣さへよければいつても美しい湖上で面白くこぎ廻る事ができる。知事自ら監督して居る劍道の道場がある、知事は目方の重い人だが、知事の時代の最も巧妙な擊劍家の一人と云はれて居る。敎へられて居る型は古風の物である、劍を使ふに兩手を用ふるのである、突く事は餘りない、殆んど悉く重い打ち込みである。竹刀は竹の長いササラを結んで昔ローマのファシーズ（束棒）を長くした形に似たやうにできて居る、面とさしこの上衣はその打擊がひどいから頭と胴を保護して居る。この種類の擊劍は非常の敏捷を要する、そして私共の西洋のもつとはげしい流儀よりも一層盛んな運動になる。しかし又別

種類の健康なる運動は著名の地へ遠足をする事である。このために特別の休暇ができて居る。生徒は列をつくり、愛する數人の先生に伴はれ、事によれば彼等のために料理をしてくれる小使をつれて町から出かける。かくして百哩或は百五十哩も旅をする、そして又かへる、しかしもしその旅行が非常に長い場合にはただ強壯な生徒だけが行く事を許される。ワラヂ卽ち素足にきちんと結んである本當の藁の履物ででかける、ワラヂは全く足を伸縮自在ならしめる、豆をつくつたり雞眼(タコ)をでかしたりなどしない。夜は寺に寢る、そして料理は野營の兵士の料理のやうに野天に於てなされる。

このやうなはげしい運動を餘り好かない者には學校の書庫がある。これは年々に增加して行く。生徒が編輯し發行する月刊の學校雜誌がある。又生徒會がある、その定期の會には生徒に興味があると思はれるあらゆる問題について討論が催される。

譯者註。棒を束ね其間より斧の刄を現せしもの、長官外出の時隨行員が擔ひて先頭せし物（ローマ史）

三四五年級の生徒は私の出すやさしい題について短い英文を一週一回書いて見せる。概して問題は日本に關する物である。日本の生徒にとつて英語の非常にむつかしい事を考へて見れば、私の生徒のうちの或者が彼等の思想を英語で表はす技倆は驚くべきである。彼等の作文は、個人の性格ではなく國民的感情又は或種の集合的感情の現れたる物として私にとつて又別種の興味がある。普通の日本の生徒の作文に於て私に最も驚くべき事と思はれるのは、彼等は全く個人的特色をもたない事である。二十の英作文の手蹟までも奇妙に親類的相似を有せる事が分る、この結論を動かす事ができない程に、著しい除外例は先づない。ここに私の机上に最もよい作文の一つがある、その級中の一番の生徒の書いた物である。ただ云ひまはし方について僅かの誤りを直したに過ぎない。

月

『月ハ悲メル人ニハ悲シク見エ、幸福ナ人ニハ愉快ニ見エル。月ハ旅行スル人ニ故郷ヲ思ハセテ懷郷病ヲ起サセル。故ニ逆臣北條ノタメ隱岐ニ流サレタ後醍醐天皇ハ海岸デ月光ヲ見テ「月ハツレナシ」ト叫ビ給ウタ。

我等ハ雲ナキ月ヲ見ル時、我等ノ心ニ名狀シ難キ感情ヲ起ス。

我等ノ心ハ月光ノ如ク澄ミ且ツ平静デアルベキデアル。

詩人ハヨク月ヲ日本ノ鏡ニ比ベル、滿月ノ時ニハソノ形ハ全ク同ジデアル。

風流ナ人ハ月ヲ見テ樂ム、コノヤウナ人ハ月ヲ見ルタメニ水ニ臨ング家ヲサガシ、

ソシテ月ニ關スル詩歌ヲツクル。

月ヲ見ルニ最モヨキ場所ハ月ケ瀨(櫻者注一)ト姨捨山デアル。

月光ハ美醜貴賤ヲ普ク照ラス。コノ美ハシキ明光ハ我、汝ノ物デナク、一切平等凡テノ人ノ物デアル。

月ヲ見ル時、ソノ滿チ又缺クルハ凡テノ物ノ頂上ハ又ソノ降下ノ始マリデアル事ノ道理ヲ示シテ居ルト思ハネバナラナイ』

日本の教育法に全く通じない人なら、何人でも以上の作文を見て、それに思想と想像の多少の斬新な力を示して居ると思ふであらう。しかし事實はさうでない。私は同じ題の他の三十の作文に於て同じ思想及び比喩を見出した。實際中學生の同じ題の作文が如何程多數でも、必ずその思想感情に於て甚だ相似て居るのである、しかしそのために面白味が少いと云ふわけではない。概して日本の學生は、想像の方面に於ては殆んど獨創力を表はし

てゐない。その想像は數百年前、幾分は支那に於て、幾分は日本に於て、彼の爲に既に作つてあるのである。幼年時代から彼は二三の早い筆で一枚の紙に寒い朝、熱い日中、秋の夕の感じを容易に描き出すあの不思議な美術家が見たと同じやうに自然を見、又感ずるやうに訓練されて居る。少年時代から彼は古文學に見出される最も美はしい思想や比喩を記憶するやうに教へられて居る。どの少年も青空に立てる富士の形は逆さにした半開の扇に似て居る事を知つて居る。どの少年も滿開の櫻花は最も美しい紅の夏の雲が枝のうちに捉へられたやうに見ゆる事を知つて居る。どの少年も雪の上に木の葉が散つたのと白紙の上に筆で文字の散らし書きにしてあるのとの比喩を知つて居る。どの少年少女も雪の上の猫の足跡が梅の花に似て居る事、雪の上の木履のあとが二の字に似て居ると云ふ比喩の歌句(櫻者注二)を知つて居る。これ等はずつと古への詩人歌人の思想である、もつと美はしいものを發明する事は甚だ難いであらう。作文に於ける能事はこれ等の古への思想を正しく記憶し巧みに配列する事で終つて居る。

又同じやうによく學生は、生物であれ無生物であれ殆んど凡ての物に『教訓』を見出すやうに教へられて居る。私は百ばかりの題（日本の題）を與へて彼等を試みた。題が日本

の物であれば、私は彼等が必ず教訓を見出す事を知つた。私が『螢』と云へば彼等は直ちにその題を選んで燈火を買へない支那の學者が提灯のうちに多數の螢を入れ、夜になつて勉強するだけの光りを得て、後に大學者になる事を得たと云ふ話を私のために書いた。私が『蛙』と云つた時、彼等は柳の枝に飛びつかうとした蛙の撓まない忍耐を目擊して大學者にならうと志を起した小野道風の物語を私のために書いた。私がかく誘ひ出した教訓の少しの例を附加して置く。原文に於て普通のいくつかの誤りを直して置いたが少し變つた處はそのままにして置いた。

牡丹

『牡丹ハ大キク又見テ綺麗デアル、ガ、イヤナ香ヒガアル。コレハ自分ニ人間社會ニ於テ只外見上美麗ナ物デ自分等ノ心ヲ動カシテハナラヌ事ヲ思ヒ起サスベキデアル。只美ハタメニ心ヲ動カス事ハ自分等ヲ恐ルベキ不幸ナ運命ニ陷ラシムルヤウニナル事モアル。牡丹ヲ見ルニ最モヨイ場所ハ中海ニアル大根島デアル。花ノ咲ク頃ハ島中一面牡丹デ紅クナル』

龍

『龍ガ雲ニ乘ツテ天ニ行カウトスル時急ニ恐ロシイ嵐ガ起ル。龍ガ地上ニスム時ハ石又ハソノ他ノ物ノヤウナ姿ヲシテ居ルト云フ事デアル、シカシ上ル時ニハ雲ヲ呼ブ。龍ノ體ハ種々ノ動物ノ各部分デデキテ居ル。虎ノ目、鹿ノ角、鰐ノ胴、鷲ノ爪、ソシテ象ノ鼻ノヤウナ鼻ガ二ツアル。ソコニ教訓ガアル。自分等ハ龍ノヤウニナラウト勉メテ他人ノ長所ヲ悉ク見テソレヲ具備セネバナラヌ』

龍のこの文の終りに先生への手紙がついて居る。それに『私は龍などある物とは信じません。しかし龍に關する種々の話や不思議な繪があります』と云つてある。

蚊

『夏ノ夜私共ハカスカナ聲ノヒビキヲ聞ク、ソシテ小サイ物ガ來テ、甚ダヒドク私共ノ體ヲ刺ス。コレヲ蚊ト呼ブ、英語デハ『もすきとーず』私ハコノ刺サレル事ハ有益ト思フ、何故ナレバ私共ガソロソロ居眠リヲ始メルト蚊ガ來テ、小サイ聲ヲ發シナガラ刺ス、ソコデ私共ハ刺サレテ勉強スルヤウニサマサレル』

つぎは十六歳の少年のものであるが、餘り知らない問題について半解の知識を示した物として特色があると云ふ點でここへ出す。

歐洲ト日本トノ習慣

『歐洲人ハ甚ダ狹イ着物ヲ着ル、又家ニアツテモ常ニ靴ヲハイテ居ル。日本人ハ甚ダユルイ着物ヲ着テ、戸外ヲ歩ク時ノ外ハ靴ヲハク事ハナイ。

私共ノ非常ニ不思議ニ思フ事ハ歐洲デハ凡テ妻ハ兩親ヨリモ夫ヲ餘計ニ愛スル事デアル。日本デハ夫ヨリモ兩親ヲ多ク愛シナイ妻ハナイ。

又歐洲人ハ妻ト路ヲ歩ク、私共ハ八幡ノ御祭リノ時ノ外ハソンナ事ハ全クシナイ。

日本婦人ハ男子ノタメニ女中ノ如ク使ハレ、歐洲婦人ハ主人ノ如ク尊敬サレル。私ハコレ等ノ習慣ハ何レモ惡イト思フ。

私共ハ歐洲婦人ヲ遇スル事ハ甚ダ面倒ナ事ト思フ。ソシテ私共ハ何故婦人ガ歐洲人ニサホドマデニ尊敬サレルカ、ソノ理由ヲ知ラナイ』

外國の問題に關して教場での會話も亦同じやうに面白く又啓發される事が屢〻ある。

『先生、歐洲人が自分の父と妻と一緒に海に落ちたと假定して、そして自分だけ泳げる場合には先づ自分の妻をさきに助けようとすると聞いてゐますが本當でせうか』

『多分さうでせう』と私が答へる。

『何故でせう』

『一つの理由は歐洲人は弱い者を第一に、殊に女や子供を助けるのを男子の義務と考へて居るからです』

『そして歐洲人は自分の父母よりも自分の妻の方を餘計に愛しますか』

『いつてもさうと云ふわけてないが、しかし先づ大概はさうです』

『でも、先生、私共の考によればそれは甚だ不道徳です』

……『先生、歐洲人はどんな風にして赤ん坊をもつてあるきますか』

『抱いてあるきます』

『隨分つかれませう。そして赤ん坊を抱いて女はどれ程あるけますか』

『強い女なら赤ん坊を抱いて餘程あるけます』

『しかしそんな風に赤ん坊を抱いてゐますと手が使はれませんでせう』

『よくは使はれません』

『それではそんな風に赤ん坊をもつてあるくのは餘程惡いやり方です』

譯者註一。月ケ瀨と云ふから月もよからうと出雲の學生が考へた。

譯者註二。『初雪や猫の足跡梅の花』關東では犬の足跡と云ふが、北陸、山陰その他ではかく云ふ。『二の字ふみ出す木履かな』これも『二の字二の字の下駄のあと』と云ふ處もある。

⑨ 一五 VII

一八九一、五月一日

私の愛する學生は午後によく私を訪問する。彼等は始めに來訪を知らすために名刺を出す。お上りと云はれて戸口に、履物をぬぎ私の小書齋に入り、平伏してお辭儀をする、そして私共は床の上に一同坐る、この床は凡て日本の家では柔かなしとねのやうになつて居る。女中が座ぶとんと菓子と茶を持つて來る。

日本人のやうに坐るには練習が要る、そして歐洲人のうちにはどうしてもこの習慣のできない人がある。實際この習慣に慣れるためには先づ日本服を着る事に慣れねばならない。

しかし一度かく坐る習慣ができたら、これがあらゆる姿勢のうちで一番自然で又安樂な姿勢である事が分る、そして食事の時、讀書の時、喫烟の時、談話の時、どうしてもこの方法を好んで取るやうになる。歐風のペンで書く場合には或はこれがよいと勸められない、私共西洋風の書き方は手首を据ゑねばならない、しかし日本の筆で書くのにはこの姿勢が一番よい、筆を使ふのには腕は全く支へられないで、肘の運動でするからである。私は一年以上も日本の習慣になれたあとで、今椅子を用ふるのが大分面倒になつて來た事を自白せねばならない。

互に挨拶して座ぶとんの上に坐つたのち、暫らくつつましく皆默つて居る、それから先づ私から口を切る。學生のうちには中々よく英語を話すのがある。簡單な文句を用ひて熟語などさけて一言一句徐ろにはつきり云へば皆によく分る。彼等の知らない言葉を用ひねばならぬ時には英和字書を參考する、それには假名と漢字の兩方でそれぞれ國語の意味がつけてある。

大概私の客は長座をするがその長座が退屈だと思つた事は殆んどない。彼等の話と思想はこの上もなく簡單で又率直である。彼等は學問をしに來るのではない、學校以外に先生に習ひに來る事は不公平だと云ふ事は知つて居る。彼等は私に特に興味があると思ふ事に

ついて重に話をする。どうかすると殆んど話をしない事がある、しかし一種の愉快な默想に耽つて居るやうに見える。彼等の來る眞の理由は同情、意氣投合の靜かな喜びを得んがためである。智力上の同情でなく、只全く好意を表はす同情である、友人と全く氣樂にして居られる時の樂しさである。彼等は私の書物や繪をのぞく、時々私に見せるために書物や繪（よほど面白い變つた物）、私には買へないのが甚だ殘念なやうな、祖先傳來の家寶などを持つて來る。彼等は又私の庭園を見る事を好んで私よりもはるかによくその庭にある物を賞玩する。よく花をもつて來てくれる。どんな事があつても、うるさい事、失禮な事、物珍らしくせんさく好きであつたり、おしやべりであつたりする事は決してない。この上もなく丁寧で禮儀正しい事は（フランス人でも考へられぬ程の度合で）、毛髮の色や皮膚の色と同じく、出雲の少年に固有な物と見える。禮儀正しいと同じく又親切である。私を不意に喜ばせようと工夫するのが、私の少年達の特に喜ぶ事の一つである、そこで種々變つた物を私のうちに持つて來るか、或は持つて來て貰ふやうに取計らふ。

からして私が見る事の特權を得た奇妙な物、綺麗な物のうちで、阿彌陀如來の或不思議な掛物程、私を喜ばせた物はない。それは大分大きな掛物で、私に見せるために或僧侶から借りたのである。佛は片手をあげて何か說敎の態度で立つてゐ給ふ。御頭の後ろに大き

な月形の後光がある、その月の面を横切つて極めてうすくたな引ける線が流れ出て居る。御足の下には烟の渦卷のやうに重い黑い雲が渦卷いて居る。單に色彩と考案の作品として見ても、それは驚くべき物である。しかしその眞の不思議な點は、色彩や考案に存するのではない。詳しく檢べると凡ての影、雲は只鋭い眼で始めて認むる事ができる程小さい漢字の珍らしい經文からできて居ると云ふ驚くべき事實が分る。そしてこの經文は二つの名高い經、觀無量壽經と阿彌陀經の全文で『蚤の手足よりも大きくはない文字』になつて居る。そして御佛のころもの縫目のやうな強い黑線と見ゆるものは眞宗の稱名、數千遍くりかへして唱へられる『南無阿彌陀佛』の文字でできて居る。昔、何處かのうす暗い御堂で長い忍耐、愛すべき信仰の倦まない沈默の勉强を思はせる。

又つぎに私の學生の一人がその父を說いて孔子の驚くべき像を私のうちに持つて來た、この像は明朝の末に支那でできたものと云はれて居る。人に見せるのに家から外へ持ち出されたのはこれが始めてであると聞いた。以前には誰でもこの尊像に禮拜しようとする者は、その家を訪はねばならなかつた。それは全く美はしい靑銅製である。口を開いて手をあげて、何か說いて居るやうな微笑をもらせるあごひげのある老人の形である。古風な支

那靴をはいて、流れるやうな着物には不思議な神鳥[譯者註]の繪で飾つてある。肉眼では分らない微細な點まで完全にできて居るのは全く支那人の手の驚くべき巧みを表して居るやうである、一枚の齒、一本の毛髮も苟くもしないで、悉く研究の結果であるやうに見える。

又一人の學生は私を親類の家に連れてゆき、名高い左甚五郎の刻んだと云ひ傳へられる木彫の猫を見せる、うづくまつて、じつと目を据ゑた猫である、生きた猫が『これを見て背をたてて、つばを吐きかけると云はれて居る』程眞にせまつて居る。

譯者註。神鳥、不死鳥（神話）、美麗なる鳥にしてアラビヤの沙漠に五百年乃至六百年生活してのち自ら香料などを集め來り、羽翼を以て扇いで火をつくり自らを燒いて再びその灰燼中より若く美しき姿となつて再生する。五百年乃至六百年毎にこれをくりかへすと云はれる、故に不死のしるしとなる。

一六

しかし私は今日松江に住んで居る幾人かの老美術家で更に不思議な猫を造る者があらうと内心信じて居る。そのうちに老いて尊敬すべき荒川重之助氏[譯者註]がある、この人は天保時代

に、出雲の大名に種々の珍らしい物を造つた人て、私は學校の同僚によつてこの人と交際する事を得たのてある。或晩彼は私に見せるために頗る不思議な物を袖にかくして私のところへ持つて來た、それは人形てある、彫刻して彩色を施した首だけて胴はない、胴は首についた小さな着物て代りにしてある。しかも荒川が手を使ふてこの人形を動かすと生きて出るやうてある。首の後ろは老人の頭の後ろのやうてある。が、顏は嬉しさうな子供の顏てある、額は殆んどない、考へ込むやうな風はどこにもない。どちらを向いてもこれを見る人は笑はずには居られぬ程、をかしい顏をして居る。これは何にも心配などのない生れつき愉快な無邪氣な『氣樂坊』てある、英語では『陽氣な男』とても云ふのてあらう。これは原作てはないが有名な原物を模した物てある、その原作の歴史は荒川が今一方のたもとから取り出した色のさめた卷物に書いてある、そして友人はそれを私に譯してくれる。この小歴史は昔の日本人の暮らしや考の質樸な風を面白く示して居る。

『この人形は二百六十年前、後水尾天皇のために京都の名高い能面の作者によつて造られた。天皇は御寢の前、毎夜枕の傍にいつもこれを置いて、甚だこれを愛て給ふた。そしてそれにつきてつぎの歌をおつくりになつた。

世の中を　氣樂にくらせ、
何事も　思へば思ふ、思はねばこそ。

天皇崩御の後、この人形は近衞公の物となつて今もなほ同家に保存してあるさうてある。百七年程前に當時の皇太后（おくり名は盛化門院）は近衞公からこの人形を借り、その寫しを造らせ給ふた。その寫しを側に置いて甚だ愛で給ふた。

この皇太后の崩御の後、この人形は或女官に與へられたが、その姓は書いてない。その後この女官は如何なる理由かによりて髪を斷ち尼となり信行院と云ふ名をとつた。

この信行院を知れる近藤充博院法橋と云ふ人忝くもこの人形を貰つた。

さてこの記事を書く私は一度病氣にかかつた、私の病氣は氣鬱から起つた。友人近藤充博院法橋私を訪ふて『あなたの病氣を直す物を持つて居る』と云つて、うちに歸つた。そして直ちに歸つてこの人形を持つて來て私に貸した、それを見て私の笑ふやうに枕もとに置いて行つた。

その後私も信行院尼を幸に知つてゐたので、この人を訪ねてのち、この人形の歴史を記しそれについて一首の歌をよんだ」

（九十年程前の日附、記名なし）

譯者註。荒川重之助（龜齋）田雲の有名なる彫刻家。

⑨ 一七

ある種類の世間の信仰については學生等は健全な懷疑をもつて居ることが分る。無學な階級殊に農民の間に昔からあつて今も行はれて居る迷信、たとへばお守りやお札を信ずるやうな事は科學的教育によつて急速に滅亡しかけて居る。佛教の外形――偶像、佛骨、通俗な儀式――は殆んど一般の學生に何等の感動を與へない。學生は外人のやうに、偶像や宗教上の傳説や比較宗教には興味をもたない、十中八九は周圍にある世間の信仰を代表せる種々の物について寧ろ恥辱を感じて居る。しかし凡ての形式の根本にある深い宗教心は彼等に存して居る、佛教にある一元的思想は新教育のために薄弱にならないで、かへつて發達生長するやうになつて居る。低級の佛教に及ぼす學校の影響は同じく又低級の神道にも及んで居る。學生の全部、或は殆んど全部は皆眞面目な神道に屬して居る、しかし或一